

331.32-Ma39ウ



1200500737224

岩波文庫

1502-1504

マルサス

經濟學原理

下卷

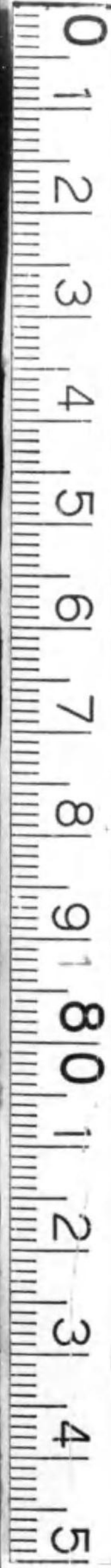
吉田秀夫譯

岩波書店

1.32

139

(2)



始



33 1.32

MA 39-
127



岩波文庫

1502—1504

マルサス

經濟學原理

下卷

吉田秀夫譯



岩波書店

AM
(S)

目次

第四章 労働の勞賃に就いて……………七

 第一節 労働の勞賃（²の定義、及び其¹）の供給及び需要への依存に就いて……………七

 第二節 労働階級の習慣に主として影響を及ぼす原因に就いて……………一六

 第三節 労働に對する需要及び人口の増大に主として影響を及ぼす原因に就いて……………二七

 第四節 （エドワード三世の治世よりの労働の穀物勞賃の回顧）¹貨幣の價值の下落が、労働に對する需要及び労働者の状態に及ぼす影響に就いて……………四九

 第五節 過去五世紀間の穀物及び労働に關する以上の回顧より推斷せらるべき結論に就いて……………六六

第五章 資本の利潤に就いて……………八〇

 第一節 （利潤の性質、及び其の測定法に就いて）¹利潤が生活資料獲得の困難の増大によつて影響を蒙ることに就いて……………八〇



(第二²節) 利潤の制限原理に就いて……………九三

(第三²節) 利潤の規制原理に就いて)【第二¹節 利潤が、資本が労働に對して採る比例によつて、影響を蒙ることに就いて】……………一〇一

(第四²節)【第三¹節】 利潤が實際に働いてゐる原因によつて影響を蒙ることに就いて……………一二九

(第五²節)【第四¹節】・リカアドウ氏の利潤論に關する評論……………一四〇

第六章 富と價值との區別に就いて……………一六三

(第二²篇)

(第一章)【第七¹章】 富の増進【の直接原因】に就いて……………一七五

第一¹節 この特殊研究目的の説明……………一七五

第二¹節 富の繼續的増大に對する一刺戟と考へられたる人口の増大に就いて……………一七七

第三¹節 富の増大に對する一刺戟と考へられたる、蓄積、又は資本に追加せんが爲めの收入よりの貯蓄に就いて……………一八一

第四¹節 富の繼續的増大に對する一刺戟と考へられたる土壤の肥沃度に就いて……………二一〇

第五¹節 富の繼續的増大に對する一刺戟と考へられたる、労働を節約する發明に就いて……………二五三

第六¹節 富の繼續的増大を保證する爲めに、生産力と分配手段とを結合するの必要に就いて……………二七四

第七¹節 全生産物の交換價値を増大する手段と考へられたる、土地財産の分割により惹起される分配に就いて……………二九七

第八¹節 生産物の交換價値を増大する手段と考へられたる、内外の通商により惹起される分配に就いて……………三二一

第九¹節 全生産物の交換價値を増大する手段と考へられたる、(個人²的奉仕及び)不生産的消費者によつて惹起される分配に就いて……………三四九

第十¹節 一八一五年以來の労働階級の慘苦への前の諸原理の或るもの適用、並びに概観……………三七八

譯者解題……………四二一

第四章 労働の賃に就いて

第一節 労働の賃（の定義、及び其）の供給及び

需要への依存に就いて

労働の賃とは、労働者に、彼れの「個人的」力作に對し支拂はれる、報償である。

それは、「貨物の價格と同様に、眞實賃及び」名目賃（及び眞實賃）に分たれ得よう。

【労働の眞實賃は、生活の必需品、便宜品、及び娯樂品で測定されたその價值から成る。

【労働の名目賃は、貨幣で測定されたその價值のことである。

【労働の價値は、貨物の價値と同様に、最も屢々貨幣と比較せられる故に、一般にはこの比較法を採用し、併し必要なる場合には、その貨幣の値に、又は労働の眞實賃に、關説することが、よいであらう。

【労働の貨幣賃は、労働の需要及び供給に比較しての貨幣の需要及び供給によつて決定される。そして貨幣が殆んど同一の價値を維持すると想像せられ得べき期間中は、労働の賃の變動は、労働の供給に比較しての需要の變動によつて、左右される、と云はれ得よう。

【需要及び供給の原理は、貨物の價格と同様に労働の價格の、常に一時的にのみならず更に永續

的にも歴倒的な規制者である。そして生産費は、單にそれが労働の又は貨物の永續的供給の條件である故にのみ、それ等の價格に影響を及ぼすに過ぎないのである。

〔労働の名目賃金は貨幣から成る。蓋し文明國に於いて労働者が一般に支拂を爲されるのは貨幣であるからである。〕

(労働の眞實賃金は、労働者の貨幣労働が彼をして購買し得せしめる、生活の必需品、便宜品、及び奢侈品から成る。

(一定数の普通農業労働者の平均賃金、又は標準賃金と呼ばれ來つてゐるものが、常に同一の價值を有ち、すなはちそれが常に各國に於いて且つ總ての時に同一の基本的原費で獲得せられることは、本書の第二章第五節に於いて證示した所である。併し、労働者が報酬として與へられる貨幣や穀物や生活の必需品及び便宜品の分量が、すべて労働の需要及び供給に比較してのこれ等の物の需要及び供給によつて、大きな變動を蒙ることは、人のよく知る所である。

(若し社會が、一定分量の貨幣を、その貨幣が以前には通常それと交換されてゐた労働を購買又は獲得するに必要なよりも、それを獲得するにより、小なる労働、利潤、等の犠牲を必要とする貨物によつて、購買し得るならば、労働の貨幣價格は騰貴するであらう。若し貨幣の稀少か又は労働の豊富(二版註)かによつて、一定分量の貨幣を獲得する爲めにより、大なる犠牲が拂はねければならぬならば、労働の貨幣價格は下落するであらう。そして労働に對する有效需要の状態が如何なるものであらうとも、労働の貨幣價格が、平均的に、欲求された供給を惹起すが如くに其

の維持の爲めの財本に比例しなければならぬことは、明かである。)生活の必需品の價格が労働の價格にかくも重大な影響を與へるのは、供給の條件としてである。これ等の必需品の或る部分は労働者をして停止的人口を維持し得せしめるに、より大なる部分は増大し行く人口を維持し得せしめるに、必要である。従つて、生活の必需品の價格が如何であらうと、労働者の貨幣賃金は、彼をしてこれ等の部分を購買し得せしめるが如きものでなければならぬ、然らざれば供給は【恐らく】必要な分量に於いては起り得ない。

二版註 労働の豊富は、若しその労働が雇傭せられるならば、常に貨幣に對する需要を増大し且つ其の價值を引上げる傾向があることを、常に想起しなければならぬ。

(労働の穀物賃金は、穀物の分量の變動が短期間に貨幣の分量の變動よりも遙かにより大である爲めに、貨幣賃金よりも更に、顯著に需要及び供給の状態によつて、決定される。労働の貨幣價格が依然同一である時に異る季節に於いて穀物の價格が大いに變動することは、普く觀察され認められてゐることである。併し穀物賃金のより永續的な種類の變動は、時にこれに遙かに劣るものではない。或る國に於いて耕作に引入れられてゐる最後の土地が肥沃であり、而も若干の熟練を以て耕されてゐる時には、利潤と賃金とに分たるべき多大の生産物があるであらう、そして平均穀物賃金が高いか低いかは、この生産物の豊富なる量とその分ち方とに、併し特にその前者に、依存するであらう。例へばアメリカ合衆國に於いては、土地は豊富であり且つ肥沃であつて、爲めに農業者をして、労働者に、ヨオロッパの最大部分に於いて通常支拂はれる分量の二

倍以上たる、一年に小麦一八又は二〇クヲタアの多きを、支拂ひ得せしめて、而も豊かな利潤を
 残す程である。併し一國の労働階級は、一年に僅か八又は九クヲタアを支拂はれるに過ぎぬ時に、
 其の數を維持して餘りあり得ることは、人の知る所である。従つて、労働者は平均して八クヲタ
 アを支拂はるべきか一八クヲタアを支拂はるべきか又は何等かの其の中間の分量を支拂はるべき
 かの問題は、労働の需要及び供給に比較しての穀物の需要及び供給に依存しなければならぬ。
 併し労働者が、纏めて多年の間、穀物が本質的には低い價值ではない、すなはち少量の労働を以
 ては獲得せられない、或る國に於いて、より大なる分量を受取り得なかつたことは、明かである。
 (若し、穀物賃、又は生活の第一必需品で測定した賃に代へて、吾々が、労働階級の貨幣
 での稼ぎ高が通常それに費される一般的必需品及び便宜品より成る賃を考へるならば、然らば
 若し吾々が農業労働者は先づ穀物で支拂はれると假定すれば、必需品及び便宜品での彼れの賃
 は、部分的には彼が稼ぐ穀物の分量に、又部分的には、衣服、家屋、燃料、石鹼、蠟燭、皮革、
 等の如き、彼が必要とする他の必需品との交換上の、その穀物の價值に、依存するであらう。そ
 の一方は労働に對する穀物の供給の變化に依存し、そして他方は欲求される他の貨物に對する穀
 物の供給の變化に依存する。通常、一般的必需品及び便宜品で測定された賃は、穀物賃より
 もより、確固たるものである。蓋しそれを構成する穀物以外の物品の大抵のものは、穀物よりも季
 節によつて影響せられることより、少く、従つて其の供給に於いてより、規則的であるからである。
 併し若しこれ等の物品を穀物ではなく直接に労働と比較しても、労働者に與へらるべき其の分量

は、矢張り、常に其の生産に於ける労働の能力の變化に依存するのみならず、更に又、労働の生
 産力の一定の状態に於いて、労働者に報酬として與へられるか、る必需品の比例を決定する所の、
 供給に比較してのそれに對する需要の通常の状態に、依存するであらう。

【労働の生産費 (R註) と呼ばれ得べきものが賃に影響を及ぼすのは、單にそれが労働の供給を左
 右するからであるに過ぎぬことを、證示する爲めには、一時的事情の下に於いて、生産費が供給を
 左右しない場合に、吾々の注意を向けるだけで十分である。そしてこの場合に於いて、吾々は常に、
 この原費が價格を左右しなくなつてゐることを、見出すであらう。】

R註 マルサス氏の著作の多くの部分に於いて、貨物に適用せられたこの意見が強調されてゐる
 が、併し私は誰がそれを問題としたかを知らないのである。自然價格とは生産費の別名である
 — 貨物が市場に於いて其の自然價格で又はそれ以上で賣れる間は、それは供給されるであら
 う、従つて生産費が其の供給を左右するのである。マルサス氏は供給に比較しての需要が價格
 を左右しそして貨物の生産費が供給を左右すると云ふ。これは言葉の上の争ひである——供給
 を左右するものは何であらうと價格を左右するのである。

【豊饒な季節の経過により、又は農業者の資本を害せざる或る原因により、穀物の價格が纏めて
 或る時期の間下落する時には、労働の生産費は減少されると云はれ得ようが、併し、労働の賃が
 下落することは見られない (二註)。そしてこの低減せる生産費が、十六年又は十八年以下では、市
 場に於ける労働の供給に著しく影響し得ないのはこの明かな理由によるのである。他方に於いて、

良からず悪しからずの季節の連続により、又は労働に對する需要を以前と殆んど同一にして置く或る原因によつて、穀物の價格が騰貴する時には、勞賃は騰貴しないであらう。蓋し同一數の労働者が市場に残つてゐるからである。そして生産品の價格は騰貴してゐるけれども、供給は暫くはそれに依存する故に、従つて若し我國又は他の或る國に於いて過去二十年の間労働の生産が何物をも要費しなかつたが併しなほ需要に對し正確に同一の比例で供給されたとするならば、労働の勞賃は少しも變らなかつたであらう。この主張の眞實なることに就いては、吾々は、前の章に於いて觸れた、然らざれば流通すべかりし金屬貨幣を超過しない様に量に於いて制限された紙幣の例によつて、全く確證を與へられるであらうが、この場合には、紙幣の原費は比較的皆無であるけれども、而も、それは貨幣と同一の職能を演じ且つ同一の分量に於いてのみ供給されるに過ぎぬ故に、それは同一の交換上の價値を獲得するのである。】

一版註 一八一五年及び一八一六年に起つた労働の價格の下落は、一に、農業者の損失より生じた需要の減少により、惹起されたのであり、決して生産費の減少により惹起されたのではない。

アダム・スミスは次の如く云ふ時には實際上は全く正しい、『労働の貨幣價格は必然的に二つの事情によつて左右される。それは、労働に對する需要、及び生活の必需品及び便宜品の價格である。』(註)併し、(勞働と貨物との相對價格を決定する原因)「生産費が労働の價格に影響する正確な仕方」を吾々が絶えず觀察し、そして供給及び需要の原理の不斷の且つ優越せる作用を明白

に且つ明確に見ることは、この論題の完全な理解にとり極めて重要なことである。

註 Wealth of Nations, Book i. ch. viii. p. 180. 6th edit. (譯者註—前掲譯書、上卷、二五二頁)

アダム・スミスがかくも見事に説明し且つ例證してゐる、異なる種類の労働の(勞賃)【支拂】が明かに各様に異つてゐる總ての場合に於いては、普く、彼が正當にそれを歸した原因は、問題の特定部門に於ける労働の供給に影響を及ぼす【す】¹、且つ必要とされる種類の労働の供給に比較しての需要によつてかゝる勞賃を決定する性質を有する原因であることが、見出されるであらう。彼によれば、或る職業に於ける少額の貨幣利得を償ひ、且つ他の職業に於ける大なるそれを相殺する、五つの主要事情、すなはち、一、職業自身の快適性、又は非快適性、二、その習得の容易及び低廉、又は困難及び出費、三、それに於ける職業の恆久性、又は非恆久性、四、それを實行する者に委ねられなければならぬ信任の大小、及び、五、それに於ける成功の蓋然性又は非蓋然性は(註)、總て明かにこの種のものである。そして(註)に述べた場合)【この事例】の多くに於いて、それが異なる種類の労働の價格に及ぼす影響を或る他の原理によつて説明する事は、容易ではないであらう。例へば、何故に密獵者の生産費が普通の労働者よりもより少いか、又は石炭入夫の生産費が遙かにより大であるかは、殆んど分らない。而も彼等は極めて異つた支拂を受けるのである。労働者に委ねられなければならぬ信任の大小、又は彼れの仕事に於ける成功の蓋然性又は非蓋然性が、勞賃に及ぼす影響を、彼を市場に齎らすに使用せられた労働(利潤等)の分量に還元することは、より容易ではない。アダム・スミスは、辯護士の全體は、この全

體の教育が要費した出費を支拂ふに足る報償を受けてゐないことを、十分に證示してゐる(註一)。そして取引及び自由職業の兩者に於ける特殊の熟練が、才能が優れてゐる爲めに、劣れる上達を得る爲めに屢々用ひられる勞働よりも、屢々より少い所の、その獲得の爲めに使用される勞働には、殆んど無關係に、高き支拂を受けることは、明かである。併し總てのこれ等の場合は、最も容易に且つ最も自然的に供給及び需要の原理によつて説明せられる。優れた美術家は、異常な勞働により惹起されたものであらうと、異常な天才により惹起されたものであらうと、又その兩全體としての辯護士は良き報償を得てゐないが、蓋し單なる利得の外に、他の動機の普及が、この職業に候補者を集まらせ、従つて供給は教育費によつて左右されないからである。そして何等の種類の不利益又は困難が特定の職業に伴ふ總ての場合に於いては、若し報償の追加がかゝる不利益を相殺するに足りないならば、他の事情にして等しき限り、凡ゆる者は最も快適な最も困難ならざる且つ最も不確實ならざる職業に従事することを選ぶ爲めに、これ等の部門に於ける勞働の供給は不足になるであらうから、比較的の高き支拂が爲されなければならぬことは明かである。かくして惹起された不足は、それが起る時には常に、當然に勞働の價格を引上げるであらう。そして價格のこの騰貴は、或る僅少の擱動の後には、(有效需要に適せる供給を惹起す)【必要な供給を爲す】に正に足る點で靜止するであらう。

註一 Wealth of Nations, B. I. ch. x. part 1. p. 152. 6th ed. (譯者註——前掲譯書、上卷、二八四頁)

註二 Id. p. 161. (譯者註——同上、二九五頁)

アダム・スミスは、一般に、この種の場合に於いて、供給及び需要の原理に關説してゐるが、併し彼は時々それを忘れてゐる。——彼は曰く、『若し或る種類の(註一)勞働が、異常の程度の機敏と器用とを必要とするならば、かゝる才能に對して人々が拂ふ尊敬は、彼等の生産物に、それを使用せられた時間による價值以上を與へるであらう。』(註二)又他の場所に於いて支那を論じて彼は曰く、『若しかゝる國(すなはち停止的資源を有する國)に於いて、勞賃が嘗て勞働者を維持し且つ彼をして一家を養育するに足るよりも、多くなつたならば、勞働者の競争と主人の利益とは、間もなくそれを、人類共通の人道心と相容れる最低率に、引下げることであらう。』(註三)讀者は、既に述べたる所よりして、こゝに指摘された第一の場合に於いては、この貨物の價格を引上げるものは、(單に)關説された機敏と器用とに對する尊敬ではなく、需要に比較してのその稀少と、その結果たるそれによつて生産される物品の稀少とであることを、知るであらう。そして後の場合に於いては、介入して勞働の價格が更に、低く下落するのを妨げるものは、人類共通の人道心ではない。若し人道心が有効に介入し得るならば、それは遙かに前に介入し、そして何等かの早死が悪い又は不十分の食物によつて惹起されるのを妨げた筈である。併し不幸にして人類共通の人道心は(勞働の維持の爲めの財本)【一國の資源】を變更し得ない。これが停止的であり、そして下層階級の習慣がそれを促して停止的人口を低廉に供給せしめる間は、勞働の勞賃は乏しいであらう。併しなほ、それは、人民の現實の習慣の下に於いて停止的人口を維持す

るに必要なもの以下には、下落し得ない。蓋し、假定によれば、(労働の維持の爲めの財本)
 【この國の資源】は停止的であつて増加的又は下降的ではなく、従つて需要及び供給の原理は常
 に介入して人民の増大か減少かを惹起す如き勞賃を防止するであらうからである。

R註 これは意思が人々をしてそれに對しより多くを喜んで與へしめると云ふことであるが、併
 し其の價値はこの喜んで望むことによつては左右されず、供給によつて左右され、この供給は
 又それで父親が其の子供にこの機敏と器用とを與へるに當つて感ずる利益と、それを與へるの
 費用とに、依存するであらう。若しそれを労働者が容易に且つ僅少の費用で彼等の子供に與へ
 ることが出来るならば、それが如何に尊敬されようとするそれは僅少の價値しか有たないであら
 う。

註1 Wealth of Nations, Book I, ch. vi, p. 71, 6th edit. (譯者註——前掲譯書、上卷、一八〇頁)
 註2 Id. chap. vii, p. 108. (譯者註——同上、第八章、二二六頁)

第二節 労働階級の習慣に主として影響を及ぼす原因に就いて

リカアドウ氏は(R註)、労働の眞實價格を定義して、『労働者達をして、それぞれ、生存し且つ
 彼等の種族を増減なしに永續するを得しむるに必要な所の、その價格』(註)である、としてゐ
 る。私はこの價格を最も不自然な價格と呼び度い。蓋し自然的事態に於いては、すなはち(蓄積

の進行に對する不自然な)【富及び人口の増進に對する大なる】障害なくしては、かゝる價格は、
 (土壤の耕作又は輸入の力が極度迄行はれるに至る迄は、如何なる國に於いても永續的に)【數百
 年の間一般に】起り得ないからである。併し若しこの價格が實際稀であり、そして通常の事態に
 於いては極めて距つた時點にあるのであるならば、労働の市場價格を以て、その固定的價格の上
 下への一時的乖離に過ぎず、それに極めて速かに恢復するものと、考へることは、明かに大きな
 誤謬に導かなければならぬ。

R註 私は同様な總ての場合に適用すべき一つの共通語を有ち得る爲めにかうしたのである。自
 然價格といふ私の意味は通常價格のことではなく、一定の需要を不斷に供給するに必要な如き
 價格のことである。穀物の自然價格とは、それが通常利潤を與へ乍ら供給され得る價格のこと
 である。より大なる分量に對する需要がある毎に、穀物の市場價格はこの價格以上に騰貴する
 であらう、そして恐らく決して自然價格にはなくそれ以上又は以下にある、——同一のことが
 労働の自然價格に就いても云はれ得よう。

註 Poitt. Econ. c. v. (p. 86, 3rd edit.) [p. 85, 2d edit.] (譯者註——前掲譯書、九二頁)

或る國に於ける労働の自然價格又は必要價格は、社會の現實の事情に於いて、労働者の平均的
 需要に應ずるに足る(有效)【平均的】供給を惹起すに必要な、價格である、と私は定義し度い
 (二版註)。そして市場價格は、一時的原因によつて、この【平均的】需要を供給するに必要なもの
 の時に以上に又時に以下にある、市場に於ける現實の價格である、と私は定義し度い。

二版註 吾々は殆んど同様に正當に、利潤の自然率を以て、丁度資本を増減なしに維持する如き率である、と定義し得るであらう。これは實際上利潤が不斷にそれに向つて一致せんとしつゝある率である。

社會の勞働階級の状態は、部分的には、(勞働の維持の爲めの財本)【國の資源】と勞働に對する需要とが増大しつゝある比率に、又部分的には食物、衣服及び住居に關する人民の習慣に、明かに依存しなければならぬ。

若し人民の習慣が固定されてゐるとするならば、早婚の能力と大家族を支持する能力とは、(勞働の維持の爲めの財本)【國の資源】と勞働に對する需要とが増大しつゝある比率に、依存するであらう。そして若し(かゝる財本)【國の資源】が固定されてゐるとするならば、社會の下層階級の愉快は、彼等の習慣に、又はそれなくしては彼等がその數を(必要な點に)維持することを肯んじない必需品及び便宜品の額に、依存するであらう。

併し乍らそれ等の何れか、或る長期間を通じて固定されてゐることは稀である。(勞働の維持の爲めの財本)【一國の資源】が増大する比率は、異なる事情の下に於いては、大なる變化を蒙り易いことは、吾々のよく知る所である。そして人民の習慣は、かくの如く變化を蒙り易く又はかくの如く必然的に變化を蒙るものではないが、殆んど決して永續的なりとは考へられ得ない。一般にそれ等の傾向は相共に變化するにある。(勞働の維持の爲めの財本)【一國の資源】が急速に増大しつゝあり、そして勞働者が必需品の大きな部分を支配してゐる時には、若し彼が過剰の食物を便宜品及び愉樂品と交換するの機會を有するならば、彼はこれ等の便宜品に對する嗜好を獲

得し、そして彼れの習慣はこれに従つて形成されるであらう、と期待せられなければならない。他方に於いて、一般に(勞働の維持の爲めの財本)【一國の資源】が殆んど停止的になる時には、かゝる習慣は、それが嘗て存在してゐても、失はれるのが見られ、そして人口が停止するに至らぬ内に、愉快の標準は本質的に引下げられるのである。

併し乍らなほ、部分的には物理的な、又部分的には道徳的な原因により、愉快の標準は、異なる諸國に於いては、その(勞働の維持の爲めの財本)【資源】の増大する比率が同一であつても、本質的に異つてゐる。アダム・スミスは、英蘭に於ける同一地位の隣人に比較して、スコットランドの人民の食物が劣つてゐることを論じて、曰く、『彼等の生活様式のこの相違は、彼等の勞賃の相違の原因ではなくして結果である、併し奇妙な誤解によつて、それが原因であると云はれるのを私は屢々耳にしてゐる。』(註併し乍ら、一般の意見のこの訂正は、單に部分的に正當であるに過ぎないことが、認められなければならない。多くの他の場合に於ける如くにこの場合に於ける結果は又それで確かに原因となる。そして若し或る期間低き勞賃が繼續した爲めに、或る國の勞働者の間には、辛うじて生活し得るだけの見込で結婚するの習慣が、産み出されるならば、かかる習慣は、必要とされる勞働量を低き比率で供給することによつて、低き勞賃の不斷に作用する原因となるであらうことは、疑ひがないのである。

註 (Wealth of Nat.) Book I. chap. viii. p. 114. 6th edit. (譯者註—前掲譯書、上卷、二三四頁)

異なる諸國の下層階級の人民の間に於ける異なる生活様式を決定する主たる原因が何であるか、を

確かめるのは極めて望ましいことであらう。併しこの問題は極めて多くの考察を含むものであり、従つてその満足な解決は殆んど期待され得ない。多くは確かに氣候及び土壤といふ物理的原因に依存しなければならぬ。併し更に、多くは恐らく、その形成と作用とが各種各様の事情による所の、道徳的原因に依存しなければならぬ。

高き（眞實）勞賃、又は生活の必需品の大なる部分を支配する能力より、二つの極めて異なる結果が生ずるであらう。すなはちその一方は、人口の急速なる増大といふ結果であり、この場合には高き勞賃は主として大なる且つ多數の家族の維持に費される。そしてその他方は、それに比例する増加率の促進を伴はざる、生活様式及び享受される便宜品及び愉樂品の決定的改良といふ結果である。

これ等の異なる結果を注視するならば、それ等のものゝ原因は異なる國の人民の間に且つ異なる時に存在する異なる習慣であることが、わかるであらう。これ等の異なる習慣の原因の研究に於いて、吾吾は一般に、（古國に於いて（三版註））第一の結果を産み出すものを、下層階級の人民を壓迫するに寄與する總ての事實に辿ることを得るであらうが、それは彼等が過去から將來へと推理する能力と意思とを奪ひ、そして彼等を現在の満足の爲めに愉樂と體面との極めて低き標準に何時でも黙從せんとするに至らしめる。そして第二の結果を産み出すものを、社會の下層階級の品性を向上せしめる傾向ある總ての事情に辿り得るが、それは彼等をして、『前後を見廻し、』従つて彼等自身及び彼等の子供が立派に、有徳に且つ幸福になる手段を失ふといふ考へに忍耐強く黙從し得な

い所の人（として行動）【に最も接近】せしめるのである。

二版註 合衆國の如き新國に於いては、勞働の維持の爲めの財本は極めて豊富であり、且つ極めて急速に増大しつゝあるので、爲めに、可成りの間、早婚に對する慎慮的妨げは殆んど必要でないであらう。

第一に述べた品性の形成に寄與する事情の中では、最も有力なるものは専制、壓制、及び無智であり、後の品性に寄與するものゝ中では、市民的及び政治的自由、及び教育であることが、見出されるであらう。

社會の下層階級の間に慎慮的習慣を發生せしめる傾向ある總ての原因の中で、最も本質的なるものは疑ひもなく市民的自由である。彼等の勤勉な力作が、正當であり貴重なるものである限り、自由な活動の餘地を有つことを許され、そして彼等が所有するか又は獲得すべき財産は、公平に施行されてある良き法律の周知の法典によつて、彼等に確保せられるであらう、と確信し得ない者は、何人も將來の爲めの計畫を造る習慣を多く得ることは出来ない。併し、市民的自由は、政治的自由なくしては、永續的に確保せられ得ないことは、經驗によつて見出されてゐる。従つて、政治的自由は殆んど等しく缺くべからざるものとなる。そしてそれがこの見地に於いて必要であるのに加へて、上流階級をして下層階級を尊敬することを餘儀なからしめることによつて、下層階級に彼等自身を尊敬することを教へる、其の明かな傾向は、市民的自由の總ての良き結果を助力するに大いに寄與しなければならぬ。

教育に關して云へば、それは確かに悪き形態の政府の下に於いても一般化せられ、そして他の

點に於いては良き政府の下に於いても極めて不足してゐることもあらう。併し、其の性質に關しても又其の普及に關しても、後者の方が遙かにありさうなものであるのを、認めなければならぬ。教育はそれのみでは財産の不安固に對して殆んど何事をも爲し得ないであらう。併しそれは、それなくしては實際完全とは考へられ得ない市民的及び政治的自由より期待さるべき總ての都合な結果に、有力に助力するであらう。

人民の習慣がかゝる不都合な事情によつて決定されてゐるか又は好都合な事情によつて決定されてゐるかに従つて、高き勞賃、又は勞働の維持の爲めの財本の急速なる増大は、前述の第一の結果を伴ひ又は第二の結果を伴ふであらう。又はそれは少くとも、不愼慮又は愼慮の習慣に影響を及ぼす總ての原因が働いてゐる（程度の異なる）【比例】に従つて、その一方又は他方に接近する結果を、伴ふであらう。

アイルランドは、前世紀の間、恐らく第一の結果の最も顯著な例とされ得よう。馬鈴薯がその國に持込まれた爲めに、社會の下層階級は、彼等が食物を、而も最も低廉な種類の食物を、獲得し得る限り、彼等は凡ゆる他の缺乏に曝されるといふ見通しの下に於いても結婚することに甘んじた程の、憂苦と無智との状態にあり、他人から殆んど尊敬されず、従つて殆んど自尊心もなくなつた。屢々勞働者に、ヨオロッパの他の地方に於いては全く異常な分量の生活資料の支配力を、與へた所の、好適な土壌に於ける馬鈴薯の耕作によつて惹起されたる、勞働の支持の爲めの豊富な財本は、殆んど専ら、大なる且つ數多き家族の維持に費された。そしてその結果は、勞働貧民

の一般的状態及び生活様式の殆んど又は何等の改善をも伴はざる、人口の極めて急速な増大であつたのである。

第二（の結果）に稍々接近してゐる一例は、前世紀の前半に於ける英蘭に於いて見出され得よう。この時期の間に穀物の價格は大いに下落したことは人のよく知る所であるが、他方勞働の（價格）【勞賃】は騰貴したと述べられてゐる。十七世紀の最後の四十年間と十八世紀の最初の二十年間とに於いては、穀物の平均價格は、勞働の勞賃に比較して、勞働者をして、一日の稼ぎ高を以て、（單に約）三分の二ペックの小麥を購買し得せしめる程であつた。一七二〇年より一七五〇年に至る迄に、小麥の價格は極めて下落し、他方勞賃は騰貴したので、爲めに勞働者は、一日の勞働を以て、三分の二ペックではなく、全一ペックを購買し得たのである（註）。

註 本章第四節を見よ。

併し乍ら、生活の（第一）必需品に對する支配力のこの大なる増大は、それに比例する人口の増大を産み出さなかつた。この時に我國の人民は（良き）【優れたる】政府の下に生活して居り、そして異常な程度に市民的及び政治的自由の總ての利益を享受してゐた。下層階級の人民は、法によつても亦彼等の同胞市民の上流者によつても、尊敬せられるを常として居り、従つて自らを尊敬することを學んでゐた。【そして】その結果は、彼等の増大せる（穀物）【眞實】勞賃【の大なる部分】は、人口の増大のみ（を惹起す）【の】代りに、【消費される食物の質の顯著なる改良と】彼等の愉樂品及び便宜品の標準の決定的向上（を惹起す様）に費されたのである。

同一の時期の間、スコットランド⁽²⁾に於ける労働の維持の爲めの財本⁽³⁾【の資源】は英蘭のそれの如く急速に増大した様には思はれない。併し^(前)世紀の半以來、前者は恐らく後者よりもより急速な進歩を遂げたであらう。そしてその結果として、同一の原因によつて、これ等の増大された資源は専ら人口の増大を産み出すことなく、^(その國に於ける)社會の下層階級の食物、衣服、及び家屋の大なる改善を産み出したのである。

極めて劣れる品質のパンから最良の精白小麥のパンへの一般的變化は、英蘭の南部及び中部の諸州に特有であつた様に思はれ、そして恐らく外部的事情によつて助力せられたものであらう。⁽¹⁷²⁰⁾年以後のこの國の耕作の改良は、奨励金によつて開かれた外國市場の状態と相俟つて、^(奨励金によつて開かれた外國市場の状態は、この國の耕作の改良と相俟つて)種々なる種類の穀物の價格の通常の相違を減少した様に思はれる。大麥は大いに耕作され且つ大いに輸出されたけれども、それは價格に於いて小麥程は下落しなかつた。一七四五年に終る二十年間の平均に比較して、一七〇五年に終る二十年間を平均すれば、一クヲタアの小麥は、一磅一六志三片より一磅九志一〇片に下落したが、麥芽は同一の時期の間依然同一の價格にあり、又はどちらかと云へば寧ろ騰貴した^(註二)。そして大麥はそれが三分の二の價格で購買せられ得ない限り小麥よりはより低廉な食物であるとは想像されてゐないから^(註三)、かゝる相對的相違はこの變化を促進する有力な傾向を有つたことであらう。

註一 Eden's State of the Poor. Table, Vol. III. p. 79. この表では、中等小麥ハブシェルの一クヲタアに就き九分の

二を控除してゐるが、これは過大である。

註二 Tract on the Corn Trade, Supp. p. 189.

小麥及び大麥に比較して輸出せられたライ麥の分量の小なることより、それは外國市場に於いて即刻の賣口を有たなかつたものと推論され得よう。そしてこの事情、並びに土地の状態の改良は、其の耕作と使用とを減少したのである。

燕麥に關して云へば、禁止的法律と奨励金とは、他の穀物に對する程はこの穀物に不利益ではなく、輸出せられたよりもより多く輸入せられた。このことは當然に、最も確實な賣行のある種類の穀物を栽培し得る地方に於ける其の耕作を妨げる傾向があつたであらう。他方再び販賣する爲めの穀物の買占に關するチャアルズ二世の法律は、燕麥の分配の途上に、他の何れの穀物よりもより大なる障害を投じたのである。

この法律によつて、小麥は價格が四八志を超過しない時には、大麥は價格が二八志を超過しない時には、又燕麥は價格が一三志四片を超過しない時には、將來の販賣の爲めに買占め且つ貯藏することが出來た。小麥及び大麥の制限された^(價格)「率」はその當時の其の通常且つ平均率よりも甚だしく上であり、従つて屢々其の正當な分配を妨害することはなかつた。併し燕麥の通常價格は一クヲタア約一二志と想像されて居り、従つて一三志四片といふ限界は極めて屢々突破され^(甚)、従つてそれが栽培される地方からそれが欲求せらるべき地方への其の運送には絶えず障害が投ぜられたであらう。併し若し、こゝに述べた原因により、英蘭の南方の労働階級が、よ

り低廉な種類の穀物の代りに、小麦を彼等の主たる食物として採用することを、部分的には誘はれ部分的には強制されたならば、勞賃の騰貴は直ちに、小麦の價格の下落と矛盾することなしに、説明されるであらう。これは、當時に於ける勞働に對する需要が明かに乏しい時に於いて、或る論者によつてはありさうもないことと考へられ、爲めに記録の正確性が疑はれるに至つてゐる所の、事件である。併し乍ら、勞働階級の側で優れた種類の食物を採用することに自發的に決意したと假定しても、又は、より改良された土壤に適合せる新耕作組織の採用の故に、然かすべき或る種の強制を假定しても、それは明かに可能である。そしてその何れの場合に於いても、一七二〇年より一七五〇年に至る間に觀察し得た結果が現れるであらう。すなはちそれは、それに比例する人口の増大を伴はざる（穀物）【生活の必需品】を支配する能力の増大である。恐らく雙方國に於いて一般的になつた時には、それは、異なる種類の愉樂を犠牲にしても他の諸國に擴がつて行く傾向があるであらう。そして、如何なる原因から起つたものであらうと、特定の生活様式が或る期間打倒てられた總ての場合に於いては、かゝる様式は常に變化を蒙り得るものであるけれども、この變化は時間と困難とを要することではなければならぬ。多年の間其の農民を主として一つの種類の穀物で支持して來た一國は、それが他の種類を豊富に生産し得る以前に、其の全農業組織を變更しなければならぬ。そして總ての階級の人民は習慣を頑固に守るので、或る國に於いては高い勞賃が食物の品質を改良するのが妨げられ、又他の國に於いては低い勞賃がそれを

突然惡化するのが妨げられるであらう。そしてかゝる高き勞賃又は低き勞賃は、殆んど専ら、それが人口に與へる大なる刺戟又は大なる妨げとして、感ぜられるであらう。

註 Tract on the Corn Trade, p. 50.

第三節 勞働に對する需要及び人口の増大に主として

影響を及ぼす原因に就いて

人民の習慣の變化の外に、一國の人口が、生活資料に對する勞働者の外見的支配力と歩調を合せるのを、妨げる、もう一つの原因がある。（穀物）勞賃が（勞働に對する比例的需要を伴はずに、比較的高い）【一時の間、勞働に對する需要との比例に於いてそれがあべき所よりもより高い】といふことが、時に起る。このことは、粗生生産物の價格が（勞働の價格の下落を伴はずに）下落し、爲めに耕作者が以前と同一分量の勞働を使用し得なくなるに至る）【同一の價格で同一の又は増大し行く數の勞働者を使用する耕作者の能力を減少する程に、價值に於いて下落した一時に、最も起り勝ちである。若しこの下落が（註）大であり、そして分量の増大によつて價值に於いて價はれないならば、極めて多くの勞働者が解雇せられ、爲めに勞賃は、大なる慘苦の時期の後に、一般的にそれに比例して引下げられるに至るであらう。併し若しこの下落が徐々たるものであり、そして部分的には分量の増大により交換價值に於いて價はれるならば、勞働の貨幣勞賃は必ずし

も下落しないであらう。そしてその結果は、單に、恐らくは現實の勞働者を解雇するには足らず、請負仕事を妨げ又は減少し、女子及び子供の使用を妨げ、且つ勞働者の子供の出生を殆んど助成せざる如き、勞働に對する需要の減少に過ぎぬであらう。この場合には、勞働者及び彼れの家族が現實に稼ぐ生活の必需品の分量は、價格の騰貴によつて、勞働者の受ける日々の支拂がより小なる穀物の分量を支配するに至る時よりも、實際より少いであらう。生活の必需品（註三）に對する勞働階級の支配力は、前の場合には後の場合よりも、外見的にはより大であるけれども、實際はより少く、そして、凡ゆる一般的諸原理によつて、人口の増大に及ぼす影響はより少くなければならない。

R註一 供給の増大及び需要の減少又はより低廉なる生産費によるのでない限り、それは如何にして下落し得るか？ 若しそれが需要の減少によるのであるならば、勞働者はその前に解雇されてゐなければならず、そして彼等が雇傭せられないことはこの原因には歸せられ得ない。若し他の物の供給の減少を少しも伴はずに供給が増大されるのであるならば、それは國が一般に勞働を使用する能力を減少し得ず、かへつてそれを増大しなければならぬ。農業者は貨幣地代を支拂はなければならず、従つて生産物の分量が増大しても、彼れの地代を支拂つた後に、以前に彼が有つてゐたよりもより小なる勞働支配力を有つであらうから、それは農業者の能力を減少するであらう。併し彼がより小なる能力を有つならば、他の者がより大なる能力を有たなければならぬ。地主の地代は彼をしてより多くの勞働を使用し得せしめ

るであらう。若し資本家が同一の貨幣資本を保持するならば、彼等は、若し勞賃が下落するならば、同一の貨幣を以てより多くの人々を使用し得、而も勞働者は以前よりもより豊かになるであらう。若し貨幣勞賃が下落しないとしても、而もより多くの勞働が必要せられるであらう。蓋し同一の貨幣勞賃はより多くの貨物及び食物の雙方を購買し、従つて勞働により多くの刺戟を與へるからである。若しその外に何も必要とせられないとしても、穀物を挽く爲めにより多くの製粉者が、パンを作る爲めにより多くのパン焼きが、そして捏粉を作る爲めにより多くの料理人が、求められるであらう。若し穀物の生産費が減少するならば、それは、供給が増加せずとも、下落するであらうが、併し國內でより少い勞働が必要とせられることはあり得ないであらう——蓋し穀物の生産により少い勞働が投ぜられるに比例して、より多くが他の物の生産に充當せられるであらうから。

註 私が一〇〇〇クワタアを有つ時には、全部は年内に消費され、そしてその後の各時期毎にさうである——それは常に消費され且つ再生産される。蓄積といふ言葉は多くの人を誤らせ、そしてそれは時に思ふにマルサス氏を誤らせてゐる。穀物は蓄積されると多くの者によつて想像されてゐるが、併しかゝる資本を生産的ならしめそして富を増大する爲めには、それは絶えず消費され且つ再生産されなければならぬ。（譯註——この註はR註の續である。）

R註二 若し、必需品の價格が單に下落しただけではそれはそれ自身勞働に對する需要の増大及び勞働者を實際以前よりもよりよい地位に置くことの原因ではない、といふ意味ならば、それ

に關して争ふ點はあり得ない、蓋し貨幣が價值に於いて變動しそして穀物が同時により稀少に
なることもあらうからである。穀物の貨幣價格は下落するであらうが、併し労働の貨幣價格は
更により多く下落するであらう。若し貨幣が價值に於いて變動しないならば——穀物の貨幣價
格の下落は労働者に有利でなければならぬ。それは豊饒によつてのみ惹起され得、そしてこ
の豊饒は一時的でありそして偶發的の豊作の結果でなければならず、又はそれはより永續的な
原因から生じそしてより低廉な生産方法の結果でなければならぬ。非常な豊作による一時的
豊饒は農業者に有利ではないが併しそれは總ての他の階級には有利である。農業者は収入を減
少し又資本すら減少するであらうが、蓋し彼れの地主との契約は貨幣で爲され、そして極めて
豊かな作は乏しい作よりもより少い貨幣にしか値しないであらうからである。地主はより多く
の貨幣地代を受取りはしないであらうが、彼が自分自身の家族と彼れの牛馬を養ふ爲めとに消
費する穀物はより低い價格にあり、従つて彼は價格の差額だけ利益を受けるであらう。若し勞
賃が下落するならば、製造業者は、地主の得る利益と同一の其の支出上の利益を得ると並ん
で、又増大せる利潤を得ることによつて、利益を受けるであらう。農業者ですら、より低い勞
賃を支拂ふことによつて或る程度迄償ひを受けるであらう。若し勞賃が下落しないならば、勞
働者は多くの増大せる享樂手段を得るであらう。それを支出して買ふ主たる物品が低廉なので、
彼等は以前に穀物に支出した額と現在この目的の爲めに必要な額との差額を、他の物に支出す
るか又は貯蓄し得るであらう。若し彼等が、農業者が失つただけを貯蓄するならば、社會は以

前よりも少しもより貧しくはならず、そして將來、穀物の以前の平均價格ですら、同一分量
の勞働が必要せられるであらう。併し若し労働者が何の貯蓄も行はず、そして勞賃が下落しな
いならば、思ふに、農作による穀物の一時的豊饒は國の有效資本を減少する傾向を有つものと、
認めなければならぬ。其の生産費の永續的減少によつて惹起された穀物の低い價格はさうで
はないであらう。それも亦農業者に有害であらう、——一時の間地主にも有害であらう、併し
總ての他の階級は、社會が全體としてかゝる小さな不都合を償はれて餘りある如き永續的な利
益を、それから受けるのである。私は數個の他の場合に私の見解を述べたから、問題のこの部
分を纏説する必要はないであらう。

マルサス氏は、總ての事情の下に於いて、又それが如何にして惹起されたものであらうと、
粗生生産物の價格の下落は労働に對する需要の減少を伴ふものと、考へてゐる様に思はれる。
或る場合には、『極めて多くの労働者が解雇せられ、爲めに勞賃は、大なる慘苦の時期の後に、
一般的にそれに比例して引下げられるに至るであらう。』他の場合には、『労働者及び彼れの家
族が現實に稼ぐ生活の必需品の分量は、價格の騰貴によつて、労働者の受ける日々の支拂がよ
り小なる穀物の分量を支配するに至る時よりも、實際より少いであらう。』(譯者註——引用文は總て)

外見的勞賃と人口の増進とのこの不一致は、救貧法が制定され、そして労働者の勞賃の一部を
教區稅から支拂ふのが習慣となつてゐる諸國に於いては、更に加重されるであらう。若し、穀物
が騰貴する時に、一教區の農業者及び土地保有者が労働の勞賃を低くして置き、そして子供に規

則的な手當を與へるならば、日傭労働の外見的(穀物)勞賃と、労働階級が所有する一家を維持する眞實の手段との必然的關聯は最早なくなることは、明かである。かゝる制度の採用がひと度同意される時は、教區の補助を別にせる労働の(眞實)勞賃が、妻と一人の子供とを養ふに足るのみであり、又は妻も子供もなき唯一一人の人を養ふに足るのみですらある時に、人口の増進は極めて急速であらう、蓋し結婚に對する奨励と子供を養ふ手段との両者が依然あるであらうからである(註)。

註 救濟を求めた者の子供を兩親から取り、そして公けの基金で彼等を養ふといふ、「前會期に」下院を通過した法案が、上院を通過しなかつたことは、國にとり、又社會の労働階級にとり、最も幸運なことである。かゝる法律は、前のものよりも全く比較にならぬ程より、悪い救貧法の新制度の開始であつたであらう。「そして救貧法に關する報告書の大部分に現れてゐる意見を發表するに一致した人々によつてそれが如何にして推奨され得たかを理解することは困難である。」

一國の人口が(纏めて或時期の間)通常よりもより急速に増大する時には、労働階級は、彼等が以前に所有してゐたよりも、又は少くとも(彼等が以前に)彼等の家族の維持に充ててゐたよりも、より大なる分量の食物の支配力を有たなければならぬ。これは種々なる方法で獲得せられ得よう、——すなはち、より高き(穀物)【眞實】勞賃によつて、便宜品の節約によつて、より低廉な種類の食物の採用によつて、より多くの請負仕事と女子及び子供のより一般的な雇傭とによつて、又は教區の手當によつて。併しより大なる分量の食物の現實の使用が、【思ふに】人口の増大にとり必要である(様に思はれる)。そしてかゝる増大が起つてゐる場合には常に、そ

れによりより大なる分量の食物が獲得されるこれ等の原因の或るものが、常に働いてゐるであらう、そしてそれは一般に辿られ得るであらう。

資本の急速なる蓄積によつて惹起された(合衆國の穀物勞賃及び貨幣勞賃)【アメリカの眞實勞賃及び名目勞賃】の兩者の高いことと、比較的少量の労働で獲得された生産物をヨオロッパ並の價格で販賣する能力とは、疑ひもなく、アメリカの人口の極めて急速な増進の原因である。(労働に對する極めて大なる需要は、この場合、生産物の低き比較價值に伴つたのであり、これは必然的でもなく又屢々起るものでもない結合であるが、併しそれが起る時には、最も急速な人口の増大を惹起することとなるものである。)

他のヨオロッパ諸國に比較してのアイerlandの人口の特有の増大は、明かに、多量に生産され得、且つ小屋住耕作組織に助力されて労働に對する需要(を大いに超過)【に先行】する人口の増大を許した所の、より低廉な食物の採用によつたものである。

【そして】英蘭及びスコットランドに於ける近年の人口の大なる増大は、部分的には製造業に於ける一時的な高き勞賃により、部分的には馬鈴薯の使用の増大により、部分的には請負仕事の増大と女子及び子供の雇傭の増大とにより、部分的には家族への教區の手當の増大により、又部分的には(製造品及び外國貨物の相対的低廉の増大)【恐らく(尤も私は全國をとれば極めて僅かであると思ふけれども)便宜品及び奢侈品の節約】による、労働階級のより大なる分量の食物を獲得する能力に、よつたものである。

一般的には、恐らく、時に生活の必需品に對する一日の労働の支配力を引上げる所の價格の下落よりも、それを【時に】引下げる價格の騰貴によつて、これ等の原因のより多くが働かせられることになるであらう。

人口の急速な増大（R註）にとり（本質的に）【主として】必要なものは、労働に對する大なる且つ継続的需要である。そしてこれは、（資本から生ずるものであらうと収入から生ずるものであらうと、現實に労働の維持に使用せられる財本の分量と價值との増大の比率に）【國の資本と収入との全價值が年々増大する比率によつて惹起され且つこれに】比例する。【蓋し年々の生産物の價值が急速に増大すればする程、新しい労働を購買する能力は益々より大となり、且つ益々より多くが毎年欲求されるであらうからである。】

R註 この命題の眞理なるか否かは價值なる言葉に附せられた意味に依存する。私の見解によれば、労働を支配する能力は、國の資本の價值が減少しても、増大し得よう——それは主として資本の分量に——又は資本の中労働を使用する分量に、依存する。扱て價值はマルサス氏によれば必需品及び便宜品の分量に依存する。そこで彼れの命題は『人口は、労働に對する需要と共に、そして労働者を支持する手段と共に、増大するであらう』といふのであり——これは争ひ得ない命題である。

労働に對する（R註）需要は（一國の）固定資本ではなく流動資本【の増大】にのみ比例（す）【し得】ると（一般に）【時に】考へられてゐる。（譯者註——第三版はこゝでパラグラフ）【そしてこれは個別的

場合に於いては疑ひもなく眞實である（二版註）。併し全國民に關してはこの區別をする必要はない。蓋し固定資本の代用が多量の労働を節約し、それが他の場所で使用せられ得ない場合には、それは年々の生産物の價值を減少し、そして資本及び収入の兩者の増大を遅らせるからである。】

R註 労働に對する有效需要は、資本の中労働の勞賃が支拂はれる部分の増大に、依存しなければならぬ。若し私が二〇〇〇磅の収入を有つならば——その収入の支出に當つて私は必然的に労働を雇備する。若し私がこの収入を轉じて資本とするならば、私は先づ以前と同一の労働を雇備するが、併し不生産的ではなく生産的である。この労働は機械の製造に使用せられもしようが、この機械は資本となり、そしてそれが生産する總てはその資本から得られる收入である。又はこの労働は土地に使用せられもしようが、それが生産する穀物は私をして労働の追加分量を雇備し得せしめる資本であり得よう。社會は、人間の仕事によつて出来る物か又は殆んど専ら機械によつて生産せられる物かに對する需要に比例して、その何れかをする、——一般に、蓄積された資本は、固定資本と活動資本との雙方から成るであらう。然らば、資本を貯蓄せる人にとつては、それが固定資本として使用せられよう、又は流動資本として使用せられよう、それはどうでもよいことであるのが、わかる。若し利潤が一〇パーセントであるならば、兩者は等しく二〇〇〇磅の資本に對して二〇〇磅の収入を生み出すであらう、併し若しそれが固定資本として使用されるならば、二五〇磅又は三〇〇磅に上る財貨が資本を代置しそして二〇〇磅の利潤を與へるであらう——若しそれが流動資本として使用されるならば、資

本を代置しそして二〇〇磅の利潤を與へる爲めには、生産された財貨を二二〇〇磅で賣ることが必要であらう。國は、總所得ではなく純所得によつてのみ富まされるから、雙方の場合に於いて等しい力を有つであらう。——資本家にとつては、彼れの資本が固定資本から成らうと、又は流動資本から成らうと、それはどうでもよいことであるが、併し労働の勞賃によつて生活する者にとつてはそれは最も重大なことである。彼等は總収入の増大に多大の利害を有つてゐるが、蓋し彼等が人口を養ふ手段を頼るのは總収入であるからである。若し資本が機械に實現されるならば、より以上の分量の労働に對する需要は殆んどないであらう——若しそれが労働に對する追加需要を創造するならば、それは必然的に労働者によつて消費される物に實現されるであらう。

一版註 パートン氏による労働階級の狀態に關する見事なパンフレットを見よ。

【例へば若し、生産的労働に二〇、〇〇〇磅を使用し、そして彼れの財貨を二二、〇〇〇磅で賣つて一〇パーセントの利潤を得るを常としてゐた資本家が、二〇、〇〇〇磅に値する機械の建造に同一分量の労働を使用し、この機械が彼をして、それを修繕する心算がある外は、將來労働を要せず彼れの事業を營むを得せしめるとすれば、第一年間、年々の生産物の同一の價值と労働に對する同一の需要とが存在するであらうことは明かである。併し翌年度には、資本家にとつては、以前と同一の利潤率を得る爲めには、二二、〇〇〇磅ではなく二〇、〇〇〇磅の僅か以上に彼れの財貨を販賣する必要があるに過ぎぬ故に、年々の生産物の價值は下落し、資本は増大されず、そして収入

は決定的に減少されるであらう。そして、労働に對する需要は、一般的生産物の又は資本及び収入の兩者の價值が増大する比率に、依存する、といふ原理に従つて、かゝる事情の下に於ける労働に對する需要の減少は、適當に説明されるであらう。】

(併し實際は(譯者註——こゝはパラグラフが變つて)労働に對する需要は、如何なる形の資本の増大にも比例せず、又、私が嘗て考へた様に、全年生産物の交換價值の増大にさへ比例しない。それは、上述の如くに、單に、現實に労働の維持に使用される財本の分量及び價值の増大率に、比例するに過ぎない。)

(かゝる財本は主として、生活の必需品に、又は社會の労働階級の食物、衣服、住居、及び燃料を支配する手段に、存する。扱て、若し社會の資本が、最も賢明に且つ巧妙にこれ等の必需品の生産に向けられ、そしてその生産に使用せられる者と彼等の雇傭者との維持に必要なもの以上に出づる純剰餘が僕婢や陸海軍兵士の維持に費されるならば、かゝる國の最も有効に喚起された資源の許す一切の労働に對する需要は、大抵の文明國に於いて奢侈品及び優秀な便宜品の生産に使用されてゐる多額の資本は殆んどなくとも、存在し得ようことは、全く明かである(三版註)。併し若しこれが事實であるならば、労働に對する需要の増大は何もなくとも、資本が、そして全生産物の交換價值でさへが、増大し得ようことは、明かである。若し奢侈品及び便宜品の生産に使用せられる資本が、單に、然らざれば不生産的労働者として必需品の剰餘によつて維持されるべき者を雇傭するに過ぎぬならば、實にこれによつて労働に對する需要に何の追加もなされない

許りでなく、更に又、若し以前に個人的奉仕に従事してゐた者が奢侈品及び優秀な便宜品の生産に使用せられ得る以上に急速に解雇されるならば、流動資本の増大の下に於いてすら労働に對する需要の減少が起るであらう。そして若し一國の全生産物の交換價值の大きな部分が必要品たらしめられ得ないならば、より大なる價值の生活の必需品が現實に労働の維持に使用せられることなしに、全生産物が交換價值に於いて増大すべきことは、明かである。

二版註 この問題に關するかゝる見解は、三十年以上前に、私が、『人口論』の四折版（譯者註——第二版）四二一頁で、又リカアドウ氏が彼れの第三版四七五頁で、述べた所である。

(併し、奢侈品及び優秀な便宜品に使用せられた資本なくとも労働に對する同一の需要が存在し得ることは、疑ひもなく眞實であるけれども、而も實際上、若し一國の純収入が奴婢及び兵士の維持のみに使用せられ得るならば、近代諸國家に於ける生産に對する刺戟は極めて著しく減少され、そして土壤の耕作は封建時代に於けると同様に怠慢且つ不活潑に行はれるであらう、と考へる凡ゆる理由がある。

(他方に於いて、若し必需品の生産に使用せられる者の支持に必要とされるもの以上に出づる剩餘生産物の全部が物質的奢侈品及び便宜品の生産及び購買以外には費され得ないならば、若し家屋、什器、馬車、馬、等の世話をする爲めに少しも奴婢がかゝへられ得ないならば、物質的奢侈品及び便宜品に對する需要は直ちに減少し、そして土地及び資本の所有者がそれを最も生産的に使用せんとする誘因は極めて輕微になることは、全く明かである。

(然らば、必需品の生産に對してすら最も有效な獎勵を與へるものは、明かに、最も有利な比例の下に於ける兩刺戟物の作用である。そして、労働の維持の爲めの財本の價值の増大が嚴密には労働で測定した全生産物の交換價值の増大に比例するものではないことは、全く確實であるけれども、而も、通常の時には、そして個人的奉仕の生産的労働に對する比例に何も大きな變化が起つてゐない時には、かゝる交換價值の増大は、一般に、労働に對する需要の増大を伴ふものであるが、蓋し其の通常の且つ自然的の結果は、労働の維持に充てられた財本の價值を増大するにあるからである。

(固定資本の採用が一時の間労働に對する需要を減少する結果を有つ時には常に、全年生産物の價值が同時に減少されるのが、一般に見られるであらう。)併し一般的には、固定資本の使用は流動資本が豊富になることに【極度に】好都合である。そして若し生産物に對する市場が比例的に擴大され得るならば、一國家の資本及び収入の全價值は(労働の維持の爲めの財本の價值と同様に)それによつて大いに増大され、そして労働に對する大なる需要が創造されるのである。改良された機械の採用以來の綿製品の全價值の増大は、莫大であることが知られてゐる。そして、綿業に於ける(流動資本と)労働に對する需要が過去(五十)【四十】年間に極めて著しく増大せられたことは、一瞬と雖も疑ひ得ない。このことは實に、綿製造業が最も繁榮せるマンチエスタ、グラスゴウ、其の他の都市の人口の大なる増大によつて、十分に證明されるのである。同様の價值の増大は——程度は同一ではないが——我國の鐵器、羊毛、其の他の製造業に起つ

て居り、そして、固定資本の使用の増大にも拘らず、労働に對する需要の増大を伴つてゐる。我國の農業に（R註）於いてすら、馬といふ固定資本が——これは、それが消費する生産物の分量よりして、最も不利な種類の固定資本であるが——使用を止められたならば、恐らく、現在穀物を産してゐる土地の大なる部分の耕作は抛棄せられるであらう。貧弱な質の土地は、決して、鋤を以て耕作し、肥料を遠い畠に手押車で運び、そして土地の生産物を同一種類の運搬用具で遠隔な市場に運ぶ所の、労働を、支拂ふに足るものを、産み出さないであらう。これ等の事情の下に於いては、生産される穀物の分量は「大いに」減少するであらうから、生産物の全價値は「大いに」減少するであらう。そして（労働の維持の爲めの財本の價値は害されて）労働に對する需要「及び人口の量」は（それに比例して）「大いに」減少されるであらう（註）。

R註 私には『労働に對する需要及び人口の量は、大いに減少されるであらう』といふのは、必然的歸結であるとは思はれない。

一〇〇〇クヲタアの小麦が作られ、その中二〇〇クヲタアは剩餘生産物と考へ得、そして残りの八〇〇クヲタアの中——四百クヲタアは労働者に彼等の働きに對して支拂はれ、そして四百クヲタアは農場の仕事に使用せられる牛馬の飼養に用ひられる、と假定しよう。今手鋤での耕作を採用し牛馬を農場の仕事に使はなくなつた結果として、一〇〇〇クヲタアの代りに僅かに九〇〇クヲタア（譯註一九）が生産せられると假定しよう。この九五〇クヲタアの中僅かに一五〇クヲタアだけが剩餘生産物であり、残りの八〇〇クヲタアは農業労働者に彼等の働きに對

して與へられるとしよう。かゝる事情の下に於いては、總生産物と純生産物が減少してゐるのに労働に對する需要は増大し得よう。實際需要が増大するか否かは、かゝる低い利潤率ではその耕作を抛棄せられる土地の分量に依存する。併し乍ら、生産の減少は人類による消費の増大と兩立し得るものであり、そして生産せられた全量が人間によつて消費される場合の如くに、穀物が價格に於いてより、高くそして其の生産により、多くの原費を必要としても、労働に對する需要は増大し得ようことを、認めなければならぬ。

註 手鋤での耕作は、より、大なる總生産物とより、大なる純生産物との兩者を、産出すであらう、と最近述べられてゐる。私は常に十分に實證された經驗に服するの用意がある。併し若しかゝる經驗が今の場合に當てはまるならば、農業に於ける馬牽鋤の繼續的使用はいくら不思議に思つても足りないこととなる。併し乍ら、手鋤の使用が、それだけでは、或る土壤に於いて、收穫をして労働の出費の追加を支拂つて餘りあらしめる程に土地を改良するものと、假定しても、而も、馬は（R註）、遼く迄施肥を行ひ且つ土壤の生産物を市場に運ぶ爲めに、蓄へて置かなければならぬから、彼れの馬がその厩舎で何もしてゐない時に彼れの厩を掘りかへす爲めに人を使用するのは、殆んど耕作者の割に合はないことであらう。經驗の達せる限りに於いては、大なる且つ貧弱な領域の荒地を耕作するものは、通商、價格及び熟練であり、手鋤ではない、と私は確かに云ひ度いのである。

（家屋の直ぐ近くで肥料が直ぐ得られる所にある數エイカアで爲されべきことからしては、大きな國に關しての如何なる推論も牽出され得ない。）

R註 私は手鋤での耕作の問題に就いて意見を述べようといふ積りはない——私にはその資格がない、併し私は馬が厩舎で何もしてゐなければならぬ譯がわからない。同じ馬が各種の農

場の仕事をすることも出来よう——それは馬の仕事が用ひ得る他の目的の爲めに貸出され得もしようし、又はそれは農業者によつて時に借入れられ得もしよう。

他方に於いて、^(R註)若し、より大なる分量の固定資本の徐々たる採用によつて、吾々が、遙かにより、少い出費で、吾々の土壌を耕作し且つ施肥し且つ生産物を市場に運び得るならば、吾々は、總ての吾々の荒地の耕作と^(既)に耕作されてゐる總ての土地の改良とによつて、吾々の生産物を極めて著しく増大し得よう。そして若しこの固定資本の代用が、吾々が實際にそれが行はれると想像し得る唯一の仕方で、すなはち徐々として、行はれるとするならば、粗生産物の價值が殆んど其の以前の水準にあり續けることを疑ふ理由はない。そして其の分量の大なる増大は、製造業及び商業に使用され得べき人々の比例の増大と相俟つて、^(疑ひもなく)「一般的生産物の交換價值の極めて大なる増大を惹起(す)と共に、同時に労働の維持に充てられた財本の價值を増大し、かくして労働に對する大なる需要と人口の大なる増加とを齎らすであらう。

R註 人間の行ふ殆んど總ての仕事を馬ですることも出来よう、かゝる場合に於いて馬を代用することは、假令より大なる生産物を伴ふとも、労働階級にとつて有利であらうか、それは反對に労働に對する需要を極めて著しく減少しないであらうか？ 私が云はうとする總ては、より低廉な耕作法につれて労働に對する需要は減少し得もしようし、又より高價な耕作法につれてそれは増大し得ようといふことが、起り得もしようといふことである。

従つて「一般的には」實際上生ずる様に思はれる固定資本の採用が、労働に對する有效需要を

減少するであらうと恐れる必要は、殆んどないのである。實際吾々は其の將來の増大の主たる原因はこの源泉に求めなければならぬのである。同時に^(R註)本書の後の部分に於いてより十分に述べられるであらう如く、若し固定資本の代用が「極めて急速に且つ」それより得られるより豊富な供給と解雇せられた労働の新らしき生産物とに對し適當な市場が見出され得(る)よりもより急速に「ない中に」行はれるならば、労働に對する需要の減少と労働階級の間に於ける「大なる」^(全)「一般的」生産物「又は國の資本及び収入の兩者」は、需要に比較しての供給の一次的超過によつて、「確かに」價值に於いて下落^(し)、そして勞賃に支拂はれたその前の價值に比較してこの價值の變動が労働を使用する能力及び意思の主たる規制者であることを、^(R註)「證示」するであらう。

R註一 マルサス氏の特有の學説は、供給は極めて豊富になり、そして市場を見出し得ないこともあらう、といふのである。これは彼れの著作の種々なる部分で固執されてゐる。極めて大きな生産の便宜は、或る事情の下に於いては、怠惰の習慣を刺戟し、従つて貨物が豊富に生産せられない理由となり得よう、併しそれは、貨物が生産せられる時には、それが互に交換されない理由とはなり得ない。吾々は總て購買し且つ消費することを好む、困難は生産にあるのである。一つの生産物は他の生産物で買はれる。各人は、若しそれと引換へに與へるべき生産物を有つならば、購買をするであらう、そして提供された貨物よりもそれをより高く評價はしないのである。

R註二 これは、それ等は思ふにマルサス氏の眞實交換價値の尺度ですなはち便宜品及び必需品で下落するであらう、といふことになるが、併しこの生産物の増大が便宜品及び必需品から成ると假定すれば、それ等は價値に於いて騰貴しなければならぬ、蓋し標準尺度の價値は其の分量に依存するからである。労働が價値に於いて騰貴しない限り、それ等はより、少い労働を支配するであらうとも云ふことは出来ないであらう、蓋し労働を支配する力はそれに對し支拂ふの手段に依存しなければならず、そしてかゝる手段は便宜品及び必需品の分量の増大によつて増大されるであらうからである。若しより、少い労働しか支配し得られないならば、それは労働が必要品に比較して騰貴したが故にのみさうなるに過ぎず、これは利潤が下落し資本の蓄積される速度が減ずる理由であるが、併し低い利潤は労働が引續き高い間にのみ存在するに過ぎぬであらう。人口を増大しそして労働の價値を必需品に比較して下落せしめるならば、利潤は再び高くなりそして新らしい蓄積に對し誘因を與へるであらう。私は、資本と労働とは同時に共に豊富であることは出来ないが、蓋し、兩者が如何様に増加されようと、その一方は常に他方を購買するであらうから、といふ、他の場所で屢々述べた事を、こゝで繰返さなければならぬ。私は極めて豊富な資本を有つてゐると云ふことは、私は労働に對する大きな需要を有つてゐると云ふことである。労働が非常に豊富にあると云ふことは、それを雇備すべき適當な資本がないと云ふことである。

(労働の維持に特別に充てられた全財本^① (その増大率が労働に對する需要を左右するが) ①國

の全生産物^②の (R註) 價値の形成に於いては、(一) 部分はかゝる財本^③の一定部分の價値に、又二部分は現物での其の額に、依存し、換言すれば) 一部分は (其の) 價値に、又二部分は (其の) 分量に依存する。單に價値に依存する部分は、其の本質上、分量に依存するものよりも、より短期であり且つ有効度もより少い。殆んど又は全く分量の増大を伴はない價値の増大は、(明かな限界を有ち、そして大抵の場合に) 直ちに、殆んどそれに比例する (貨幣) 勞賃の増大を伴はなければならぬ。然るに生活の必需品に對するかゝる増大せる貨幣勞賃の支配力は減少し續けるので、人口は停止しなければならず、そして價格のより以上の騰貴は労働に對する有效需要を惹起し得ないのである。

R註 若し價格が價値に於いて不變的な媒介物で測定されるならば、價格と價値とは同一事を意味し、そしてその時には私は命題がかうなるのを理解する。各特定物は依然同一の價格にあつて生産物の全分量が増大されるか、又は分量が増大されなくて各一物がより、高い價格にあるかである。一五〇クヲタアの小麦の全價格は一〇〇クヲタアの全價格よりもより、大であらうが而も各一クヲタアは以前と同一の價格のこともあらう、又は各一クヲタアが價値に於いて騰貴したので一〇〇クヲタアは以前に一五〇クヲタアが有つてゐたと等しい價値のこともあらう。各一クヲタアの、不變的媒介物での價格の、増大は、若しそれが何程か續くならば、生産費の増大によるのでなければならぬ。併しより、大なる分量の價格の増大は生産費の減少と兩立し得るものである。

マルサス氏は曰く『殆んど又は全く分量の増大を伴はない價格の増大は、直ちに、殆んどそれに比例する勞賃の増大を伴はなければならない。』私は、勞賃の増大が穀物の價格の騰貴に比例するか否かを、大いに疑ひ度い、蓋し若し穀物が生産費の増大の故に不變的媒介物で騰貴し得るのみであるならば、同一分量を獲得する爲めにより、多くの勞働が投ぜられなければならぬからである。

より多くの勞働につれ、より多くの勞働者があることになるであらう、そして若しより多くの勞働者が同一分量の穀物を得るに過ぎぬならば、云ふ迄もなく各一勞働者の得る部分はより少く、従つて勞働は穀物と同一の比例では騰貴し得ない。私は『生活の必需品に對する勞働者の支配力は減少し続け、そして人口は停止しなければならぬ』といふ點ではマルサス氏に同意し、従つて私は、勞働者の勞賃は穀物の價格に比例して増大するといふ點では、彼に同意することは出来ない——若しそれが比例して増大するならば、人口は決して停止し得ないであらう。若し生産物の全價値の騰貴が分量の増大によるのであるならば、その時には、勞働に對する需要は増大するであらうから、實際勞賃は恐らく騰貴するであらう。

貨幣勞賃は騰貴し、そして勞賃がそれに費される貨物が騰貴しないから、勞働者はより以上の分量の貨物を支配し、そして人口は停止せずに増大し続けるであらう。そして同一の事情の下に於いてその上なほ價格が騰貴するならば、より以上の勞働に對する有效需要が惹起されるであらう。

これは、常に、價格を測定する貨幣が不變の價値の時にある、と假定してのことである。併し若しこれが命題の一條件でないならば、若しマルサス氏が全生産物の價値は可變的價値の貨幣で増大するといふ意味ならば、吾々は媒介物自身がより價値多くなるともより價値少くなるとも假定し得ようから、私は彼をどう取扱つてよいかわからない。かゝる媒介物では、生産物の分量が同一であつてもより大であつてもより小であつても、價格の増大が起り得よう。分量と價格とが共に騰貴することもあらうし、又は共に下落することもあらう。各一物は騰貴することも又は下落することもあり、又勞賃の騰貴を伴ふことも下落を伴ふこともあらう。價格に關して命題を主張する者が貨幣をその時に價値に於いて停止的なものと考へてゐるか又は可變的なものと考へてゐるか、又若し可變的ならばどの程度に又どの方向にさうかが、前以て決定されてゐない限り、價格に關して主張される如何なる命題をも否定することは出来ない。

他方に於いて（R註）若し生産物の分量が、全部の價値が供給の過剩によつて減少する程に急速に増大されるならば、それは今年が昨年程の勞働を支配せず、そして一時の間勞働者に對する需要は（極めて少ししか）【何も】ないであらう。

R註 貨物の分量を増大することによつては、それは以前と同じだけの勞働を支配し得ないであらう。これは私にはわかる、蓋し貨物が勞働に比較して低いのに比例して、勞働は貨物に比較して高いからである。然らば勞働は大いに需要せられ、それは高い價値で支拂を受け、そして勞働者は豊富な享樂品を得る、——豊かな貨物があり、そして彼はその大きな分前を得る？

そんなことはない」とマルサス氏は云ふ、『一時の間労働者に對する需要は何もないであらう。』
これ等の命題は如何にして一致せしめられるべきであるのか？
これ等は二つの極點であり、その一方は分量の増大なき價值の増大より生じ、又その他方は價
値の増大なき分量の増大より生ずるものである。

それに到達するのが最も望ましい目的が二者の結合であることは明かである。一國の現實の資
源の下に於いて、富の増大と労働に對する需要とが極大なる、都合よき中點が、何處かにあるの
である。【併しこの點は確證され得ない。】(譯註—第一版では「ラフに切らずに直ちに讀むべき」) (便宜品及び愉樂品に對する
嗜好は、常に個人的奉仕に對する嗜好よりもより、着實な労働に對する需要を作り出す傾向がある
のみならず、更に又、労働階級の必要品の多くを含んでの、製造品及び外國貿易の生産物を低廉
ならしめることによつて、それは現實に労働に對する有效需要の限界を擴大し、そしてそれをし
てより、長期間有效ならしめるのである。)

着實な價格又は稍々下落しつゝありさへする價格を伴ふ(労働の維持の爲めの財本の)分量の
増大は、【生産物の一般的價值の大なる増大と兩立し得るものであり、そして】労働に對する大な
る需要を惹起し得よう。併し、現實の事態に於いて、且つ貴金屬の現實の分配され方に於いては、
價格の或る増大は、一般に、生産物及び人口に對する最も有效な需要を伴ふものである。最も確
實に(労働の維持の爲めの財本の價值を増大し)労働(者)に對する最大の需要を創造し、最大
の分量の勤勞を刺戟し、且つ一般に人口の最大の増大を惹起すものは、分量と價格との兩者のこ

の増大である。

第四節 (エドワード三世の治世よりの労働の穀物勞賃の

回顧)【貨幣の價值の下落が、労働に對する需
要及び労働者の状態に及ぼす影響に就いて】

大なる才能を有する或る論者は、(地金の流入によつて惹起された)價格の騰貴【又は貨幣の價
値の下落】は、社會の(労働)【下層】階級に極めて好ましくない、といふ意見である。そして確
かに、我國の歴史上には、有力にこの意見を證する様に思はれる或る時期がある。併し私は、若
しこれ等の時期と、それと關聯せる事情とがより注意深く検討されるならば、それから得られて
ゐる結論は、一般に想像されてゐる程に確實であるとは思はれないであらう、と考へるに傾いて
ゐる。問題の場合に於いて、關說されてゐる結果がより正當にそれに歸せられ得べき他の諸原因
が作用してゐたことが、見出されるであらう。【そして吾々は、労働に對する有效需要が貨幣の價
値の下落を伴ひ且つ其の騰貴の途上には何等の積極的障害も投ぜられてゐない場合には、それは相
應の短期間を経たる後に主たる食物の價格の後を追ひはしないであらう、と結論すべき十分な理由
を、殆んど有たないであらう。】

我國の歴史上で(より特別に)【普く】注意されてゐる時期は、ヘンリ七世の治世の終りから

エリザベスの治世の終りに至る十六世紀である。この時期の間で、労働の（穀物）【眞實】労働が異常な（程度に）【仕方】下落し、そして同世紀の終り頃にはそれはその初めに支配した小麦の分量の三分の一以上に非常に多くは支配しなかつたことは、疑問の餘地なき事實である。

サア・F・M・イードゥンは、ヘンリ七世の治世の二十四年中の十九年の、及びその年中の數年にあつては二三回、小麦の価格を記述してゐる（註）。第一に同一年に於ける數回の記述を平均し、次いで十九の價格の平均を採ると、それは一クヲタアにつき六志三片四分の一、一ブシエルにつき九片二分の一より稍々以下、そして一ベックにつき二片八分の三となる。

註 State of the Poor, vol. iii, p. xli.

一四九五年に通過した労働を規定する法令によれば、普通日傭労働の價格は食事なしで四片又は四片二分の一であつた様に思はれる。特別に説明のない總ての労働者及び工匠は四片とされてゐる。併しこの法令の他の部分には、女子労働者ですら（私は乾草收穫期のことと思ふが）四片二分の一、そして荷車牽は五片となつてゐる（註）。

註 State of the Poor, vol. iii, p. lxxxix.

上述の小麦の價格では、若し労働者の労働が四片であるならば、彼は、一日の労働で、一ベック四分の三の小麦を——誤差半フアジング以下——購買し得るであらう。若し彼れの労働が四片二分の一であるならば、彼は半ブシエルを——誤差一フアジング以下——購買し得るであらう。その後の年に於ける日傭労働の價格の記述は極度に乏しい。ヘンリ八世、エドワード、及びメア

リの治世には何もない。最初に出て来るのは一五七五年であり、そして擧げてある價格は八片である（註）。小麦の價格が記述されてゐるこれに先立つ五箇年——一五七五年を含む——の平均を、前以て以前の如くに同一年に於ける數個の價格を平均した後に、採ると、一クヲタアの小麦の價格は一磅二志二片であることがわかるが、それは一ブシエルにつき二志九片二分の一、又一ベックにつき八片四分の一である。この價格では、一日の労働は、一ベックの小麦を——誤差一フアジング以下——又は一七分の一六ベックの小麦を購買するであらう。

註 State of the Poor, vol. iii, p. lx.

これは労働の穀物労働の殆んど半分の減少である。併しこの世紀の終りには減少は更により大であつた。

比較的北部の諸州の若干に於ける判事の規定を別とすれば——これは南方にとつての正當な指標とは殆んど考へられ得ないが——その次の労働の價格の記述は一六〇一年であり、その時にはそれは一〇片となつてゐる。ウィンザア價格表から五箇年の平均を採り——併し乍らこれは過度に高價な年を一年含んでゐる——そしてそれをウィンチェスタ秤目に合せる爲めに九分の一を減ずると、一クヲタアの價格は二磅二志〇片であつた様に思はれるが、これは一ブシエルにつき五志三片、そして一ベックにつき一志三片二分の一である。一日の労働はこの價格では三分の一ベック以下を購買することにならう（註）。

註 一五九七年は異常に高價な年であり、かゝる短い平均の中に包含せらるべきではないと思はれる。若し一五九八年に始

る五箇年に就いて平均を採るならば、労働者は約七分の五ベックを稼ぐ様に思はれるであらう。そして同じ時期からの十年間の平均によれば彼は約五分の四ベックを稼ぐであらう。一五九四年より一五九八年に至る——その年を含む——五年間に、小麦の価格は氣候不順の爲めに異常に高かつた様に思はれる。

これは疑ひもなく労働の（穀物）【眞實】¹ 賃に於ける莫大な下落である。併し、その下落の出発点たる（比率）【價格】² がその歸着点たる（比率）【價格】¹ と同じく異常であつた【る】¹ 否かを研究するのは、極めて重要なことである。そして吾々は、その説明が最も困難な（賃）【價格】¹ は、十六世紀の低い（穀物賃）【價格】¹ より寧ろ十五世紀の高い（穀物賃）【價格】¹ であることを、見出すであらう、と私は考へる。

若し吾々が、賃を規定する最初の一般的法令が通過した時たる、十四世紀の中頃に戻るならば、労働者の状態は、十五世紀の最大部分の間に於けるよりも極めて劣つてゐることがわかるであらう。この事實は申分なき證據に基いて確證せられ得よう。労働の價格を定める爲めの法令又は規定は、其の直接的目的に於いては常に必ずしも成功してゐないけれども、（この直接的目的は一般に（それ）【労働】¹ が騰貴するのを妨げるといふ、不當なものである）それは、それが通過した時からそれ程前ではない時に労働の價格がどれだけであつたかに關する、否定し得ない證據と考へられ得よう。最も無知な時代に於ける如何なる立法と雖も、或る過去の經驗を顧ることなく労働の價格を勝手に定める程早急なものもあり得ないであらう。従つて、かゝる法令に於ける價格は將來に關しては準據し得ないけれども、それは過去に關しては全く決定的である様に思

はれる。今の場合では實際、召使は、この國王の治世の第二〇年及びその二・三年前に受けた如き仕着せと賃とで満足すべしといふことが、明かに觀られるのである（註）。

註 Eden's State of the Poor, vol. i, p. 32.

大疫病後に労働の價格が騰貴するのを妨げるといふ最も不當な且つ不得策の目的で、國王の第二五年、一三五〇年に制定された、この法令から、吾々は、日傭労働の價格は約一片二分の一又は二片であつたと推論し得よう。普通の農業労働は實際特別には記してない。併し工匠の召使は一片二分の一、普通の大工は二片、そして刈取人は八月の第一週にはこれ又二片と規定され、そして總て食事なしである。このことから吾々は、普通の日傭労働は二片のことも一片二分の一のことも同じ位あつたに違ひない、と推論し得よう（註）。

註 State of the Poor, vol. i, p. 33.

サア・F・M・イードンは、この法令の通過に先立つ、エドワード三世の二十五年中の十六年に於ける、小麦の價格の記述を蒐集してゐる。以前の如くに平均を採れば、小麦の價格は一クヲタアにつき約五志四片であつたことがわかるが、これは一ブシエルにつき八片、そして一ベックにつき二片である。

この小麦の價格では、若し労働者が一日に一片二分の一を稼ぐならば、彼は一日の労働によつて僅かに四分の三ベックの小麥を稼ぎ得るに過ぎぬであらう。若し彼が二片を稼ぐならば、彼は丁度一ベックを稼ぐであらう。前の場合には、彼はヘンリ七世の労働者が稼いだ穀物の半ば以下

を稼ぎ、そして後の場合にはその半ばを殆んど出でない額を稼ぐことになるであらう。
併しエドワード三世のその後の時期に於いては、労働者は、生活が遙かにより悪かつた様に思はれる。労働者に關する法令は更新され、そして穀物の價格が著しく騰貴したにも拘らず極めて嚴格に施行されたといふ(註)。小麥の價格が指摘されてゐる二十六年中の十三年を平均すれば、一クヲタアは約一志九片であり、それは一ブシエルにつき約一志五片二分の一、そして一ベックにつき四片四分の一である。

註 State of the Poor, vol. I, p. 36, 42.

この價格では、若し労働の(貨幣)勞賃が騰貴しなかつたならば、労働者の境遇は極めて悲惨で(あつた)であらう。彼は、後にヘンリ七世の治世に於いて彼が支配し得たものの約四分の一たる、半ベックだけの小麥を、一日の労働で支配しな(あつた)【1】であらう。併し乍ら、労働の(貨幣)勞賃が、この法令と其の更新にも拘らず、或る程度騰貴しなかつた、と考へることとは殆んど出来ない。併し假令それが半分だけ騰貴したとしても、それは二倍以上となつた穀物の價格とは殆んど歩調を合せなかつたであらう。そしてエドワード三世の治世の最後の二十五年の間に、穀物での労働者の稼ぎ高は、恐らく、エリザベスの最後の二十五年間と全く同じ程低かつたのである。

リチャード二世及びヘンリ四世の治世に於いては、小麥の價格は、殆んどエドワード三世の治世の前半に於ける程度迄、下落した様に思はれる。一三七七年より一三九八年——この年を含む—

一に至る迄、それは一クヲタアにつき約五志七片であり、そして一三九九年より一四一一年に至る迄、約六志一片であつた(註)。労働の(貨幣)勞賃がどれだけ騰貴したかを確かめるのは困難である。併し若しそれが、エドワード三世の治世の最後の二十六年を通じて、労働者をして自らを養ひ得せしめる程に騰貴し、その後の下落の結果として再び下落しはしなかつたならば、——これはさうありさうなことであるが——労働者は、これ等の治世の間、よい支拂を受けたに違ひない。

註 Eden's State of the Poor, vol. III, p. xxv. et seq.

ヘンリ五世の治世、及び一四四四年の諸法令の通過に至る迄のヘンリ六世の最初の部分の間は、一クヲタアの小麦の價格は約八志八片であつた(註)。これは一ブシエルにつき一志一片、そして一ベックにつき三片四分の一であらう。この三十二年の最大部分の間、日傭労働の勞賃は約三片であつた様に思はれる。それは恐らく、一四四四年に規定せられた所、すなはち四片又は四片二分の一には騰貴しなかつたであらう、但しこの法令の通過に先立つ高價な十年間では、一クヲタアの平均價格は一〇志八片であつた。三十二年の全期を平均して、日傭労働の勞賃は、この時期の大部分に關しては、約一ベックの、それ以上よりは寧ろ以下の、穀物を購買した様に思はれる。

註 Eden's State of the Poor, Table of Prices, vol. III.

一四四四年よりこの世紀の終りに至る迄、小麦の平均貨幣價格は約六志であつたが、他方日傭労働の勞賃は引續き四片又は四片二分の一であつた(註)。これ等の労働の價格の後者の方では、

勞賃は正確に二ペックの小麥又は半ブシユルを購買し、そして前者の價格では半ブシユルの九分の八を購買することにならう。

註 ハラム氏は、その貴重な中世に關する著作に於いて、勞働階級の狀態に關するエドワード三世とヘンリ(六)²「四」世との治世の相違を看過してゐる。この二つの時期はこの點に於いて本質的に異つてゐる様に思はれる。

一五〇年に亘る時期たる、一三五〇年に於ける勞働者に關する最初の法令の通過から十五世紀の終りに至る迄、同一の名目額に含まれる金屬の分量には相次いで變化が起つた。従つて、エドワード三世の治世の中頃には一磅二志六片に鑄造された一封度の銀は、ヘンリ七世の治世には、一磅一七志六片に鑄造された。

人は當然に、この鑄貨の減價は、先づ、そして最も顯著に、勞働よりは寧ろ穀物の如き或る輸出貨物に現はれるものと、期待したであらう。そして若し小麥がヨオロッパの殘部に於いて特にフランスに於いて同時に低廉でなかつたならば、後にエリザベスの治世に起つた如くに、恐らくさうなつたであらう。併し乍ら事實上は、鑄貨の内在價値のこの大きな下落は、その時期の間に起つた(小麥の)名目價格の輕微な騰貴によつては、決して埋合されなかつた。この騰貴は單に約五志四片から六志又は六志三片になつたに過ぎなかつた。従つて、小麥の地金價格に極めて著しい下落が實際起つたのである。

併し勞働の名目價格は、小麥と同一の輕微な程度では騰貴せずに、一片二分の一又は二片から四片又は四片二分一に騰貴したが、これは、鑄貨の惡化を埋合すに足る遙かに以上の騰貴である。

従つて勞働の地金價格は、小麥の地金價格が下落した期間に、著しく騰貴したのである。アダム・スミスが、彼れの『過去四世紀に於ける銀の價値に關する枝論』に於いて、この事情に留意しなかつたのは、奇妙なことである。若し彼が、勞働の地金價格のこの騰貴を知つてゐたならば、彼を導いて穀物を以て單にそれが勞働の最良の尺度である故に價値のよき尺度なりと考へるに至らしめた彼れの原理は、彼を導いて、彼が述べてゐるとは極めて異なる結論に至らしめたことであらう。(價値の眞實標準尺度であり又實際アダム・スミス自身が提議してゐる標準であることを本書に於いて既に證示した所の勞働に就いては、銀の價値は、こゝに考へてゐる結果が最大なる十四世紀の中頃から十五世紀の終りに至る迄、價値に於いて殆んど二倍には騰貴せずに、約三から二への比例に於いて下落したことがわかる(三版註)。「若し吾々が穀物及び勞働の中項を採るとすれば、銀の價値は、この一五〇年の間に、その二倍には騰貴せずに、引續き殆んど停止的であつたことがわかるであらう。」

二版註 勞働の名目價格は約一片二分の一又は二片から四片又は四片四分の一に騰貴した。若し吾々が、三對八及び四對九といふこれ等の比例を一緒にし、そしてその結果を、一磅一七志六片對一磅二志六片又は五對二の比例にある、後の時期に於ける同一名目額に含まれた金屬の分量の減少によつて、是正するならば、勞働の地金價格は殆んど二から三への比例で騰貴し、従つて銀の價値は殆んど三から二への比例で下落したことが、わかるであらう。

サア・ジョン・フォテスクが『絶對王制と制限王制』Absolute and Limited Monarchyに關するその著を書き、そして英蘭の農民の繁榮し且つ幸福な狀態をフランスの農民の悲惨な狀態と比

較したのは、この時期の中のよい部分の間のことである(二版註)。

二版註 穀物の地金価格が下落しつゝある時に於ける労働の地金価格の騰貴は、常に、英蘭の労働者が通常よりもより、多量の穀物を支配し得たことを證明するのみならず、更に又同時に労働に對する大きな需要があり、そして働く意思を有つての者は雇傭せられ得たことを證明したものであり、これは、常に必ずしも一緒に起らない二つの事柄であるが、併しそれが一緒に起る時には、労働階級にとり最も有利なものである。

併し、十五世紀の後半の間の英蘭の下層階級の人民の状態が、その前の世紀に於けるよりも、又アメリカの鑛山の發見によつて惹起された貨幣の減價の期間に於けるよりも、遙かによりよかつたことを、證示するだけでは足りない。それが特有であつたことを證明する爲めには、吾々はそれを、減價が停止した後の人民の状態と、比較しなければならぬ。

アダム・スミスによれば、アメリカの鑛山の發見の結果は、ほど一六三八年又は四〇年に終つた様に思はれた。一六五一年には、エセックスでケルムズフォード四半年會期に判事の定めたる日傭労働の賃金は、收穫を除き夏季半年に對し、一志二片であつた。これはエリザベスの時から労働の貨幣價格の著しい騰貴である。併し吾々は、それは殆んど小麥の價格の騰貴に比例しないことを見出すであらう。若し吾々が、一六五一年(註二)に先立つ五箇年——規定は恐らく大部分この時期に關説してゐるのであらうが——の平均を探るならば、ウィンザア市場に於ける一クヲダアの小麦の價格は、ウィンチェスタ秤目に合せる爲めに九分の一を控除すれば、一クヲダアにつき三磅四志七片であり(註三)、それは一ブシエルにつき約八志、そして一ベックにつき二志であ

らう。小麦のこの價格では、勞賃が一四片ならば、労働者は單に一二分の七ベックを稼ぐに過ぎず、すなはち半ベックと一二分の一しか稼がないであらう。

註一 規定は四月に通過したから、一六五一年は平均の中には含まれない。

註二 Encyclopaedia Brit. Supp. Artic. Corn Laws. その二は九分の一を控除して表が掲げられている。

チャアルズ二世の即位後間もなく、一六六一年に、勞賃は再びエセックスで復活祭會期に判事によつて規定され、そして夏季半年間の普通日傭労働の價格は收穫期を除いて引續き一四片とせられた。

若し吾々が一六六一年に先立つ五箇年の小麦の價格の平均を前の如くに採れば、一クヲダアは二磅九志三片であつたことがわかる。これは一ブシエルにつき六志二片、そして一ベックにつき一八片二分の一である。この率では労働者は約四分の三ベックを稼ぐことにならう。成程こゝに採つた穀物の價格の平均は高價な時のものである。併し勞賃は正にかゝる時期に定められたのである。そして一六五一年の規定には、それが『總ての種類食物、及びリンネル及び羊毛の衣服の、現在に於ける價格、及び工匠、労働者及び僕婢が過去の時代よりも荷重に負つてゐる總ての他の必要な經費を、特に考慮し考察して』(註) 定めたものであると、明かに述べてある。

註 Eden's State of the Poor, vol. III, p. 98.

若し吾々が一六四六年より一六六五年——その年を含む——に至る二十箇年の平均を探るならば、吾々は、小麦の價格は、一六六一年に先立つ五箇年の平均以下であるよりも寧ろ以上であつ

たことが、わかるであらう。この二十年間の一クヲタアの小麦の平均価格は二磅一〇志〇片四分の三であつたが（註）、それは一ブシエルにつき六志三片、そして一ベックにつき殆んど一九片である。この価格では、勞賃が一四片ならば、勞働者はこの二十年の間殆んど四分の三ベックだけを稼ぎ得ないことにならう。

註 ウィンザー價格表から九分の一を控除す。

一六八二年以後には穀物の価格は下落したが、併し（貨幣）勞賃は同時に下落した様に思はれる。

一六八二年にはサフオクのペリに於ける勞賃は、食事付きで夏季には六片、冬季には五片、食事なしではその二倍、と定められた。これは夏季勞賃を一志たらしめる。そしてそれに先立つ五箇年に於ける小麦の価格によれば、一日一志を稼いだ勞働者は殆んど四分の三ベックだけの小麦を支配し得なかつたのである。

一六六五年より一七〇〇年に至る一クヲタアの小麦の平均価格は、約二磅二志六片であつた。若し吾々がこの期間に於ける勞働の勞賃は約一志であつたと假定すれば、勞働者の稼ぎ高は約四分の三ベックの小麥であらう。併し平均（貨幣）勞賃が一志といふ程高きはなかつたと考へるべき理由がある。

一六八五年に於けるウオウィックでの判事の規定では（註）、普通勞働者は、夏季半年に對し僅かに八片を得るを許されたに過ぎなかつた。サア・ジョージ・シヤックバラは一六七五年乃至一七

二〇年の時期に就いて僅かに七片二分の一とし（註）、又アーサー・ヤングは十七世紀全體を通じての勞働の平均価格を一〇片四分の一と評價してゐる（註）。若しこれ等の根據に基づいて吾々が、一六六五年よりこの世紀の終りに至る迄の勞働の勞賃を一〇片二分の一と評價するならば、勞働者の稼ぎ高は、十七世紀に於いて、貨幣の減價が止んで後に、僅かに三分の二ベックの小麥を購買するに足るに過ぎないことが、わかるであらう。併し勞働者の稼ぎ高として一日一志といふより、有利な假定をとれば、それは上述の如くに約四分の三ベックを購買することにならう。

註一 Eden's State of the Poor, vol. III, p. 104.

註二 Philosoph. Trans. for 1793, Part I, p. 176.

註三 Annals of Agriculture, No. 270, p. 88.

十八世紀の最初の二十年間に穀物の価格は下落したが、併しそれは多くはなかつた。そして勞働の價格が騰貴したか否かは疑はれ得よう。

今述べた時期よりも數年後の一七二五年に、勞働の價格はマンチェスタに於いて判事によつて定められた。最良の耕作勞働者も、三月半から九月半に至る迄、飲食なしで一日一志以上を得てはならぬとされた。併し普通勞働者、及び籬造夫、溝掘夫、杭打夫、打穀夫、又は其他の請仕事は、單に一〇片とされた。ハウレット氏は、サア・F・イードマンの引用する所によれば（註）、日傭勞働の價格を、一七三七年のおそきに於いて、僅かに一日一〇片と述べてゐる。そしてサア・F・イードマンは、一七九六年に書いて、彼が英蘭の各地から集めた種々なる消息によつて見る

に、彼は、労働の賃金は、過去六十年の間に二倍となつたと信ずべき理由があると述べてゐるが（註二）、これは、この世紀の初めに賃金が一志以下であつたのでない限り殆んど眞實ではあり得ないであらう。

註一・二 State of the Poor, vol. 1, p. 385.

この世紀の最初の二十年の小麥の平均価格は寧ろ二磅以下であつた。そして若し労働の賃金が僅かに一〇片又は一〇片二分の一であつたならば、労働者は四分の三ベックよりも大いに以下しか稼がないことにならう。若し賃金が一志であるならば、彼は五分の四ベックを稼ぐことにならう。

一七二〇年より一七五五年に至る迄穀物は下落しそして引續き低かつたが、他方労働の賃金は約一志であつた様に思はれる。この三十五年の間、小麥の価格は一クヲタアにつき約三三志であり、又は一ベックにつき一志より稍々以上であり、従つて労働者は、三十五年を總て平均して、約一ベックの小麥を稼ぐことにならう。

この時から穀物は徐々として騰貴し始めたが、他方賃金は同一の比例で騰貴したとは思はれない。吾々が労働の価格について有つてゐる信じて得る記述で穀物が騰貴し始めてから後の最初のものは、一七六七年、一七六八年及び一七七〇年に行はれたア・サ・ヤングの廣汎な農業旅行の記述にある。労働の価格に關してのこれ等の旅行からの一般的结果は、一年中の平均率で、一週七志四片四分の一であつた（註三）。一七六六年乃至一七七〇年——その年を含む——の五箇年の平

均を探ると、一クヲタアの小麥の価格は二磅七志八片又は殆んど四八志であり（註三）、それは一ブシエルにつき六志、そして一ベックにつき一志六片であらう。労働と小麥とのこの價格では、労働者は殆んど全く六分の五ベックを稼ぐことにならう。

註一 Annals of Agriculture, No. 271, p. 215.

註二 ウィンザア價格表の價格より九分の一を控除す。ア・サ・ヤングは品質に對してその上九分の一を控除してゐる。併しこれは、最近の諸表が當てはまる全國の一般平均に關しては確かに過大である。従つて私は終始ウィンザア表の價格を採り續けることとした。そして讀者は品質に對して適當と思ふ斟酌をしたらよからうが、それはロウズ氏によれば平均以上多大なものではなからう。

一八一〇年及び一八一一年には、三十七州からの記述は——これはア・サ・ヤングによれば全く満足なものであつたが——日傭労働の賃金をして一年中の平均率を一週一四志六片（註二）、又は一日殆んど二志六片たらしめる。一八一〇年に終る五年間の小麥の価格は九二志であり、——一八一一年に終るそれは九六志である（註三）。労働及び小麥の雙方の價格は二倍となつたことがわかる。そして労働者は、一八一〇年及び一八一一年には、約四十年前に稼ぐ得た高すなはち六分の五ベックと丁度略々同一量の小麥を稼ぐことにならう。中間期は必然的に、季節の不確實なるによつて、又時に穀物の價格が騰貴して而も直ちには労働の價格の増大を伴はぬ爲めに、輕微な變動を蒙らなければならなかつた。併し一般に、平均は殆んど同一であつたに相違なく、そして纏めて多年の間六分の五ベックから大いに相違したことは恐らく稀であつたであらう。

註一 Annals of Agriculture, No. 271, p. 215 and 216.

(アーサー・ヤングの與へた記述以來、全體を表現するに足る程廣汎な地域に亙る、農業労働の平均貨幣賃の一般的計算で、私の知つてゐるものはない。異なる州に於ける労働の價格には大きな相違があり、そして互ひに極めて距つてはゐない異なる教區に於いてすら大きな相違がある。併し『農業報告書』Agricultural Report に於ける多數の敘述及び私が他の方面から聞いたことがらして、私は、物價高の期間中の金と紙幣との間の相違を斟酌して、標準労働の貨幣價格の下落は二〇乃至二五パーセント以下ではなかつた、と考へ度い(三版註)。併し乍ら小麥の價格の下落は遙かにより大であつたから、十分に雇傭されてゐる労働者は、現在、物價高の如何なる時期に於いて稼ぎ得たよりもより多くの小麥を稼ぎ得る、といふことになる。上記の計算によれば、小麥が一八一一年に終る五年間を平均して一ブシエルにつき一二志、そして一ベックにつき三志であつた時には、労働者は彼れの一日についての二志半で僅かに六分の五ベックを稼ぎ得るに過ぎないこととならう。然るに現在では、若し彼が一日僅かに二〇片を稼ぎ、そして小麥が一クヲタアにつき五二志又は一ダシエルにつき六志六片であるならば、彼は一ベックたつぷり購買し得て而も半片を残すこととなる。若し彼れの賃賃が一日二志であるならば、彼は殆んど一ベック四分の一を購買し得るであらう。若し一クヲタアの小麦の價格が五二志ではなく一クヲタアにつき四八志であるならば——これは最近の或る期間よりもより高いのであるが——一週一二志又は一日二志を稼ぐ労働者は一ベック三分の一を購買し得、そして僅かに二〇片を稼ぐに過ぎぬ者は一ベッ

ク九分の一を購買し得るであらうが、これは、労働の價格がエリザベスの治世に甫めて述べられた一五七五年以來労働者が支配し得たよりもより大なる分量である。

二版註 多くの場合に於いて外見的下落は一五對一〇の比例であり、それ以上ですらあつた。ヨオクシアのノオス・ライディング地方に於ては、同一種類の賃賃は三志六片から二志及び二志三片に下落したと云はれてゐる。(Agricultural Report, Merry, p. 112.) シロップンシアに於ては二志四片から一志六片へ。(White, p. 24.) ノオサントンシア、レスタシア及びノッティンガムシアに於ては、一八二四年以來、一五志及び一八志から一〇志へ。(Buckly, p. 398.) スコットランドでは、收穫賃は、二志六片及び二志から一志六片及び一志へ、そして一五志及び一二志から一〇志及び八志六片へ。(Oliver, pp. 128 and 128.) 一般にロウランド地方に於いては労働の賃賃の主要部分は現物で支拂はれ、従つてその部分の貨幣價值は穀物の價格の下落と共に下落しなければならない。貨幣で支拂はれる部分は下落したが併し比較的ではない。賃賃が總て貨幣で支拂はれたカアカドブライトの監督官から數年前に私が得た私記に於いては、一八一一年乃至一八二二年に夏季賃賃の下落は二二片から一五片へ、そして冬季賃賃のそれは一八片から一志へであつたことがわかる。

(従つて、或る時期の間、殆んど恐らくは戦争以後常に、十分に雇傭せられた労働者は、穀物條令があるにも拘らず、通常量以上の小麦を購買し得てゐることは、確かに眞實である。農業労働者に關して現時の特別の害悪は、労働の價格及び其の他の農業者の支出に比較して穀物の價格が低い爲めに、農業者が熱心に農場經營をすることが出来ない、といふことであり、そしてその歸結は、多數の人間が教區による以外に雇傭せられてゐない、といふことである。労働者に對する需要の繁忙が、其の價値の比例的下落なき其の維持の爲めの財本の増大に依存することを、こ

れ以上明瞭に證示し得るものはない。

第五節 過去五世紀間の穀物及び労働に關する以上の回顧より推斷せらるべき結論に就いて

過去殆んど五世紀間の穀物及び労働の價格に關する以上の回顧より、吾々は若干の重要な推論を爲すことを得よう。

第一に、十六世紀に起つた労働の（穀物）【眞實】勞賃の大きな下落は、主として、その前に行はれた大きな且つ異常な上昇によつて惹起されたものでなければならず、そしてアメリカの鑛山の發見及びその結果たる貨幣の價值の下落によつて惹起されたものではないことがわかる、と私は考へる。吾々が、十五世紀の後半の間の労働の（穀物）勞賃をそれ以前及び以後のそれと比較する時には、この高き勞賃の原因が何であつたであらうとも、それは明かに特異であり、従つて永續的ではあり得なかつたことが、わかる。このことは實に、實にそれをそれ以前及び以後の時期に比較してのみならず、更に其の積極額を考へることによつて、明かである。一日に就き殆んど二ペック半の小麥の價值に當る稼ぎ高は、最も早い結婚と最も大きな家族の維持とを、許すであらう。それは（合衆國に於ける）【アメリカの】労働者の稼ぎ高と殆んど同一である。英蘭の如き國に於いては、當時に於いてすら、かゝる勞賃は單に一時的原因によつて惹起され得たに

すぎない。かゝる原因の中には、吾々は、穀物の分量を増大した所の農奴制の廢止以後の耕作組織の一般的改良、及び労働に對する大なる需要を惹起した所の商業及び製造業の比較的急速なる増進を、擧げなければならぬ。然るに、フランスに於ける戦争、ヨオク家とランカスタ家との間の内亂、そして就中恐らくは解放された許りの人民の習慣の遅々たる變化の爲めに、生産物及び需要のこの増大は未だ人口に及ぼす比例的影響を伴はなかつたのである。

フランスに於いても（註）英蘭に於いても穀物が極めて低廉であつたことは確實である。そして我國に於ける労働は、或る特異の原因又は諸原因が、穀物の供給と労働に對する需要とに比較して、人口の供給を抑制せざる限り、六十年乃至七十年といふが如き長期に互つて騰貴し且つ高く止つてゐることは出来なかつたであらう。

註 穀物の地金價格が、フランスに於いて、それが英蘭に於いて低かつたと全く同じ期間、一四四四年より一五一〇年に至るまで引續き異常に低かつたことは、極めて興味ある事である。（Garnier's Richesse des Nations, vol. II, p. 184.）
 ダム・スマスは、この下落と低き價格とを、需要に比較しての鑛山の供給の不足に歸するに傾してゐる。（B. I. ch. XI.）併しこの解決は、穀物の地金價格が下落しつゝある時に於ける、英蘭に於ける労働の地金價格の騰貴を、少しも説明するものではない。労働に比較しての、穀物の相對的豊富以外にはこの事實を説明し得るものはない——これは鑛山とは殆んど關係なき事態である。フランスに於ける低き價格は、恐らく、英蘭人の蹂躪が終りを告げた後の、農奴制の廢止と、シャルル七世及び彼の直接の後繼者達の治世に於ける耕作の擴張と、關聯を有つたものであらう。

併し乍ら、吾々が今主として關係してゐるのは、十五世紀に於ける極めて高き労働の勞賃の原因であるよりは寧ろその事實であり、そしてこの事實に關しては疑ひはあり得ない。併し若しこ

の事實が認められるならば、若しアメリカの鑛山が發見されなかつたとしても、かゝる勞賃は次の世紀の間極めて著しく下落したに違ひない、といふことになる。

貨幣の減價が、かゝる減價の有無に拘はらず不可避的に社會の（勞²働）【下層】階級を襲ふべきその貧困の増大を加重するに如何なる影響を及ぼしたであらうかは、容易には云ひ得ない。併し、減價が終りを告げた後に十七世紀に廣く存在した更により低き勞賃より、又近年起つたことより（これは間もなくより十分に述べられるであらうが）、私は、不良な季節ではなく貨幣の價値の變動によつて惹起された穀物の價格の一般的騰貴を以て、極めて僅かな年數以上に勞働階級に有害な影響を及ぼす傾向があるとは、考へようとはしないのである。併し乍ら尙ほ、【社會の】勞働階級の狀態が、アメリカの鑛山の發見による貨幣の減價が起りつゝあつた時に、更に益々惡化しつゝあつたことは、全く確實である。そしてその原因が何であつたであらうとも、人々は常に彼等の地位を、彼等自身の回想及び彼等の父祖のそれに於いて、その過去の狀態と比較してゐるものであるから、それは不可避的に大きな不平を勃發せしめたであらう。そしてエリザベスの治世の終りに於ける如くにそれが比較的極めて惡化した後には、それは我國の歴史のこの時期を特徴づける所の貧民に關するかの方策に導く傾向があつたのである。

この回顧から吾々が得ることの出来るもう一つの推論は、殆んど五〇〇年の過程の間、我國に於ける一日の勞働の稼²高は恐らく一ペックの小麥以上であつたよりも以下であつたことがより多く、一ペックの小麥は、その周圍に需要及び供給によつて變動しつゝある勞働の（穀物）【市

場】勞賃が擺動しつゝある、中點の如きもの、又は寧ろ中點以上、と考へられ得、そして一國の人口は、勞働の勞賃がこの點以下であつても、或る速度を以て増大し得よう、といふことである。

過去二世紀の間のフランスに於ける日傭勞働の勞賃は、可成り齊一に、二十分の一セティエの小麥であるといはれてゐるが（註、それは五分の四ペックを稍々越える程であらう。併し革命の直前、アーサ・ヤングのフランス旅行の當時にはそれは僅かに約四分の三ペックであつた。革命（後暫くの間）【以來】それは一ペック以上を支配する程に騰貴した様に思はれる。

註 Wealth of Nations, b. i. c. xi. p. 313. (譯者註—前掲譯書、上卷、四八二頁)

この回顧より吾々が得ることの出来る第三の推論は、季節は、密に時に二年又は三年のみならず、更に纏めて十五年又は二十年の間、（又時には遙かにより長い間）穀物の價格に極めて大なる影響を及ぼすといふことである。かゝる季節の不良の時期は、價格に最大の影響を及ぼすと思像せられ得べき總ての他の原因を、排除するやうに思はれる。このことの一例はエドワード三世の時代に於ける大疫病の後に起つてゐる。良い土地の分量が人口に比較して豊富であるから、穀物は極めて低廉であつたであらう、と當然に人は考へたに相違ない。併し乍らそれは、これに反し、それに次ぐ二十五年間高價であつた、——これは季節の不良によらずしては説明されない事實である。

同一種類のもう一つの例は、エドワード二世の治世に起つたが、その全期間中、穀物の平均價格は、エドワード一世の治世の最大部分及びエドワード三世の治世の前半に於けるその二倍以上であ

つた、——明かにこれは季節の不良によるものである。

第三の例は、十七世紀の内亂の間起つてゐる。私は、内亂は穀物を高價ならしめる必然的傾向を有つとは決して考へずに、十五世紀に於ける労働の高き價格と穀物の低廉とを、ヨオク家とラソカスタ家との内亂によつて惹起された耕作の破壊よりもより大なる人間の破壊といふ事情に、歸することに、サア・F・イードンに同意したのである。併し十七世紀の内亂に於いては、穀物のかくの如き低廉は起らなかつた。これに反し、一六四六年より一六六五年に至る時期に於いては、穀物の價格は、フランスに於いても英蘭に於いても、(フランス革命の戦争の間の)【最近二十五箇年の】我國に於ける價格を除けば、それ以前又はそれ以後の二十年といふ一期間に營つて知られてゐたよりも、より高かつた。より短い時期に於いてはかゝる季節の不良は屢々回起するものであり、そして十年又は五年の間労働者の状態に本質的に影響を及ぼさなければならぬ。それが貨幣勞賃を引上げるか又はそれを放置するかは、その繼續及び其他の併起する事情に依存するものである。

最低の(穀物)勞賃【又は眞實勞賃の最大の下落】の時期は、穀物の價格の大なる騰貴が、労働の價格の比例的騰貴に好都合でない事情の下に於いて、起つた時である。このことは、穀物の價格に比例して(労働の價格が騰貴し得ない)【以前の價格で労働を支配する能力が決して増大されない】所の、不良の季節に於いて、最も起る傾向が多い。若し何等かの前以ての原因が人口の増進に異常な刺激を與へてゐるならば、貨幣の價格の下落が起りつゝある時にも亦、それは起る

であらう。この場合には(労働の維持の爲めの財本)【國の資源】は急速に増大しつゝあるであらうが、人口はより急速に増大しつゝあるであらう、そして労働の(貨幣)勞賃は(穀物の價格)【貨幣の價值の下落】に比例して騰貴しないであらう。ヘンリ八世、メアリ、エドワード六世、及びエリザベスの治世の間の、労働の貨幣勞賃の不當な騰貴を、私は、この原因に歸したいと大いに思ふのである。十六世紀の初期に於ける事態は、人口増加に有力な刺激を與へたに相違ない。そして當時に於ける異常に高き穀物勞賃を考へ、そしてそれは極めて徐々として下落し得るに過ぎないことを考へるならば、この刺激は、この世紀の最大部分の間大なる力を以て作用し續けたに相違ない。事實上、人口減退の不平は十五世紀の終り及び十六世紀の初めに聲高く叫ばれ、そして人口の過剰は十六世紀の終りに於いて認められた。労働の穀物勞賃にかくも顯著な下落を惹起したのは、人口の状態に於けるこの悪化であつたのであり、そしてアメリカの鑛山の發見ではないのである。

若しアメリカの鑛山が發見せられた時に労働階級の人々がエドワード三世の治世の後半に彼等が稼いでゐた様に思はれると同一の勞賃を稼いでゐるに過ぎず、そして若し十六世紀の間に、實際起つたと同一の資本及び(生産物)【資源】の増大が起つてゐたならば、労働の貨幣勞賃は穀物の貨幣價格と同一の(分量だけ)【速度を以て】増大したであらうことには、(凡ゆる蓋然性がある)【私は最少の疑ひも感じない】。實際貨幣の價值の下落が資本の急速なる増大を伴ふ時には——これは屢々それを伴ふのであるが——何故に、自然的事態に於いて、労働の價格がそれを他の

貨物よりもより多く感じなければならぬか、といふことの、一つの理由があるのである。資源のかゝる増大により人口増加に與へられる刺激は、十六年又は十八年以下では市場に（大いに）有効に表はれ得ないであらう（三版註）。そして（その時迄は）「その間は」労働の供給に比較しての需要は、大抵の他の貨物の供給に比較しての需要よりも、より大であらう。

二版註 併し乍ら、労働の維持の爲めの財本の増大は、年頃になりつゝある者の間でも又成年の労働者の間でも死亡率を減少せしめることによつて、間もなく或る影響を及ぼすであらう。

一七九三年より一八一四年に至る間に起りそして疑ひもなく資本の大なる増大と労働に對する大なる需要とを伴つた所の貨幣の價值の下落に於いて、若し労働の價格が人爲的手段によつて低く保たれてゐなかつたならば、それは穀物の平均價格よりも比例的により高く騰貴したであらう、と（信すべき有力な理由がある）「私が固く信ずる」のは、この故である。「そしてこの意見は、思ふに、事實によつて立派に證明される。若し」一八一四年以前の労働の價格について得られてゐる最近の信すべき記述により、（アーサー・ヤングの敘述によつて）、一八一〇年及び一八一一年に於ける三十七州の數字を平均して、日傭労働の週賃が一四志六片である——これは、一七六七年、一七六八年及び一七七〇年の賃賃に比較すれば（註、同一期間の小麥の價格の騰貴に等しい——）ことが（分る。扱て）「分り、他方」英蘭の南部に於ける多くの州及び地方に於いて賃賃が、一八一〇年及び一八一一年に於いて、貧民の子供を税金で規則正しく維持するといふ有害な制度により、不自然に、一二志、一〇志、九志、及び七志六片にすら抑壓されてゐることが知られて

（ある。従つて）「あるならば」若しこの制度が英蘭の大きな部分に廣く行はれなかつたならば、労働の（貨幣）賃賃は小麥の價格に比例するよりもより高く騰貴したであらう、と正當に結論し得よう。

註 Annals of Agriculture, No. 271, pp. 215 and 216.

【そして】この結論は、スコットランド、及び英蘭の北方の或る地方に於いて、起つたことにより、更により以上確證されてゐる。これ等の地方に於いては、（貨幣）賃賃の騰貴は事實上穀物の騰貴よりもより大であり、そして一八一四年に至るまでの労働者の状態は、租税——それは嚴密の必需品に對する労働者の支配力には殆んど影響を及ぼさなかつたけれども、その多くは確かに労働者の便宜品及び愉樂品の重く負擔する所となつたが——にも拘らず、決定的に改善された點に於いて、總ての記述は一致するのである。

この回顧の過程に於いて労働の穀物賃賃を考察するに當つては、穀物の價格の下落と労働の價格の騰貴との結果の間に、（常に）區別を爲すことは出来なかつた。この二つの事を互に比較するに過ぎない時には結果は全く同様である。併し（労働に對する需要及び人口増加に對する刺激に及ぼす）「人口増加の刺激に於ける」兩者の結果は、私が前に暗示した如くに、時に極めて異なるものである。（労働に對する大なる需要）「人口の増大に對する大なる刺激」は、粗生産物の價格の下落と（完全に）兩立し得るものであり、それは蓋し、この下落にも拘はらず、（労働の維持の爲めの財本の全價值）「國の全生産物の交換價值」は尙ほ「労働に比較して」増大しつゝあ

るであらうからである【¹といふことには疑ひはない】。併し、粗生産物の価格の下落が（農業者の側に於ける）労働を使用する能力【¹と意思と】の減少を伴ふといふことが、時に起る【¹であらう】。そしてこの場合には、労働に對する需要と人口増加に對する刺戟とは労働の【¹外見的】穀物賃に比例しないであらう。

若し労働者が、【¹労働に對する需要によつて惹起された】（貨幣）²賃の騰貴の結果として、一日（六分の五）【¹四分の三】ベックの代りに一ベックの小麥を支配するならば、働く意思及び能力を有する總ての労働者は、そして恐らく彼等の妻子も亦使用せられるであらう【¹ことは確實である】。併し若し彼が（²時、農業者の（²收得の價值）【¹資本】を減少する所の穀物の価格の下落の故に、小麥のこの追加分量を支配し得るのであるならば、利益は眞實であるよりは外見的であり、そして労働（の²價格）は暫くの間は名目的には下落しないであらうが、而も労働に對する需要は退歩的ではないとしても停止的であらうから、其の現行價格は、大なる家族の全部の労働又は請負仕事に於ける其の家族の長の力作の増大による稼ぎ高の【¹確實な】指標ではないであらう（²版註）。

R註 この議論に於ける凡ゆることは、小麥の價格の下落の原因に依存しなければならぬ。その原因は一時的なのであるか、又は永續的なのであるか？ それは生産の便宜によつて惹起されるのか、又は一時的な貨物の供給過剰によつて惹起されるのか？ 貨幣は、穀物及び其の他の物に比較して、價值に於いて騰貴したのか、又は穀物の貨幣價格の騰貴は穀物のみに限られてゐるのか？ 下落がこれ等の原因の何れによるかに従つて、結果は異なるであらう。

私は、労働の價格が少しも變動しないのに、それに対する需要が、どうしても退歩的でないとしても停止的であらうかが、わからない。

労働の現行價格が、労働者及び其の家族の状態に關して吾々が有ち得る、最良の指標である。需要が減退し又は供給が増大する時に、競争が價格に影響を及ぼすのを、何が妨げ得るか？

二版註 總ての通常の事情の下に於いては、何等かの人口の増加が起らない中に、より以上の労働が働かせられ得よう。

従つて（R註）同一の現行穀物賃も、異なる事情の下に於いては、（²労働に對する需要及び労働階級の一般的状態の兩者に對し）【¹人口増加の刺戟の上で】異なる影響を有するであらうことは、（²確實）【¹明か】である（²版註）。

R註 この結論は、少くとも私が満足に行く様には、證明されてゐない。

二版註 このことは『農業報告書』に於いて頗々と指摘されてゐる。

労働の穀物賃を測定するに當つて、私が常に、最も高價な穀物たる小麥を採つてゐることを【¹も亦】、觀察せられ度い。私が他の必要品を除いて一つの穀物を探つたのは、蓋し問題を複雑にすることを避けたいからであり、そして小麥を選んだのは、蓋しそれは英蘭に於ける人口の最大部分の主たる食物であるからである。併し、人民の主たる食物が小麥ではない時期及び國に於いては、一家族が稼ぎ得る小麥での賃が、人口増加に對し與へられる刺戟の正當な指標を爲すものではないことは、明かである。小麥での賃は二つの異なる時期又は二つの異なる國に於いて極めて不等であつても、而も若し一方の場合にはより劣れる穀物が通常消費されてゐるならば、人口

増加に對する刺戟が同一であることも有り得よう。アイルランドの労働者は小麥では英蘭の労働者程の大きい家族を養ふことは出来ないが、併し彼は一般に、彼が通常それによつて生活する食物により、「遙かに」より大なる家族を養ふことが出来る。従つて人口は、前世紀の間アイルランドに於いて、英蘭に於けるよりも遙かに速かに増大したのである。

(然らば、労働に對する需要、人口増加に對する刺戟、及び労働者の状態を、正しく測定せんが爲めには、吾々は第一に、富の増大か資本の増大か又は全生産物の交換價値の増大かではなく、労働の維持に特別に充てられた財本の増大を、考察しなければならぬことが、わかる。

(第二に、かゝる財本を測定するに當つては、吾々は、單に其の全分量ではなく、其の全價値を考察し、そして労働の勞賃の中穀物から成つてゐない他の部分を正當に斟酌しなければならぬ。

(そして第三に、労働階級が稼ぐ食物及び必要品の額——その額が主として彼等の状態に影響を及ぼすのであるが——を測定するに當つては、吾々は、職業を見出すのが困難な時に於ける全家族の稼ぎ高と、それを爲すべき人手がある以上の仕事に對する需要がある時に於ける彼等の稼ぎ高とを、注意深く區別しなければならぬ。)

【然らば、労働の勞賃の中食物以外の他の部分の價値の變化を正當に斟酌すれば、労働家族が現實に稼ぎ得る習慣的穀物の分量は、同時に、人口増加に對する刺戟の尺度でもあれば、又労働者の状態の尺度でもあり、他方かゝる勞賃の貨幣價格は、一貨物が及び得る限りに於ける貨幣の價値の

最良の尺度であることが、分る。併し(その上に)生活の必需品(及び便宜品)に對する大なる支配は、二つの方法によつて、すなはち(労働の維持に充てられた財本の分量及び價値の急速な増大)【急速に増大し行く資源】か又は労働階級の慣習的習慣によつて、實現せられ得べく、そして(彼等の状態を改善する前の方法)【急速に増大し行く資源】は、貧民が(自ら)これを實現する能力もなく、又事の性質上永續的でもあり得ないから、労働階級の幸福の爲めのその大資源は、若し正當に發揮されたならば(彼等)【労働者】に社會の最初の段階から最後の段階に至るまで生活の必需品及び便宜品の正當な部分を保證し得る所の、慣習的習慣になければならぬ、といふことを常に銘記するは、最も重要なことである。

(私は、リカード氏によつて採用された言葉に從つての勞賃の騰落に就いては、何事も云はなかつた。かゝる勞賃すなはち比例的勞賃は、單に、利潤率を決定し又は寧ろそれによつて決定せられるに過ぎず、従つて次章に於いて考察されるであらう。それは屢々労働者の状態とは殆んど關係のないものであるが、蓋し労働者が得る生産物の比例に關して云へば、彼れの勞賃はアメリカ合衆國に於いては低く、そして彼が飢ゑつゝある國に於いては高いからである。若し實際勞賃が利潤の如く比例によつて測定されるならば、リカード氏の述べる如くに、それが共に一緒に騰落することを得ないのは、全く眞實であらう。若し勞賃が騰貴するならば利潤は下落しなければならず、そして若し勞賃が下落するならば利潤は騰貴しなければならぬ。これは採用された言葉の必然的歸結である。併しリカード氏は、思ふに、勞賃なる語をこの意味で用ひた最

初の人であつた。實際利潤及び利子は常に比例によつて測定せられたし、又常にそれで測定せられなければならない。併し勞賃は常に分量によつて測定せられたし、又常にそれで測定せられなければならない、すなはち勞働者が稼ぐ貨幣の分量によつてか、又はこの貨幣が彼をして購買し得せしめる生活の必需品及び便宜品の分量によつて。そして或る可成りの長期に關しては、前者ではなく、その後者によつて。

(然らば、比例的といふ語が或る特定の目的の爲めに加へられた時の外は、これが勞賃といふ語に附せられた通常の意味であることを、記憶しなければならぬ。従つて、社會の通常の且つ最も正しい言葉によれば、吾々は屢々、高い利潤と高い勞賃、低い利潤と低い勞賃か、一緒になつてゐるのを、見るのであるが、この表現を用ひる際には、高い及び低いといふのは、利潤に用ひられた方は、常に其の率又は比例のことであり、又勞賃に用ひられた方は、其の分量又は額のことである。)

【私は (R註)、リカアドウ氏によつて推定されてゐる指標により、すなはち、勞働者の稼ぎ高を獲得するに費された勞働又は勞働者の勞賃の勞働での原費により、測定された、勞働の價值に就いては、何事も云はなかつた。蓋し、私が勞働の眞實勞賃及び名目勞賃と呼んだものは、吾々の注意を主として要求する大きな三點たる、勞働者の状態、人口増加に對する刺戟、及び貨幣の價值、に關聯する總てのものを、含むやうに、私には思はれるからである。この論題に關するリカアドウ氏の見解によれば、これ等の點に關しては高き勞賃からも低き勞賃からも、何事も推論され得ない。か

かる高き勞賃又は低き勞賃は單に利潤率を決定するに役立つに過ぎぬのである、従つてこの點に關する其の影響は、次章に於いて十分に考察されるであらう。】

R註 マルサス氏は、彼が勞働の名目勞賃及び眞實勞賃と呼ぶものが、勞働者の状態及び人口増加に對する刺戟に關する凡ゆるものを含んでゐる、と考へてゐる。併し私のこの問題に關する見解によればこれ等の點に關して何事も推論され得ない、と彼は云ふ。私の見解は、勞働者の眞實の状態の検討を妨げるであらうか？ 成程私は、若し勞働者が彼れの仕事に對し高い價值を受取るならば、換言すれば若し彼が多く勞働の生産物を受取るならば、彼れの勞賃は高い、と云ふ。彼れの眞實の状態を知る爲めには、吾々はなほこの生産物は分量では幾何であるかを研究しなければならぬが、これこそがマルサス氏の行つた研究である。マルサス氏の所謂名目價格及び眞實價格に私が違ふ名を與へたので、彼は吾々の間には眞實の異見があるのだと思つてゐる——この場合には私は異見は何もないと思ふ。私は最初に勞働者の貨幣勞賃が幾何であるかを研究し、そしてこの貨幣勞賃が彼に齎らす必需品の分量によつて彼れの状態を測定し得るのである。

第五章 資本の利潤に就いて

第一節 (利潤の性質、及び其の測定法に就いて)

【利潤が生活資料獲得の困難の増大によつて影響を蒙ることに就いて】

國民收入の中、資本家に、彼れの資本の使用に對する代償として、歸屬する部分を、論ずるに當つて、それを貯財ストックの利潤の名で呼ぶのが、通常である。併し貯財はこの場合資本程適當な表現ではない。貯財とは(より)一般的な語であり、そして、それが何に向けられようと一國の總ての物質的所有物又は總ての其の現實の富である、と定義せられ得ようが、然るに資本とは、かゝる所有物の中、又はこの蓄積せられた富の中で、(將來の富の生産及び分配に)利潤の目的を以て使用せられるべき特殊部分である。併し乍ら兩者は屢々無差別に用ひられて居り、そして恐らくそれから何等の大きな誤謬も生じ得ないであらう。併し總ての資本は貯財であるけれども、總ての貯財は正當に云へば資本ではないことを、(従つて、資本は全貯財の中生産的に使用せられる部分の比例により増大せられようが、然るに一國の貯財の全分量又は富は最初は依然同一であらうことを)想起するのは有用であらう。

資本の利潤は、(生産された貨物)【貨物を生産するに必要な前拂】の價值と、(それを生産するに必要な前拂)【生産された時の貨物】の價值との、差額より成り、そしてこれ等の前拂は、(勞賃、地代、租税、利子、及び利潤で一般に出来上つてゐる蓄積品から成る)【一般に、それに先立つてその生産に或る分量の勞賃、利潤及び地代——土地生産物の場合に直接に支拂はれる地代を除く——を要費した、蓄積品で構成されてゐる】。

利潤の率とは、(生産された貨物)【前拂】の價值と(それを生産するに必要な前拂)【生産された貨物】の價值との差額が前拂の價值に對して採る比例である。【り、そしてそれは生産物の價值に比較しての前拂の價值の變動につれて變動する。】(生産物)【前拂】の價值が(前拂)【生産物】の價值に比較して大である時には、(超過は大)【殘額は小】であるから、利潤率は(高)【低】いであらう。(生産物の價值が前拂の價值を僅かしか超過しない)【前拂の價值が小である】時には、(差額は小)【殘額は大】であるから、利潤率は(低)【高】いであらう。

従つて、利潤率の變動は、明かに、(生産に必要な)前拂の價值と(獲得された)生産物の價值との比例を變更する原因に依存する。【そしてこの比例は、前拂の價值に影響を及ぼす事情か又は生産物の價值に影響を及ぼす事情かによつて變更されるであらう。】

(利潤は、吾々が總て知つてゐる様に、實際上、前拂の貨幣價格に比較しての生産物の貨幣價格によつて、測定されてゐる。そして貨幣は、商取引が續く短期間に於いては、價值を測定し分量は測定しないものと、普く考へられてゐるから、利潤は、上述の如くに、常に實際上、前拂の

價值に比較しての生産物の價值によつて測定せられ、そしてそれ等の相對的分量によつては測定せられない、といふことになる。それ等を分量に關して比較することは事實不可能であらうが、蓋し貨物を生産するに必要な前拂は、生産せられた貨物と總て同一種類である譯では決してなく、そして兩者が同一でない時には、それ等の分量は比較を許さないからである。吾々は、分量に於いて、靴又は毛織布を穀物又は労働と比較することは出来ない。

(資本家の前拂と收得との兩者を價值で測定しなければならず分量で測定してはならぬことを、十分理解することは、極めて重要であるから、従つてこの二つの取扱法の結果の相違を例證することは、それを爲すに値することであらう。

(人類の勤勞で獲得される總ての物品の中で、穀物の耕作に於ける程、前拂の中の大きな部分が生産物と同一なもの、一つもない。吾々はこの最も重要な貨物の生産に於いて實際に起ることを考察して見よう。

(農業者は實際上はその労働者に貨幣で支拂ふ。この貨幣が他の貨幣支出と共に二〇〇磅に上り、前拂が爲される年にそれが——小麦の價格が一クヲターにつき二磅であつて——百クヲターでなければならず、そして利潤率は二〇パーセントである——その場合には收得は一二〇クヲターでなければならず、又は分量で二〇パーセントでなければならぬ——と假定しよう。扱て若し翌年が不作であり、一二〇クヲターではなく僅かに一〇〇クヲターを産するに過ぎぬならば、分量に關しては支出に比較して收得には絶對に何等の超過もなく、そして資本家はそれによつて生活

すべきものを現實に何も得ないであらう。併し彼は實際に何も得ないであらうか？ そんなことは決してない。彼は恐らく通常よりもより貧しくならずにより豊かになりましょう。利潤は前述の如くに常に實際上貨幣で測定せられ分量では測定せられない。そして眞實の問題は、前拂の價格に比較しての生産物の價格に關するものであり、小麦での前拂以上に出づる小麦での收得の超過に關するのではない。社會にとつて極めて幸福なことは、一物品の分量の減少は、他の事情が同一であるならば、其の價格を引上げる、といふのが事物の本質である。そして穀物の供給の六分の一の減少は恐らくそれを五分の一よりも可成りにより多く引上げるであらう。併し乍ら騰貴が僅かに五分の一であるとすれば、貨幣での其の價值は一クヲターにつき四八志となり、そして八三クヲター三分の一の販賣は支出せられた資本を代置し、そして二〇パーセントの利潤を資本家に残すであらう、すなはちそれは、小麦での生産物が單に小麦での前拂に等しい時に、小麦での生産物が二〇パーセントだけより大である時と同じ大いさの利潤を、資本家に残すであらう。

(他方に於いて、耕作者が、小麦の價格が一クヲターにつき四八志といふ寧ろ不作の年に、二〇〇磅の價值の資本を前拂するならば、小麦での前拂は八三クヲター三分の一で現はされるであらう、そして若し收穫の後に生産物が一二〇クヲターであるならば、分量による測定では彼は四五パーセントを利得する様に見えるであらう。併し彼れの利得は眞實には價值で測定せられ分量では測定せられず、そして小麦の價格は四八志から四〇志に下落してゐるであらうから、前拂された二百磅を代置するには百クヲターの穀物が要り、そして生産物は一二〇クヲターであるから、

利潤は四五パーセントではなく僅かに二〇パーセントに過ぎぬであらう。

(従つて、若し耕作者の利潤が分量で測定されるならば、それが常に實際上測定されてゐる様に價格又は價値で測定して耕作者は各年に二〇パーセントといふ規則的な利潤を得てゐる正にその時に、それは無から四五パーセントにも變動し得ようことが、わかるのである。)

(上の場合に於いて、私は、全生産物の價格と利潤率とは依然同一であると假定した。併し若し、需要に比較しての供給の状態によつて決定される全生産物の價格が、前拂の價格に對して、一一〇對一〇〇の比例でなくなるならば、利潤は騰貴するか下落するかであらう。若し全生産物の價格が騰貴するならば、すなはち、若し全生産物が、一〇〇クワタアから成らうと一二〇クワタアから成らうと、二四〇磅ではなく二六〇磅に賣れるならば、全生産物の中より小なる比例が前拂された二〇〇磅を代置するに足り、そして利潤は二〇パーセントではなく三〇パーセントとなるであらう。(三版註。)

二版註 農業生産物の價格の騰貴がこれに超過することは、極めて稀ではない。トック氏はその *Details of the High and Low Prices*. に於て、小麦の價格が一七九五年及び一七九六年に於いて一クワタアにつき約四八志から七五志に騰貴しそして他の農業生産物も殆んどこれに比例する騰貴を伴つたので、農業者及び地主は、凡ゆる蓋然的な控除を斟酌しても、一年につき一千二百萬磅から一千四百萬磅の純追加利潤を彼等の間に分つたに違ひなく、そして一八〇〇年及び一八〇一年には更により、大なる利潤を分つたに違ひない、と想像してゐる。pp. 303 and 305, 2nd edit.

(他方に於いて、若し全生産物の價格が、大であらうと小であらうと、需要に比較しての供給の状態によつて、下落するとし、そして二四〇磅では賣れずに二二〇磅で賣れるとするならば、

全生産物の中より大なる比例が、前拂された二〇〇磅の資本を代置する爲めに必要であり、そして利潤は二〇パーセントから一〇パーセントに下落するであらう。

(生産物の分量のかゝる變動は單に一時的に過ぎず、そして關説せられるのは平均的超過でありそして季節によつて惹起される超過の變動ではない、と恐らく云はれるであらう。これに答へて、農業者の全收穫は決して其の豊富に比例して騰貴せず、そして決して其の缺乏に比例して下落しないことは、普く認められてゐるから、價値の平均的超過は生産物の平均的超過と同一でないことは、確實である、と云はれ得よう。)

(穀物は、それが労働者の主たる支持資料である爲めに、その生産に於いて、前拂された分量と生産された分量との間に比較が行はれ得る、唯一のものである。而もこの場合ですら、吾々は、利潤を決定する原因は其の相對的價値であり、そして其の相對的分量ではないことを、見出したのである。)

(製造業及び商業の職業に於いては、分量に關して前拂を生産物と比較することは不可能である。製造業に於ける生産力が如何に増大しようとも、需要及び供給の状態によつて決定される生産物の價値の殆んどそれに比例する下落が、生産物の分割に於ける何等かの永續的變化を妨げ、従つて短期間にして資本家に同一の又は殆んど同一の利潤率を與へることとなる。労働者は彼が生産せるものの中より大なる分量を受取るが、併し價値は同一である。そして彼れの狀態は、主として消費者としての彼にとつてのその物品の效用に比例して、利益を受けるであらう。これは、

運輸の便宜、又は外國の供給のより、豊富な源泉の發見によつて、低廉となつた、商業生産物に關しても、等しく眞實である。

(從つて、利潤は普く價值によつて測定せられ、そして決して分量によつて測定せられないことは、明かである。)

(扱つて、或る貨物又は多くの貨物の價值は常に需要に比較しての供給の状態によつて決定され、そして其の價值はそれが支配する標準労働の分量によつて測定され得ようことは、本書の第二章に於いて證示した所である。資本の前拂と生産物の回收との間に通常介在する短い期間にあつては、兩者は共に貨幣で正確に測定せられ得ようことも亦、既に述べた所からして明かである。從つて如何なる事業に於ける資本の使用に於いても、前拂は、價值に於いて増大しつゝあらうと減少しつゝあらうと、前以て知り且つ測定せられ得るであらうが、他方生産物の價值、及びその價值の中前拂の代置に充てられる比例は、生産物が賣られる時に確かめられなければならないのである。)

(從つて、凡ゆる貨物の生産に於ける利潤率の變動は、總ての場合に於いて供給及び需要の状態によつて決定される、前拂の既知の價值以上に出づる、販賣の時の其の價值の超過に、依存する。)

(これは、利潤が一時的な原因によつて影響せられようとは、又はより永續的な原因によつて影響せられようと、労働の生産力が大であらうと又は小であらうと、増大しつゝあらうと停止的であらう。)

らうと又は減少しつゝあらうと、等しく當てはまる、普遍的命題である。

(そして、この命題は、利潤は全生産物の價值の中それを得る爲めに使用せられた労働の勞賃の支拂に充てられる比例に依存する、と云ふ命題と、本質的に同一であることが、見られるであらう (二版註。)

二版註 箱と用語は異なるけれども、これはリカードウ氏の命題である、併し彼は、後の節に於いて見るであらう如くに、それを不正確に適用してゐる。

(この命題の眞理なることは、單に直接労働とそれに対する利潤のみが關する場合に於いて、全く明かである。若し百磅が直接労働に支出せられ、そして收得が年末に出來、そして一一〇磅、一二〇磅、又は一三〇磅に賣れるならば、各々の場合に於いて利潤が、全生産物の價值の中使用された労働を支拂ふに必要とされる比例によつて決定されることは、明かである。)

(若し市場に於ける生産物の價值が一一〇磅であるならば、労働者に支拂ふに必要とされる比例は生産物の價值の一分の一〇であり、そして利潤は十パーセントであらう。若し生産物の價值が一二〇磅であるならば、使用せられた労働を支拂ふに必要とされる比例は一二分の一〇であり、そして利潤は二十パーセントであらう。若し生産物の價值が一三〇磅であるならば、前拂された労働を支拂ふに必要とされる比例は一三分の一〇であり、そして利潤は三十パーセントであらう。)

(併し、資本家の前拂が労働のみから成らない時には、吾々は如何にして生産物の價值をそれ

を獲得するに必要とされる労働と比較すべきであるか、と問はれるであらう。

(一)この種の場合に於いては、次の極めて簡単な處理法が現れる。資本家が一般に、彼が前拂する資本の總ての部分に對し等しい利潤を期待することは、認められるであらう。彼れの前拂の價値の或る部分例へば四分の一が直接労働の勞賃から成り、そして四分の三が蓄積労働及び利潤と並びに地代、租税、又は其の他の支出から生ずべき或る追加とから、成ると假定しよう。この場合に於いては、獲得せられた生産物の價値の四分の一が、其の比例的利潤と共に、彼れの資本の中の直接労働の支拂に使用せられた部分を代置する。そして他の四分の三が、残りの利潤と共に、總ての彼れの他の前拂を代置する。かくて、資本家の利潤が、使用せられた労働の分量に比較して生産物のこの四分の一の價値の變動と共に、變動することは、換言すれば、利潤が、生産物の價値の中使用せられた労働の支拂に充てられる比例に、依存することは、嚴密に眞實であらう。

(二)例として、農業者が、一定面積の土地の耕作に二〇〇〇磅を使用し、その中一五〇〇磅を彼は、種子、馬の飼育、彼れの固定資本の損耗、彼れの固定資本及び流動資本に對する利子、地代、十分一税、租税、等に、そして五〇〇磅を直接労働に、支出し、そして年末に獲得された收得が二四〇〇磅に値する、と假定しよう。前拂を代置するに必要とされる價値は二〇〇〇磅であるから、農業者の利潤は四〇〇磅又は二十パーセントであることは、明かである。そして、若し吾々が生産物の價値の四分の一すなはち六〇〇磅をとり、そしてそれを直接労働の勞賃に支拂はれた額と比較するならば、結果が正確に同一の利潤率を示すことも、等しく明かである。

(如何に複雑であつても同様にして容易に解決され得ない場合はない。

(利潤は労働者と資本家とへの生産物の分割に依存すると云はれる時には、前拂の中直接労働の勞賃からは成らない大きな部分を提供した労働者及び資本家を除外する意味では勿論ない。そして吾々はかゝる前拂に於ける蓄積労働及び蓄積利潤の比例を正確に迎るか——これを爲すのは常に必ずしも容易ではない——又は生産物の中使用せられた直接労働の勞賃の支拂に充てられる比例を直ちに與へる所の上に述べた方法を採用するかしなければならぬ。結果は、吾々が全前拂を標準労働で測定し、そして利潤率を生産物の價値の中その分量の労働の勞賃を支拂ふに必要とされたもの以上に出づる超過によつて測定した場合と、正確に同一である。

(若し吾々が使用せられた固定資本の價値を前拂の一部分として計算するならば、吾々は年末のかゝる資本の残存價値を年々の收得の一部分として計算しなければならないことに、讀者は氣が付くであらう。この種の訂正を加へなければ、最大分量の固定資本が用ひられた産業部門に於いては、生産物の價値に比較しての資本の價値は最大である様に見え、従つて利潤率は最低であるといふことになる様に思はれるであらう。併し資本家は當然に、彼が生産に使用するものの全部を、前拂された資本と考へるけれども、併し實際は彼れの年々の前拂は、單に、彼れの流動資本、彼れの固定資本の損耗並びにそれに對する利子、及び彼れの流動資本の中必要に應じて彼れの年々の支拂を爲すに使用せられる貨幣から成る部分に對する利子、から成るに過ぎないのである。

(次は第一次の『工場委員報告書』 Report of the Factory Commissioners. (三四頁)の記述であるが、そこではもう一つの部類の前拂が臨時費の頭書の下に加へられてゐる。

建物及び機械に投ぜられた資本	10,000 磅
浮動資本	7,000 磅
500 磅	10,000 磅の固定資本に對する五パーセントの利子
350	浮動資本に對する同上
150	地代、租税、及び税金
650	固定資本の損耗に對する六パーセント二分の一の減債基金
1,650 磅	
1,100	臨時費、車力、石炭、油、等
2,750	
2,600	勞賃及び俸給
5,350 磅	
生産撚絲三六三,000 封度、價值一六,000 磅	

原棉使用量約四〇〇,〇〇〇封度、單價六片	
即ち	10,000 磅
諸掛り	5,350
	15,350
販賣價值、一六,000 磅	
利潤六五〇磅、即ち一五,三五〇磅の前拂に對し約四・二パーセント	

(撚絲の生産に使用せられた職工すなはち直接勞働の勞賃は前拂の約六分の一をなす、そしてこの前拂を生産物の價值の六分の一と比較するならば、それは明かに、前拂の全部に對する利潤率を指示するであらう。

(如何なる生産にも使用せられる直接勞働に屬すると云はれ得べき利潤に、讀者の特別の注意を惹きつけたのは、年々の貨幣前拂を年々の貨幣收得と比較するといふ通常の方法よりもよりよい利潤を確める方法を提議せんが爲めでは決してない。その目的は、この二つの方法は(前拂と收得との間の中間期に勞働の價格が變化し又は貨幣の價值が變動するといふ稀な場合を除けば)常に一致し、そして吾々が、前拂が直接勞働のみから成るといふ最も簡單な場合をとらうと、又は前拂の單に一小部分が直接勞働から成る最も複雑な場合をとらうと、利潤が、全生産物の價值の中それを獲得する爲めに使用せられた勞働の勞賃の支拂に充てられる比例に従つて、變動する

といふことが、眞實であると常にわかるであらうことを、證示せんとするにあるのである。

(第二節 利潤の制限原理に就いて) (譯者註)

譯者註——第一版ではこゝで節を改めない。従つて以下は第一節の中にある。

【生産に必要な前拂の中で、労働を支持する手段は一般に最大であり且つ最も重要である。従つてこれ等の手段は前拂の價值に最大の影響を及ぼすであらう。

【労働を支持する手段に影響を及ぼす二つの主要原因は次の如くである、
【第一 (R註一)、土地に於ける生産の難易、それによつて、全生産物の價值の中、使用される労働者を支持し得る比例が、より大にもより小にもなる。
【又第二に (R註二)、資本の分量の、それによつて使用される労働者の分量に對する、比例の變動、

それによつて、各個人労働者に歸屬すべき生活の必需品はより多くもより少くもなるであらう。
R註一・二 これ等の二原因は共に高き又は低き勞賃の下に分類せられ得よう。利潤は事實上高き又は低き勞賃に依存しそしてその外の何ものにも依存しない。

全生産物の價值の中労働者を支持するに必要な比例が大なれば大なる程、勞賃は益々高いであらう。資本の分量がそれが雇傭すべき労働に比較して大なれば大なる程、勞賃は益々高いであらう。

この總てに於いてマルサス氏と私とは一致する様に思はれる。土地に於ける生産の困難が、全生産物の價值の中より大なる比例が労働の支持に使用される底のものである時には常に、私は勞賃は高いと呼ぶが、蓋し私は價值をかゝる比例で測定するからである。そしてこゝでのマルサス氏の言葉から何人も彼は私に同意すると考へるであらう、而も二九一頁に於いては彼は曰く、『私は、リカードゥ氏によつて推定されてゐる指標「により」、すなはち、労働者の稼ぎ高を獲得するに費された労働又は労働者の勞賃の勞働での原費により、「測定された、労働の價值」に就いては、何事も云はなかつた。』(譯者註——勞賃に關する第一版の最後のパラグラフを参照、但しリカードゥ氏はそれを完全に引用してゐないので角括弧中に既述の部分を加へた。)何事でこれはマルサス氏の指標と違ふのか? 一〇〇クワタアの穀物が、耕作されてゐる最後の土地で、そしてこの一〇〇クワタアの中労働者の得る部分が六五クワタアである程に増大せる困難を以て、生産せられる。以前に最後に耕作せられた土地では、一一〇クワタアが同一分量の労働によつて生産せられ、そして労働者はその時には七〇クワタアを其の分前として獲得した。今労働者に支拂はれる部分はより少いが、併し全生産物の中彼等の労働が獲得する比例はより大であるが、蓋し彼等は以前には六三パーセントを得たが今は六五パーセントを得るからであり、そして一〇〇クワタアは今、一一〇クワタアが以前に有つてゐたと同一の價值に、騰貴するであらうから、彼等は、生産せられた分量の中より大なる比例を得ることによつて、より大なる價值をも得、そしてこの價值は、以前のより小なる價值の場合よりもより大なる分量の労働の生産物であらう。然らば私はより大なる比例とより大なる價值とは同一事を意味すると

主張し、私はマルサス氏が、價值測定の目的物たる粗生産物自身を除いて、價值を測定する爲めに彼が好む如何なる媒介物を選んでも構はないが、彼は私の命題の眞實なることを見出すであらう。勿論尺度自身は、比較を行ふ二期の間に價值に於いて變動してゐてはならない。

【これ等の原因の各々は、そのみで、利潤が蒙り得る總ての變動を惹起すに十分である。若しその一つのみが作用するならば、其の作用は簡單であらう。社會の進歩に於いて、常に必ずしも説明の容易でない各様の現象を惹起すものは、この二つの結合、及びそれに加ふるに、時に相並んで働き又時に反對に働く他のものの結合、である。】

(利潤率の變動が、生産に必要な前拂の價值と獲得せられた生産物の價值との比例を變動せしめる諸原因に依存することは、前節に於いて述べた所である。)

(これ等の比例に影響を及ぼす二つの主たる原因は、土地に使用せられた最後の資本の生産性又は不生産性であり、それによつて生産物の價值の中、使用される労働者を支持し得る比例が、より小にもより大にもなる。これは利潤の制限原理と呼ばれ得よう。そして第二に、需要及び供給の偶發的又は通常の状態によつて惹起される同一分量の労働の生産物の價值の變動であり、それによつて、使用せられた労働者の分前に歸する生産物の比例が、より大にもより小にもなる。これは利潤の規制原理と呼ばれ得よう、この第二の原因は不斷に第一の原因を修正してゐるのであるが、併しそれ等を各別に考察するのが望ましいであらう。)

(然らば)若し第一の原因が單獨に作用し、そして個人労働者の(穀物)勞賃が常に同一であ

(り)、「¹」ならば、然らば「農業に於ける(全)熟練は依然變更されず、又(租税はなく又)外國より穀物を獲得する手段は何もないと假定すれば、利潤率は、社會が進歩するにつれ、又それを働かすにより多くの労働を必要とする劣れる機械に頼ることが必要となるにつれ、規則正しく【且つ何等の妨げなしに】下落しなければならぬ。

この場合に於いて、食物の爲めに耕作されてゐる最後の土地が、其の耕作されざる状態に於いて、地代を産出してゐたか否かは、どうでもよいことであらう。地主は、彼が少くともそれに對し以前と同一の地代を獲得し得ない限り、その耕作を許さないであらうことは、確實である。これは、進歩せる國に於いて耕作されてゐる最悪の土地に於ける、絶對的條件と考へなければならぬ。この支拂が爲された後には、生産物の殘部は、(殆んど全く)【主として(一版註)資本家と労働者との間に分たれるであらう、そして若し一定の生産物を獲得するに必要な労働者の數が絶えず増大しつゝあり、そして各労働者の(穀物)勞賃が依然として同一であるならば、労働の支拂に充てられる部分は、絶えず、利潤の支拂に充てられる部分を蠶食するであらうことは、明かである。そして利潤率は言ふまでもなく引續き規則正しく減少し行き、終に、貯蓄の能力及び意思の缺乏によつて、蓄積の増進は停止して了ふであらう。

一版註 私は、主としてと言ふが、蓋し事實上、或る地代が——それは輕微なものであらうが——殆んど常に、農業者の資本の原料に於いて支拂はれてゐるからである。

この場合に於いて (R註)、又同一の生産物の總ての部分に對する等しい需要を假定すれば (註)、

農業に於ける資本の利潤が、耕作されてゐる最後の土地の肥沃度に、又は一定分量の労働によつて獲得される生産物の額に、比例するであらうことは、明かである。そして同一の國に於ける利潤は等しくなる傾向があるから、一般利潤率は同一の過程を追ふであらう。

R註 私は、この利潤の説明では、マルサス氏に全く同意する。

註 この主張をかくの如く限定する必要があるのは、蓋し、農業の主要生産物に關しては、總ての部分が同一の價值を有さないといふことが、容易に起り得ようからである。若し農業者が、彼れの家に住み、食物及び衣服を彼が給與する、僱婢によつて、彼れの土地を耕作するならば、彼れの前拂は常に分量に於いて殆んど同一であり、そして同一の高き使用上の價值を有つであらう。併し通常の市場の閉鎖又は異常な豊富な季節による供給過剰の場合には、收穫の一部分は使用上にも交換上にも何等の價值を有せず、そして彼れの利潤は、(前に二六四頁で證示せる如くに)、(譯者註——本章第一節の第八及び九パラグラフ) それを生産するに必要な前拂以上に出づる生産された分量の超過によつては決して決定され得ないであらう。

併し一寸考察すれば (R註、吾々は、労働の(穀物)「眞實」勞賃の恆常的齊一といふことになされた假定は、常に現實の事態に反するのみならず、更に一矛盾を含むものなることが、わかるであらう。

R註 而も労働の價值はマルサス氏の交換上の眞實價值の標準尺度なのだ。次の諸パラグラフを見よ。

人口の増進は、殆んど専ら、労働者に報酬として現實に與へられる生活の必要品の分量によつて左右される。そして若し労働者が、最初から、現實の人口を維持するに足るより以上に有たな

いならば、労働階級は増大し得ず、又より貧弱な土地の耕作を増進することも出来ないであらう。他方に於いて、若し労働の(穀物)「眞實」勞賃が人口の増大を許し且つ刺戟する程であり、而も常に依然同一であるならば、それは、資本の蓄積と人口の増大を支持する手段とが全く停止した後に、人口が(同一率で)繼續的に増大するといふ、矛盾を含むことになるであらう。

然らば吾々は、「少くとも吾々が労働の(穀物勞賃の)自然的且つ恆常的(率)「價格なる語で生活の必要品の不變量を意味するのであるならば、かゝる價格」を假定することは出来ない。そして若し吾々が(必需品で測定された)労働の(勞賃)「眞實價格」を固定し得ないならば、それは明かに、(労働の供給に比較しての労働の維持に充てられた財本)「資本及び収入と供給に比較しての労働に對する需要と」の増進につれて、變動しなければならぬ。

併し乍ら、吾々は、若し望むならば、資本及び人口の齊一なる増進を假定し得よう。その意味は今の場合に於いて永續的に同一率の増進といふことではなく——これは不可能である——一時的促進又は遅延なしに最大可能額に向ふ齊一なる増進のことである。そして吾々が現實の事態に進む前に、利潤はかゝる事情の下に於いて如何様な影響を蒙るか、といふことを考慮するのは、興味あることであらう。

文明的植民による肥沃な國の耕作の開始に當り、且つ富める土地が豊富にある間は、生産物の價值の中單に一小部分のみが、地代の形態に於いて支拂はれるであらう。(労働の生産性は大であるから、若し)殆んど全部が「利潤及び」勞賃(及び利潤)に分たれる(ならば、労働者は多

量の生産物を獲得し、他方全部の中の十分な比例が大きな利潤を産み出す爲めに残され、そして労賃及び利潤は共に同時に高いであらう(三版註)。【であらう。そしてその各々が取る比例は、それが各個人労働者の分前によつて影響される限りに於いて、労働の需要及び供給に比較しての資本の需要及び供給によつて、決定されなければならない。】

二版註 讀者は、労賃は、他の特別の表現がなされない限り、常に分量に關説し、そして利潤は比例に關説することを、想起せられ度い。

社會が引續き進むにつれ、若し領域が限られて居り又は土壤が異なる質を有するならば、土地の耕作に使用せられる労働の生産力が徐々として減少しなければならぬのは、全く明かである。そして一定分量の「資本及び」労働は益々小なる收得を産出すであらうから、労働と利潤との間に分割さるべき生産物は明かに益々小になるであらう。

若し、労働の能力が減少するにつれて、労働者の物理的欲求も亦同一の比例で減少するとするならば、然らば全生産物の中同一の分前が資本家に残され、そして利潤率は必ずしも下落しないであらう。併し労働者の物理的欲求は常に同一である。そして、社會の進歩に於いて、労働に比較して食料品の稀少が増大して行くので、これ等の要求は一般に益々十分には充たされなくなり、そして労働の(穀物)「眞實」労賃は徐々として下落するけれども、而も、それを越し得ない限界があり、そして恐らくそれ程遠くない所にあることは明かである。或る分量の食物の支配が、労働者に、彼自身及び單に停止的人口を維持するに過ぎぬ如き家族を支持する爲めに、絶對的に

必要である。従つて、より多くの労働を必要とするより貧弱な土地が、相次いで耕作に引入られるならば、各個人労働者の穀物労賃は生産物の減少に比例して減少せられ得ないであらう。全部の中より大なる比例が必然的に労働(の労賃の支拂に充てられる)【に歸屬する】であらう。そして利潤率は引續き規則正しく下落し行き、終に資本の蓄積は停止するであらう。

かくの如きものが、新しき且つより肥沃ならざる土地の耕作の進行又は既耕地のより以上の改良に用ひられた、資本の蓄積の進行に於ける、利潤及び労賃の必然的過程であらう。そしてこゝになされた假定によれば、利潤及び(穀物)「眞實」労賃の兩者の率は、最初には最高であり、そして相共に規則正しく徐々として減少し、終にその兩者は同時に停止するに至り、そして生産物の増大に對する需要は有效ではなくなるであらう。

かくする中に、土地——ここでは労働の生産力は必然的に減少する——に使用せられたものは異なる種類の勤勞たる、製造業及び商業——ここではかゝる生産力は常に必ずしも減少しない許りでなく、更に極めて屢々大いに増大する——に使用せられた資本の利潤は、どうなるのであるか? と問はれるであらう。

土地の耕作に於いては、利潤の必然的減少の「直接の且つ主たる」原因は、(同一分量の労働によつて獲得せられる生産物の分量の減少である。)(同一の生産物を獲得するに必要な労働の分量の増大であることが分つた。)(製造業及び商業に於いては、それは、(同一額)「穀物及び労働に比較しての、これ等の部門に於ける勤勞」の生産物の交換價値の下落である。

(穀物を生産するに必要な労働)【穀物及び労働の生産費】は(2) 不可避的な物理的原因により【不漸に】増大する(といふ常住の傾向がある)が、然るに製造品及び通商物品(を2)生産するに必要な労働)【の生産費】は、時に減少し時に停止的であり、そして兎に角穀物(を2)生産するに必要な労働)【及び労働の生産費】よりは遙かにより遅く増大する。従つて、(利潤が農業に於いて下落する時には、資本を土地に使用するよりは製造業及び商業に使用する方が、明かにより有利になる。そして資本はその結果としてその様に使用せられ、終に製造品及び商業生産物に、其の相對的豊富によつて、下落が起ることとなるであらう。併し、同一分量の労働の價值は常に依然同一であらうといふことは、既に證示した所である。そして、若し生産物が價值に於いて下落し、他方それを生産するに必要な労働の分量又は資本の價值が依然同一であるならば、利潤が下落しなければならぬことは、明かである。更に、この下落が、製造業及び商業に於ける利潤が殆んど農業に於けるそれと等しくなる迄下落する迄、必然的に續かなければならぬことも、明かである。)【需要及び供給の凡ゆる原理により、これ等の後の物の交換價值は、労働の價值に比較して下落しなければならぬ。併し若し労働の交換價值が引續き騰貴し、他方製造品の交換價值が下落するか、同一であるか、又は遙かにより少ない程度に騰貴するならば、利潤は引續き下落しなければならぬ。】かくの如くして、改良の進行に於いて、益々より貧弱な土地が耕作に引入られるにつれて、(一般)利潤率は最後に耕作せられた土壤の能力によつて制限されなければならぬことが、わかる。若し耕作せられてゐる最後の土地が、それを生産するに必要な(資本の最

低)【労働の】價值以上に出づる價值の或る超過を産出(す)【せしめられ得】るに過ぎないならば、【競争の原理によつて、】利潤は、一般に、恐らくこの超過が許すよりもより高くあり得ないことは、明かである。目盛りの上昇に於いて、これは突破され得ない障壁である。併し制限は規制とは本質的に異なる。目盛りの下降に於いては、(土地がなほ肥沃である間は)利潤は如何なる程度にもより低くなり得よう。こゝには利潤率を決定する統制的必然性はない。そして土地の現實の狀態が許すこの最高限界の下には、(規制原理)【他の諸原因】の作用の爲めの十分の活動の餘地が残されてゐるのである。

E註 私に本節を通じて原理上マルサス氏に同意する、吾々は單に、價值の眞實尺度を構成するものに關する吾々の觀念に於いて意見を異にするに過ぎない。

(第三節 利潤の規制原理に就いて) 【第二節 利潤が、資本が労働に對して採る比例によつて、影響を蒙ることに就いて】

(利潤に影響を及ぼす第二の原因は、需要及び供給の狀態によつて決定される所の、同一價值の資本の上での同一分量の労働の生産物の價值の變動である。土地の狀態によつて劃される極限の範圍内で、利潤の總ての變動は、一時的のものであらうと耐久的のものであらうと、それによ

つて規制されるから、これは利潤の規制原理と呼ばれ得よう。

〔生産物の價値のかゝる變動は、主として、資本が使用する労働に比較しての、労働の維持の爲めの財本フナドを含んでの資本の豊富又は稀少によつて、惹起される。〕

〔前拂の額を増大することによつて利潤に影響を及ぼす第二の主たる原因は、資本が労働に對して採る比例である（一版註）。〕

一版註 私は前の章に於いて、労働に對する需要は資本のみに依存するものではなく、資本及び収入の兩者に、又は全生産物の價値に、依存するものなることを述べた。併し今の假定を例證する爲めには、資本及び労働を考察するの必要あるに過ぎない。吾々は需要に關しては何等の困難も起らないであらうと認め得よう。

これは明かに、（労働者に生産物のより大なる又はより小なる比例を報酬として與へることにより、利潤に有力な影響を及ぼさなければならぬ）〔そのみで最大の影響を産出し得る〕原因である。そして（富み且つ消費せられてゐない土壤に於いて）資本（及び生産物）の供給と労働の供給との間に（大きな）〔適當な〕變動が起るものと〔假定〕すれば、第一の原因の作用によると同一の〔總ての〕影響が利潤に及ぼされ、而も遙かにより短期間にして及ぼされるであらう。〔資本が労働に比較して實際豊富な時には、低き利潤を妨げ得るものは何もない。そして生産の最大の便宜も、資本が労働に比較して稀少でない限り、高き利潤を産出し得ない。〕

〔併し〕第二の原因の利潤に及ぼす有力な影響をより明かに見る爲めに、暫くの間それがそれだけで働くものと考へ、そして、一國の資本（及び生産物）が引續き増大し行く時に、其の人口

が或る奇異の影響によつて妨げられ且つそれに對する需要に及ばなくされてゐる、と假定しよう。これ等の事情の下に於いては、資本（及び生産物）が労働に對してとる比例には（一つの）〔凡ゆる種類の〕等級が生じ得、そして吾々はその結果として（類似の）〔凡ゆる種類の〕等級が利潤率に生ずるのを見るであらう。

〔若し進歩の初期に於いて（R註、資本が労働に比較して稀少であるならば、労働の勞賃はこの故に低く、他方労働の生産力は土地の肥沃度によつて大であるから、利潤に残された比例は必然的に極めて大であり、そして利潤率は極めて高いであらう。〕

R註 私はマルサス氏が利潤を比例によつて測定してゐるのを見て嬉しい。私は唯彼に勞賃を同一の通則によつて測定することを要求するだけだ。若し彼がさうするならば、彼は、高き利潤と高き眞實勞賃とが耕作の初期に一緒に見られる、とは云はないであらう。こゝでの吾々の唯一の相違は吾々が同一事に與へる名前にある、吾々は共に労働者は高き穀物勞賃を得るのであらうといふことに同意する、従つてマルサス氏は彼れの勞賃を高い眞實勞賃と呼ぶのである。穀物がかくも容易に生産される時にはそれは低い價値にあることは認められてゐることであるから、私は彼れの高き穀物勞賃は低い價値を有ち、従つて彼れの眞實勞賃は低いであらう、と云ふ。そして其の證據は、彼は生産物の小なる比例しか得ない、といふことである。

〔併し乍ら、一般的には、資本は耕作の初期には稀少であるといはれ得ようけれども、而も食物に歸する資本の特定部分は人口に比較して屢々豊富であり、そして高き利潤と高き眞實勞賃とが相

並んで見出される。最も自然的な事態に於いては、これが一般的に事實である、尤も資本が浪費又は其の他の原因により尙早に妨げられる時にはさうではない。併し吾々が低い穀物賃から出發しようとは高いそれから出發しようとは、労働に比較しての資本の徐々たる増大による利潤率の減少といふことは、依然棄されはしないであらう。】

資本（及び生産物）は「何時でも」(R註)労働よりもより速かに増大するから、資本の利潤は下落するであらう、そして若し資本（及び生産物）の増大の進行が起り、他方人口は或る不明の原因によつて、土壤の肥沃度と食物の豊富とも拘らず、それと歩調を合せることを妨げられるとすれば、然らば利潤は徐々として低減せられ、終に相次ぐ低減によつて蓄積の能力及び意思は働かなくなるであらう。(そしてこの事態は、個人的奉仕に従事してゐた者の大きな比例が貯蓄によつて急速に生産的労働者に換へられるならば、急速に生じ得よう。)

R註 労働者は獨占を有つてであらう、そして彼等の労働の価格は一に需要に依存するであらう。利潤はこの場合には、それが現在の事態に於いて資本の蓄積の進行によつて蒙つてゐると「正」に同一種類の、減少の進行を経験するであらう。併し地代及び賃賃が蒙る影響は極めて異なるといであらう。假定によれば、人口の増進は遅延せしめられ、かゝる國に於ける其の額は大ではあり得ない極めて肥沃な土地が耕作せられないのである。従つて、供給に比較しての肥沃な土地に對する需要は比較的小であらう。そして國民生産物の全部に關しては、地代より成る部分は主とし

て、人口が停止するに至らぬ中に耕作されてゐたより肥沃な土地の等級と耕作せられてゐない土地より得らるべき生産物の價值に、依存するであらう。

（賃賃に關して云へば、資本が引續き増大する限り、それは（必需品、便宜品、及び奢侈品で）引續き果進的に騰貴し、【そして音に（現在の事態に於いて一般に然る如くに）製造品及び外國通商の生産物のみならず、更に穀物及び其の他の總ての必需品の、より大なる支配力を労働者に與へ、彼れの】（労働者の）境遇を絶えず且つ總ての點に於いて改善するに至るであらう。

略言すれば、生産物の總體が分割される三大部分たる、地代、利潤、及び賃賃の中で、その前二者は、土地の供給と資本の供給との兩者が需要に比較して豊富であるから、低いであらう。然るに労働の賃賃は、（労働の維持の爲めの財本が）労働者の供給（に比較して大いに豊富）【が比較的稀少】であるから、極めて高いであらう。かくしてその各々の價值は、需要及び供給の大原理によつて左右されるであらう。

若し、人口が或る特異な影響によつて妨げられると假定する代りに、吾々が、領域は限られて居り、その總ての土地は殆んど等しい質を有ち、且つ殆んど資本がそれに投ぜられる要のない程の大きな肥沃度を有つてゐるといふ、より自然的な假定を爲すならば、地代及び賃賃に及ぼす結果は前の場合に於けるとは極めて異なるであらうけれども、資本の利潤に及ぼすそれは全く同一であらう。總ての土地が耕作され、そしてそれ以上の資本はそれに使用され得なくなつた後は、地代は極度に高くそして利潤及び賃賃は極めて低いであらう、といふことには疑ひはあり得ない。

製造業及び商業に於ける増大し行く資本の競争は利潤率を低減し、他方人口の原理は引續き労働階級の數を増加し、終に彼等の穀物勞賃は彼等のより以上の増大を妨げる程に低くなるであらう。恐らく、(想定されてゐる總ての土壤の肥沃度)【土地に於ける生産の便宜】と製造業及び商業に使用せられ(得べき)【る】者の比例が大であることにより、輸出は大となりそして貨幣の價値は極めて低いであらう。穀物の貨幣價格及び貨幣勞賃は(R註、恐らく、労働での(全生産物の)【其の】原費が二倍又は三倍であつた場合と同様に高いであらう。(食物はその時には嚴密な獨占となるであらう。)地代は、貧弱な土地に助力を求めること及び土壤の等級がなくとも、異常な高度に騰貴するであらう。そして利潤は、労働者の食物を獲得するに何等の追加労働をも必要とすることなくして、現實の資本を維持するに丁度足るに過ぎぬ點に下落するであらう。

R註 貨幣がかゝる原因により價値に於いて下落するであらうと信ずることは出来る。併しそれが下落するとしても、それに何の重要性があらうか？

右に爲した二つの假定から(R註、明かに生ずる結果は、より貧弱な土地を相次いで耕作する爲めに必要な労働量の遞増は、最高率から最低率への利潤の下落にとり理論上は必要でないことを、明瞭に證示する。

R註 この場合には地主は嚴密な獨占を有つてであらう、そして穀物の價格は消費者がそれに対し支拂ふ能力の限界まで騰貴するであらう。

これ等の二つの假定の前者は、更に、社會の労働階級の所有する(大きな)【異常な】能力――

若し彼等がこれを行使せんとするならば――を證示する。或る奇異な影響によつて惹起されたと考へられた人口に對する比較的妨げは、實際は、貧民の愼慮によつて行はれ得よう。そしてそれは疑ひもなく前記の結果を伴ふであらう。國の土地、資本、及び労働によつて獲得された多量の生産品の中(R註、極めて小なる部分が(各個人)【各別に労働階級】の分前に歸するといふのは、當然に労働階級に苛酷なことに思はれるかも知れない。併しこの(分量)【分割】は、供給及び需要の不可避的法則によつて現在決定されて居り、そして常に將來も決定されなければならない。若し市場に於ける労働の供給が比較的に不足であるならば、地主及び資本家は、生産物の中より大なる(分量)【分前】を各労働者に與へざるを得ないであらう。併し労働の供給が豊富であるならば、かゝる(分量)【分前】は、永續的には、絶對的不可能事である。富者は、市場に於ける労働の供給を不足にして置く能力も有たなければ、又彼等が總てその意思を有つと期待することも出来ない。併し、この傾向を有たぬ貧民の大衆を一般的に改善せんとする凡ゆる努力は、完全に無効であり且つ兒戯に類する。従つて、貧民自身の知識と愼慮とが、絶對的に、それにより彼等の境遇の何等かの一般的(且つ永續的)改善が行はれ得る唯一の手段であることは、全く明かである。彼等は實際彼等自身の運命の裁決者である。そして他人が彼等の爲めに爲し得る所は、彼等が彼等自身の爲めに爲し得る所に比較すれば、秤の埃の如きものである。これ等の眞理は社會の大衆の幸福にとり極めて重要であるから、それを繰返す爲めに凡ゆる機會が利用されなければならない。

R註 この全部は立派なものであり、そして労働階級の心に如何に屢々説かれても又如何に明瞭に説かれてもそれが過度であることはあり得ないものである。

併し、(労働階級)「貧民」の側に於ける或る特別の愼慮の努力を別にすれば、(労働の生産力が殆んど同一である間は)労働の供給と資本の供給とが常に必ずしも互ひに歩調を合せるものではないことは、(経験上わかる。)(「確実である。)(「實際上)兩者は屢々或る距離に又可成りの間分離されてゐる。そして或る時には人口が資本(及び生産物)よりもより速かに増大し、又他の時には資本(及び生産物)が人口よりもより速かに増大するのである。

例へば、人口の性質そのものと、成長し切つた労働者を市場に齎らすに必要な時間とにより、資本(及び生産物)の突然の増大は、十六年又は十八年以下では、労働の比例的供給を生じ得ない。【そして】他方に於いて、資本(及び生産物)が蓄積の意思の缺乏によつて(殆んど)停止的である時には、人口は一般に引續き(それを支持すべき生産物)【資本】よりもより急速に増大し(勝ちであり)、終には労働の賃金は、國の現實の習慣で以て停止的人口を維持するに足るより以上に出でない標準に、低減されるに至ることは、人のよく知る所である。

【資本及び】人口(及び生産物)が相互に歩調を合せないこれ等の時期は、明かに、(労働の賃金の支拂に充てられる比例を本質的に變更し、従つて利潤率に本質的に)【利潤率に最も重要な結果を生ぜしめ且つ最も本質的に國民的富の増進に】影響を及ぼすに足る程度のものである。

【政府の長期年金の價値は】R註、それに與へられた期限の終りに接近するにつれて、減少する自

然的且つ不可避的傾向を有する。これは私が何人も疑はうとはしないと考へる命題である。併し其の眞實なることを最も十分に認めても、この種の資本の價値を、一にそれがこれから經過すべき年數によつて評價するのは、極めて誤れる計算であらう。九十年といふ比較的短い期限の中、二十年といふが如き大きな比例が經過して、而も啻に價値が少しも減少しない許りでなく更にそれが現實に増大するといふことが時にあることは、人のよく知る所である。【譯者註】このパラグラフの最初と後半とは第二版の四番目のパラグラフを参照せよ。

R註 マルサス氏は、何人かが利潤の可變性の眞實なることを疑ふと、思つてゐるのであるか? 【同様にして、利潤は、社會の進歩に於いて、食物を獲得するの困難の増大によつて、下落するの自然的且つ必然的傾向を有するといふことは、殆んど何人も争はうとはしない命題である。併し或る國に於ける利潤率を、十年、二十年、又は五十年を通じてすら、すなはち國民的繁榮に及ぼす最も重要な影響を産出するに足る期間に互つて、この原因のみに頼つて測定せんと企てることは、不可避的に最大の實際的誤謬に導くであらう。

【然るに】R註、現存の現象を説明するにはこの一つの原因では全く不適當であるにも拘らず、リカード氏は、利潤に關する彼れの極めて優れた章に於いて、他の原因には留意してゐないのである。】

R註 マルサス氏はこゝで、證明の極めて困難なことを彼が見出すべき私に對する反對論を、提出してゐる。彼は自分自身本書第一節の二九四頁で(譯者註)第一版の第七(及び第八番目のパラグラフ)利潤の下落に對し二つ

の原因を述べてゐる。私は、利潤はこれ等の原因の一方又は他方によるに非ざれば決して變動しない、と考へる點で、彼に全く一致する。併し乍ら私は、雙方の場合に於いて労働者は全生産物のより大なる比例かより小なる比例かを受取るから、それ等は一つの項目下に分類せられ得ようといふことを、證しんと努めた。若しより大なる比例ならば、私は彼れの勞賃はより高いと呼び、若しより小なる比例ならば、より低いと呼ぶ。

然らば利潤は勞賃が低かつた時には高く、そして勞賃が高かつた時には低かつたのである。扱てマルサス氏は、彼が高き又は低き利潤に對し擧げてゐる原因の雙方は、生産物のより大なる又はより小なる比例を労働者に割當てることになるのを、否定しないであらう。——労働者が生産物の大なる比例を得る時に、彼はそれを高い勞賃とは呼ばないであらう、蓋し彼は價值を分量によつて測定し、そして比例によつては測定しないから、——併し彼はこゝでは單に名前に就いて意見を異にするだけである。吾々は同一事を意味し、そして同一事を意味してゐることを彼は知つてゐる。扱て私は普く、高き又は低き利潤は低き又は高き勞賃に依存する、と主張した、然らば、私に就いて、私が認めた高き又は低き利潤の唯一の原因は、労働者に食物を與へるの便宜又は困難である、とは如何にして正當に云ひ得よう。私が、他の原因をも、すなはちもう一つの勞賃の大規制者たる資本に對する人口の相對額をも、認めてゐたことを、私は主張する。

私の利潤に關する章の一〇頁——第二版——では私は云ふ、『然らば、若し勞賃が引續き

同一であるならば、製造業者の利潤は同一に留るであらう。併し、若し勞賃が穀物の騰貴と共に騰貴するならば、——この事は絶対に確かであるが——然る時は彼等の利潤は必然的に下落するであらう。』一一六頁で私は云ふ、『斯くて、凡ゆる場合に於いて、農業上並びに製造業上の利潤は、粗生産物の價格に於ける騰貴——若しそれが勞賃の騰貴によつて伴はるゝならば、——によつて低下せしめられる。』(譯者註——前掲譯書、一一一頁及び一一六頁)

私は、マルサス氏の著作の第五章の第一節及び第二節を、大いに喜んで讀んだ。それ等は、利潤に關して眞實であると私に思はれる學説を、大いに明瞭に且つ有能に、表現してゐる——私は、實際極めて不完全に、同一の諸原理を自ら私の著作で説明しようと思つたのであるが、従つて私はマルサス氏によるそれに関するかくも有能な説述を見て大きな満足を感じたのである。

併し乍ら私は、本節の終り頃で、マルサス氏が、彼が述べてゐる學説が私のものとは本質的に異なるものと、考へてゐるのを見出して、いさゝか失望した。三〇八頁に於いて彼は、利潤に影響を及ぼす原因は二つあり、そして私は専らその一方——それは現實に産出される結果に對しては不適當のものである——を纏説してゐる、と云つてゐる。(譯者註——この註の端、譯者註——この註の端、譯者註——この註の端、譯者註——この註の端)こゝ非難には望むらくは私は既に満足に答へた。三〇九頁で彼は曰く、『然らば、リカアドウ氏が利潤に關する彼れの章に於いて到達した、次の如き結論に同意することは不可能である、『總ての國及び總ての時に於て、利潤は、地代を生まない所のその土地の上に於て、又は地代を生まない

所のその資本を以て、労働者に必要品を給するに必要な労働の分量如何によつて定まる。』
(譯者註—この後の第三) 扱てこれはマールサス氏の學說を他の言葉で現はしたものに外ならない。私
 は、労働者の稼ぎ高は常に同一であらう、とは云はず、それが幾何であらうとも、利潤は、其の價值が、最後の土地に於いて生産せられた全價值に對して採る、比例に依存するであらう、と云ふ。全生産物を獲得するに一定分量の労働が必要であり、そして利潤は、全分量の中、労働者の稼ぎ高を與へるに必要な比例に、依存し、殘部が利潤であるに過ぎない。

マールサス氏は曰く、『若し貨物が労働と利潤との間に分割されるならば、一方の得る分前が大であればある程、他方に残るものは益々より小となる、と云ふのは、換言すれば、利潤は、労働が騰貴するにつれて下落し、又は労働が下落するにつれて騰貴する、と云ふのは、單に自明の理である。』(譯者註—この後の第七) (番目のパラグラフを参照)

若しそれが自明の理であるならばそれは誤りではない、然らば何故にそれを誤りであるといふのか？ 併し乍らそれはマールサス氏が——人の大いに驚くことには——普くは認めてゐない自明の理である。時に彼は、私が後に證示するであらう如くに、この原理から離れてゐる。併し一般に彼れの反對論は用語に對するものである。例へば彼は利潤と勞賃とは同時に騰貴し得ようし、又屢々騰貴すると云ふ。これは決して眞實ではあり得ないと私は云ふ、何故か？ 蓋し價值は比例によつて測定され、そして高い價值とは全生産物の大きな比例のことであるからである。全體の中の一方の比例が増大するにつれ他方は減少しなければならぬ。マールサス氏

は云ふ、價值は比例によつては測定されず、それは分量によつて測定される——然らば分量を増大すれば、比例を變更しても、兩當事者はより多くを得るであらう。『吾々が、必要品の價格を増大する原因に加へて、各労働者にこれ等の必要品の中より大なる又はより小なる分前を報酬として與へる原因を、説明しない限り、吾々は利潤を決定する法則に就いて殆んど知ることを得ない。』(譯者註—同上) 成程これは私が樹立せんと望む重要な原理である、そして私は、全必要品の中より大なる又はより小なる分前が労働者に報酬として與へられることを、唯一つの原因のみに、すなはち生産力の減少に、私が歸してゐるといふ攻撃に、該當することを抗辯しはしない。

マールサス氏の攻撃は實際かういふことになる。貴君は利潤が勞賃に依存することを認めた——貴君は又勞賃は二つの原因によつて、すなはち増大し行く人口に對し食物の不斷に増大し行く分量を供給することの困難によつて、又必然的に勞賃に影響を及ぼさなければならぬ所の人口に對する資本の比例の變動によつて、影響を蒙ると云つた。——併し貴君は第一の原因に餘りにも重きを置き、そして後者には餘りにも重きを置かなかつた迄である。* 然らば私の原理は正しいのである、併し私は各々の力に適當に重きを置かなかつた迄である。

*註 勞賃に關する私の章を眺めて見て私は八七頁を見る。『労働の市場價格は、供給の需要に對する比例の自然的作用に依つて、それに對して事實上支拂はるゝ所の價格である。労働は稀少なる時に高く、而してそれが豊富なる時に安い。』(譯者註—同上) (八八頁には、『勞賃は其の自然

率に一致せんとする傾向あるに拘らず、其の市場率は、進歩しつゝある社會に於ては、或る不
 定の期間は、常にその上に在るであらう。』(譯者註—同) 九二頁には、『貨幣價值に於ける諸變化
 —それは必然的に勞賃に影響を及ぼすのであるが、併し、吾々は、その場合何等の作用な
 きものと假定して來た、蓋し吾々は貨幣を恆に同じ價值を有するものと看做して來たから、
 —を別にするときは、勞賃は二つの原因から騰貴し又は下落するやうである。即ち、
 第一は、勞働者の供給及び需要である。

第二は、それに勞働の勞賃が支出さるゝ所の諸貨物の價格である。』(譯者註—同上、)
 扱てこれ等の二原因が、マルサス氏が彼れの著作の二九四頁に於いて

ラフを) 勞賃に影響を及ぼすものとして擧げてゐるものと、丁度同一であるのを、觀られ度い。
 なほ第一六章の二五八頁及び二五九頁をも見よ。(譯者註—この第一六章と二五八頁の Chap. 16 の譯語であるが、
 なるば、これは第一版の第四章第三節の第一) 及び第二番目のパラグラフのことである。)

【若し前提が總て彼が假定せる如きものであるならば、換言すれば、勞働者の食物を獲得する困
 難の増大以外の原因は利潤に對し作用せず、そして貨物が生産に於いて要費した勞働量以外の原因
 はその交換價值と貨幣價值とに影響を及ぼさないならば、彼が得た結論は正しく、そして利潤率は
 確かに彼が述べてゐるが如くに左右されるであらう。併し、現實の事態に於いては前提は彼が假定
 せるものとは最も本質的に異なる故に、私が本節に於いて證示せんと努めたる如くにもう一つの最も
 有力な原因が利潤に對し作用してゐる故に、又私が前の章に於いて證示せんと努めた如くに貨物の

交換價值はそれが要費した勞働によつては決定されない故に、リカアドウ氏の得た結論は必然的に
 經驗に反しなければならぬ。或る物品は適當に説明された自然又は必要價格とは時々異なる故に、
 輕微に且つ短期間それに反するのではなく、明かに又廣汎に、且つ、それを看過することは、單に
 落下しつゝある物體に於ける空氣の抵抗を看過することに類するのみではなく、更に最初から異なる
 角度に作用する第二の衝撃によつてポオルに與へられた方向の變化を看過するに類する、といふ如
 き程度に長期に亘つて、それに反するのである。

【然らば、リカアドウ氏が利潤に關する彼れの章に於いて到達した、次の如き結論に同意するこ
 とは、不可能である、『總ての國及び總ての時に於いて、利潤は、地代を生まない所のその土地の
 上に於て、又は地代を生まない所のその資本を以て、勞働者に必要品を給するに必要な勞働の分
 量如何によつて定まる。』(一版註)

一版註 Princ. of Polit. Econ. v. vi. p. 133. 2d edit. (譯者註—前掲譯書、一三〇頁)

【若し勞働者の必要品といふのが、人口を丁度維持するが如き勞賃、又はリカアドウ氏が勞働の
 自然勞賃と呼ぶものの、ことであるならば、それは等しい肥沃度の土地は常に同一の利潤を産出す
 であらうと云ふと同一である——これは必然的に誤りでなければならぬ命題である。

【例へば若し、耕作されてゐる最後の土地が一定の肥沃度を有つてゐる或る國に於いて、資本が、
 需要の缺乏によつてではなく、大なる支出、及び貯蓄の習慣の缺乏によつて、停止的であるならば、
 暫くの後には、勞働の受ける支拂は極めて低くなり、そして利潤は極めて高くなるであらうことは、

【若し、同様の土地が耕作されてゐるも一つの國に於いて、人口の増進よりもより急速なる資本の蓄積を惹き起す如き貯蓄の精神が廣く存在するならば、利潤が極めて低くなるであらうことは同様に確實である。

【従つて、かくの如く解すれば、この命題は一瞬と雖も維持せられ得ない。

【若し、他方に於いて、必需品といふのが労働者の現實に稼ぐもの——それが何であらうと——のことであるならば、この命題は本質的に不完全である。貨物の交換價值がその生産に於いて使用せられた労働量によつて左右されるものと認めても（これが事實でない事は前に證示した）、利潤率の決定に向つては殆んど何事も爲されてゐない。若し貨物の價值が労働と利潤との間に分割されるならば、一方の得る分前が大であればある程、他方に残るものは益々より小となる、と云ふのは、換言すれば、利潤は、労働が騰貴するにつれて下落し、又は労働が下落するにつれて騰貴する、と云ふのは、單に自明の理である。吾々が、必需品の價格を増大する原因に加へて、各労働者にこれは利潤を決定する法則に就いて殆んど知ることを得ない。そしてこの場合、吾々が、需要及び供給の大原理に、又はリカアドウ氏が明かに反對し、又は少くとも利潤に關する一般理論に於いては注意するの要なき如き一時的性質を有するものと考へてゐる所の（二版註）、アダム・スミスによつて持出された競争の原理そのものに、頼らなければならぬことは明かである。】

一版註 Prince of Polit. Econ. chap. vi. p. 132. (譯者註——前掲譯書、一二九頁) and ch. xxi. 2d edit.

【而も事實上、資本の供給の不足以外の、永続的に高き利潤の原因はない。そして過度の支出により惹起されたかゝる不足の下に於いては、一特定國の利潤は、數百年間を通じて、他の諸國に比較して引續き極めて高いであらうが、これは一に資本の労働に對する比例の相違によるものである。】

（利潤率は實際かくも全く、供給及び需要の状態によつて惹起される生産物の分割に、依存するものであり、従つて二國を比較するに當つて、利潤率が時に、土地に於ける労働の生産性が最大なる國に於いて最低なることが、見出されるであらう。）

（資本が稀少な）ポウランド、及びヨーロッパの或る他の地方に於いては、利潤はアメリカに於けるよりもより高いと云はれてゐる。併し恐らく、アメリカに於ける耕作されてゐる最後の土地はポウランドに於ける耕作されてゐる最後の土地よりも（遙かに）より富んでゐるであらう。併しアメリカに於いては、労働者は恐らく一年に就き【十六クヲター又は】十八クヲター（又は二十クヲター）の小麥の價值を稼ぐであらうが、ポウランドに於いては單に入クヲター又は九クヲターのライ麥の價值を稼ぐに過ぎない。【同一の又は殆んど同一の】生産物の分割に於けるこの相違は、利潤率に於ける（大きな）【異常な】相違を惹き起さなければならぬ。而もこの分割を決定する原因は、安全に看過され得る如き一時的性質のものではなくして、最も有力に【殆んど如何に】長期に互つて【も】働く（に寄與する）ものであらう【の】に、リカアドウ氏の利潤に

關する理論の中に入つてゐるとは殆んど云ひ得ない。アメリカの面積は極めて廣く、従つて其の勞働の（穀物勞賃）「價格」は（長年月）「數百年」の間本質的には下落しないであらう。そして乏しいが併し停止的な資本が、過剰ではあるが併し停止的な人口に、及ぼす影響は、永久に續くであらう。

かくの如く、資本（及び生産物）が勞働に對して採る比例によつて不可避的に産出されなければならぬ有力な影響と、利潤を決定する事情の凡ゆる説明に於いて需要及び供給又は競争の原理を適當に重視するの必要に、留意するからとて、（耕作されてゐる最後の土地に於ける勞働の生産性の減少に依存する）「リカードウ氏によつて殆んど専ら考察されてゐる」原因の重要性を過少評價せんとする積りはない。（この原因は、若しその作用が續くならば）「それは」實際最終的には凡ゆる他のものを壓倒（しなければならぬ）「する」如き性質のものである。（譯者註—第一版では「次に直ち」併し矢張り、纏めて十年又は二十年間の或る國に於ける利潤率をこの原因のみに頼つて測定せんとする企ては、最大の實際的誤謬に導くであらう。）

（政府の長期年金の價值は、それに與へられた期限に接近するにつれて、減少する自然的且つ不斷の傾向を有する。而も、九十年といふ比較的短い期限の中、二十年といふが如き大きな比例が経過して、而も密に其の價值が少しも減少せぬ許りでなく更にそれが現實に増大するといふことが時にあることは、人のよく知る所である。）（これが第一版の削除された部分の訂正再録なることは既述せる）併し乍ら、それが「既に用ひた例證に戻れば——長期年金が」満期になる時期に益々接近する（時

には、それ）「につれて、その價值」は、この理由のみによつて、貨幣の豊富より生ずる如何なる需要も其の（價格）「價值」を維持し得ない程に、（價值に於いて）減少しなければならぬ。同様にして、耕作が其の實際的極限迄押し進められる時には、換言すれば、耕作されてゐる最後の土地に於ける一人の勞働が、停止の人口を維持するに必要な如き家族を支持するより以上には、殆んど何事も爲さない時には、如何なる他の一原因又は諸原因も、利潤が、現實の資本を維持するに必要な最低率に沈下するのを、妨げ得ないことは、明かである。（譯者註—第一版では「併し（この）」で考察された」原理は最終的には最大の力を有つものであるけれども、而も其の進行は極度に遅く且つ徐々たるものである。そしてそれが其の最終點に殆んど分らない歩調で進んでゐる間は、第二の原因は、「特に、次節に於いて指摘されるべき他の諸原因と結び付ける時には」それに全然打克ち、そして屢々二十年又は三十年間、又は一〇〇年間を通じてすら、利潤率をして、第一の原因によつてそれが採るべき道程とは絶対に異なる道程を、採らしめる所の、諸結果を産出しつゝあるのである。）

（第四節）【第三節】利潤が實際に働いてゐる原因によつて影響を蒙ることに就いて

吾々は今や、現實の事態に於いて（特に我國に於いて）利潤に影響を及ぼ（し得る各種の）

【す】原因を考察することとなつた。そしてこの場合には、【音】既に述べた原因の兩者【のみならず】（並びに）それを（攪亂し且つ）【各様に】修正する他のものが作用してゐることは、明かである。

（資本及び人口の増大によつて惹起される）【例へばより】貧弱な土地の耕作の進行に於いて、【資本及び人口が増大するにつれ】利潤は、（それが自然的肥沃度に依存する限りに於いて）【第一】の原因によつて規則正しく下落するであらう。併し若し同時に農業に於ける改良が行はれつゝあるならば、それは確かに、可成りの期間、音に利潤の下落を妨げるのみならず、更に【可成りの】騰貴を許す如きものであらう。如何なる範圍迄、又如何なる期間、この事情が（かゝる改良なくして、より貧弱な土地を耕作に引入れるの必要によつて惹起される）【第一】の原因より生ずる【利潤の進行（的）下落】を妨げるであらうかは、容易には言ひ得ない。併し、其の自然的生産力に於いては極めて異なることなき土壤より成る廣大な領域に於いては、この原因より生ずる利潤の下落は【極度に】遅いであらうことは、確實であるから、恐らくは、可成りの期間、收穫及び土地管理の組織の改良と並んで耕作に用ひられる器具及び機械の改良を云ふ迄もなく含む所の農業上の改良は、それを相殺して餘りあるであらう。

同一の結果に寄與すべき【註】第二の事情は、労働階級の間における個人的力作の増大である。この力作は、異なる國に於いて、又同一の國に於ける異なる時に於いて、極度に異つてゐる。印度人又は南アメリカ・インディアンの一日の労働は、英蘭人のそれと比較し得ないであらう。そして、

アイルランドに於ける日傭労働の貨幣價格は英蘭に於けるその殆んど半以上ではないけれども、而もアイルランド人の労働は實際は英蘭人のそれよりもより低廉ではない——尤もアイルランドの労働者は我國にあつて彼等を刺戟する良き例と適當な勞賃とを有つてゐる時には、彼等の英蘭人の同僚と同様に懸命に働くであらうことは、人のよく知る所であるが——とさへ云はれてゐるのである。

R註 總てのこれ等の事情は、既述の一般的原因、すなはち『生産物の中労働者に與へられる比例』に屬する。こゝに列擧された事情は疑ひもなく勞賃に影響を及ぼし、従つて利潤に影響を及ぼす。

印度人又は南アメリカ人の一日の労働が英蘭人のそれと比較し得ないことは認められてゐる。然らば、マルサス氏にとつて、私が價格及び利潤を左右する労働の分量を論ずる時には、私が、それが印度人の一定時間の労働であらうと、アイルランド人のそれであらうと、又は英蘭人のそれであらうと、どうでもよいことと考へた、と想像するのは、正當であつたであらうか。私は私の學説を同一國のみに當てはめ、そしてその國で普通の標準を選定してゐるのである。私は英蘭に於ける利潤を印度人の労働によつては測定する氣はなく、又印度に於ける利潤を英蘭人の労働で測定する氣もない——私が兩者を共通の標準に還元する手段を有たない限り、この後の事情は、そのみで、異なる時に於ける同一の國に於ける労働階級の個人的力作が如何に異つて居り、従つて社會が未開人の懶惰から文明國家の活動力へと進むにつれて、一定日數の

勞働の生産物が如何に異つてゐるかを、明かに證示するものである。この活動力は實に或る限界以内では、それが最も要求せられる時、換言すればそれを爲すべき人間の十分な供給なくして爲さるべき仕事が多くある時には、殆んど常に現れて來る様に思はれる。南アメリカ・インディア、印度人、ポウランドの農民、及びアイルランドの農業勞働者の個人的力作は、實際五〇〇年以後には極めて異つてゐるであらう。

【前の二つの事情は、耕作費を減少し、又は或る價値の生産物を獲得するに必要な前拂の相對額を低減する、傾向がある。併し、利潤が（R註）生産費に比較しての生産物の價格に依存し、從つて、價格に比例的に影響を及ぼすことなくして原費に影響を及ぼす凡ゆる原因と同様に、從つて例的に影響を及ぼすことなくして價格に影響を凡ぼす凡ゆる原因と共に、變動しなければならぬといふことは、本章の初めに述べた所である。】

R註 マルサス氏は、原費といふ言葉を、本書を通じて極めて曖昧に用ひてゐる。貨物の原費の中に彼は資本の利潤を包含してゐるのだらうか除外してゐるのだらうか。こゝでは彼は明かにそれを除外してゐる。

（利潤に對し大きな影響を與へ、そして起るのが稀でない）【從つて、屢々起る】第三の原因（は）【すなはち】穀物の價格が需要の増大によつて引上げられてゐる時に於ける（農業者の）資本の或る部分の不等の騰貴（である。）【によつて、利潤に對する大なる影響が惹起されるであらう。私は、地代を論ずる章に於いて、この原因と、前の二つの原因とに、言及せざるを得なかつた。

従つて私は（R註）こゝでは單に次のことを附加するに止めるであらう、すなはち穀物及び勞働の價格が騰貴しそして終には貨幣の價値の變動に歸する時には、（かゝる騰貴の下に於いては）それは若し繼續するならば、一般に、標準勞働の價格の騰貴又は貨幣の價値の下落を伴ふものであるが、多くの内國貨物の價格は、課税の不等なる壓迫と、（外國貨物と外國原料により内國で造り上げられた貨物との價格の不等の騰貴）【その生産に使用された固定資本の分量の相違】とにより、或る期間【極めて】著しく修正されるであらう。【そしてその外國貨物と外國原料により内國で造り上げられた貨物との價格は、永續的に比較的低くなつてゐるであらう。】内國に於ける（R註）穀物及び勞働の騰貴は、かゝる生産物の價格を比例的には引上げないであらう。そしてこれ等の生産物（並びに租税）が農業者の資本の或る部分を成してゐる限り、（より小なる比例の生産物が）その價値の増大の爲めに——それを代置する）【この資本はより生産的ならしめられる】であらう。（この記述は）【併し】皮革、【鐵】木材、石鹼、蠟燭、綿製品、羊毛製品、等々（に當ては）まるが、（それ）は總て、多かれ少なかれ農業者の資本又は勞働者の勞賃に入つて居り、そして總てその價格に於いて多かれ少なかれ輸入によつて影響を蒙る。【農業者の生産物の價値は騰貴するのに、これ等の物品はそれに比例して騰貴せず、従つて一定の價値の資本はより大なる價値の生産物を産出すであらう。】

R註一 私は、穀物と勞働との價格が騰貴しそして終には貨幣の價値の變動に歸するといふのが、何のことかわからない。穀物の價格はそれを生産するの困難の増大によつて騰貴することもあ

らう、これは他の物に對して穀物を騰貴せしめるであらう、併し貨幣は引續き價值に於いて不變であらう。穀物の價格は貨幣が價值に於いて下落するので騰貴することもあらう、その時には凡ゆる他の物も騰貴し、そして眞實勞賃及び利潤には何等の結果も與へないであらう、騰貴は全く名目的であらう。

R註二 若しそれが穀物及び勞働の眞實騰貴であり、そして貨幣の價值の下落ではないならば、それは外國生産物の價格を引上げないであらう。併しそれは如何にして内國生産物の價格に影響を及ぼすであらうか？ それは、それ等の生産により多くの固定資本が使用せられるかより、少いそれが使用せられるかに従つて、或るものを引上げそして他のものを引下げるであらう。
 (頁を見よ。編者註) マルサス氏がこのパラグラフで云つてゐることを短く云へばかういふことになる、『利潤は穀物の騰貴により期待せられよう程は下落しないであらう、蓋し勞働者の勞賃は、騰貴するであらうが、彼が消費する他の必要品の價格が比較的低廉なので、大いには騰貴させられないであらうから。』これは争ひ得ないことであり又争はれたこともないことである。

(利潤の騰貴に好都合な第四の事情は、機械の改良による、穀物に比較しての或る重要製造品の價格の下落である。かゝる事態は、常に、勞働者の愉樂品のそれに比例する減少を伴はずに、勞働の穀物勞賃の或る減少を許すものである。そして若し農業者の生産物の貨幣價格が、勞働の價格と彼れの前拂がそれから成る原料との、それに比例する増大を伴はずに、増大するならば、

彼れの利潤は必然的に騰貴しなければならない。

(然らば、實際上、そして現實の事態に於いて、同一分量の食物を生産するに必要とされる勞働の分量の増大より生ずる農業に於ける利潤の下落の物理的必然性は、可成りの間、他の諸原因によつて大いに相殺され且つ打克たれ、爲めに資本の競争の影響の作用する餘地は大いに残されるであらう、といふことがわかる。)

【總てのこれ等の三事情は、明かに、より、貧弱な土地を耕作に引入れるの必要より生ずる結果を相殺する、極めて有力な傾向を有つてゐる。そして、それは人口及び改良の自然的増進と共に能力が増大するといふ性質を有つてゐるから、どれだけの期間又はどれだけの範圍までそれがこの結果を相殺し又は打克つかは容易には云ひ得ないことが、觀られるであらう。

「讀者は、利潤を論ずるに當つて、何故に私が、農業利潤に就いて、この問題の全重點がこの點にある程に、纏説するかの理由を、理解するであらう。利潤に就いて採られてゐる、それが主として資本の競争に依存するといふ、通常の見解、に對する反論は、同一の食物を獲得するに必要な勞働量の増大より生ずる農業に於ける利潤の下落の物理的必然性に基いてゐる。そして、土地に於ける利潤がこの原因又は何等かの他の原因によつて永續的に下落するならば、製造業及び商業に於ける利潤も亦下落しなければならず、それは蓋し進歩し且つ開けた國に於いては、資本の利潤は、容易に説明され得べき小數の且つ一時的の例外を除けば、資本が用ひられてゐる總ての異なる産業部門に於いて、殆んど平準化しなければならぬ、といふことは、認められた眞理であるからである、と

いふことは確實である。

【扱て私は、農業利潤に適用されたこの議論と、總ての利潤に及ぼす其の自然的結果との、眞理なることを認める十分の用意がある。この眞理は實に、『人口原理』Principle of Populationにも又一八一五年に私が別に公けにした地代に關する理論にも、必然的に含まれてゐるものである。併し私は、この原因は、其の最終的作用に於いては、凡ゆる他の原因を壓倒する程有力であり且つ確實であるけれども、而も世界の現實の事態に於ては、其の自然的進行は常に極度に緩慢であるのみならず、更に資本の競争の原理に極めて大なる活動範圍を残す程に屢々他の諸原因によつて相殺され又打克たれ、従つて過去又は將來の百年間に於ける或る長さの如何なる一時期に於いても、利潤は、最後に耕作に引入られた土地の自然的肥沃度よりは、資本の供給の比較的多少を惹起した原因に、遙かにより多く依存したし又依存するであらう、と最も安全に主張し得るであらうといふことを、理論的にも實際的にも、證し度いのである。】

この(結論)【主張】を支持する事實は(多數)【明白】であり且つ議論の餘地がない。(總ての國に於いて起ることが見られる平時及び戰時の利潤率の相違は、主として、需要に比較しての資本及び生産物の豊富又は稀少に歸し得べく、そして土地に於ける労働の生産性の變動には歸し得ない、と實際云はれるであらうが、これは眞實であらう。【その若干は前節に於いて述べたが、その數は容易に増大せられ得よう。】(既述のこの種の事例に加ふるに次の一事例を以てせられ得ようが)【併し乍ら私は單にもう一つを附加するに止めるが】それはそれのみで殆んどこの問題を

決定し得る如き(著しく)有力な事例であり、そして吾々自身の國に起つたのであるから、それは最も詳細な検討を完全に許すものである。

一七二七年に於ける(註)ジョージ二世の即位から(一七九三)【一七三九】年に於ける開戦に至る迄、貨幣の利子は三パーセントの殆んど上ではなかつた。四パーセントに低減された公債は、低減の後大いに騰貴した。チャアマズによれば、自然利子率は着實に三パーセントであつた(註)。そしてサア・ジョン・バアナドの演説によれば、三パーセント株は取引所で額面以上で賣られたことが、わかる。戦争の終結後一七五〇年には、四パーセント株は七箇年の間三パーセント二分の一に低減され、そしてその時から永續的に三パーセントに低減された(註)。

R註 何人も、農業に於ける、そして土地への労働の適用に於ける、改良が、利潤を引上げる上で、土地の肥沃度の増大と同一の結果を有つことを、否定し得ない。

註一 Estimate of the Strength of Great Britain, c. vii. p. 116.

註二 Id. ch. vii. p. 120.

然らば、戦争の中間期を除いて、こゝに、一般利子率が三パーセント二分の一乃至三パーセントであつた二十二箇年の一時期があるのである。

政府證券の價值の一时的變動は、常に確かには、利潤率又は利子率すらの正確な指標ではないであらう。併しそれが纏めて或る期間殆んど動かないである時には、それは利子の正確な尺度に可成り近いものと考へられなければならない。そして政府の公債引受人が、それが皆済されるよ

りも寧ろ、彼等が前に受取つてゐた利子の大きな下落に同意する時には、それは資本を有利に使用する方法が極めて困難なることの極めて決定的な證據であり、従つて低き利潤率の極めて決定的な證據である。

こゝで述べた時期の初めから殆んど七十年を経て後、その終りから四十年を経て後に、——その間に資本の大きな蓄積が行はれ、そして異常の分量の新らしい土地が耕作に引入られたのであるが——吾々は、二十箇年に互る一時期が續き、その間に平均市場利率が五パーセントであるよりは寧ろ、以上であつたのを、見出す。そして吾々は確かに、資本が破壊せられた後にそれが異常に急速に恢復されたことから、利潤率は一般にこの高き利率に全く比例してゐた、と信ずべき凡ゆる理由がある。

この時期の大部分の間擔保付で借入れるのが困難であつたことは、全くよく知られてゐる。そして公債の壓迫が若干の驚駭を惹起しそして遊資の所有者をして土地證券を選ばしめる氣にさせるものと當然想像せられ得ようけれども、而もアーサー・ヤングの調査からすると、土地に對する年買の年數は一八一一年には二九年四分の一であり、そして四十年以前には三二年又は三二年二分の一であつたことがわかる（註、——これは土地に使用せられた資本の利潤の増大に關する、想像せられ得る最も決定的な證據である。

註 Annals of Agriculture, No. 270, pp. 96, and 97^a and No. 271, p. 215. ヤング氏はかゝる結果に大いに驚き、そして土地に對する年買の年數は價格と何の關係もないが、併し可動資本を使用する手段に比較してそれが豊富なるか否か

なるかを「主として」示すものなることに、十分に氣付いてゐない様に思はれる。

【こゝに述べた（R註）二つの時期に於ける利率及び利潤率の相違は、耕作に引入られた最後の土地の自然的品質に基礎を置く利潤に關する學說と正反對のものである。争ふ餘地なき事實は、啻にこの事實に基いては證明され得ないのみならず、更に又、この學說に就いては、全然又は主として、事實はそれが實際に見出されるものとは正反對のものでなければならぬこととなる。】

R註 これは正しくない。誰が『耕作に引入られた最後の土地の自然的品質に基礎を置く利潤に關する學說』を主張したのか？ 學說は、利潤は耕作に引入られた最後の土地の生産性——この生産性が土地の自然的品質によらうと、又は労働をそれを使用するの節約と熟練によらうと——に依存する、といふのである。利潤は、一定の生産物を産出する最後の土地に投ぜられた労働の品質（譯者註：分の減少か、又は一定分量の労働を以てする生産物の増大かによつて、増大する。マルサス氏は、信ずらくは、私が嘗てこの原理を否定したとは云はないであらう——彼は私がそれを明瞭には主張してゐないとは云はないであらう。

これ等の事實の性質と（R註）それが起つた際の事態とは（一方の場合では（資本及び生産物）【農業生産物】に對する僅かの需要しかない平和の状態にあり、又他方の場合では（兩者）【かゝる生産物】に對し異常な需要がある戦争の状態にあつたのであるが）、判然明瞭に、資本（及び生産物）の相對的過剩及び不足を以て（其の原因）【凡ゆる蓋然性に從つてそれと關聯せるもの】なりと指示してゐる。そしてこゝでなほ考察しなければならぬ問題は、本節に於いて述べた事

情が、資本の累進的蓄積と新らしい土地の累進的耕作とも拘らず、この累進のより早い時期に於ける低き利潤と、より遅い時期に於ける（より）高い利潤とを、許すが如き、この原理の自由な作用を、理論的に説明するに足るか否か、といふことである。兎に角、この事實は極めて廣汎にして且つ驚異に値するものであり又同種の他の事實は實際極めて屢々回起してゐるものであつて、従つてそれは直ちにそれと相容れない利潤に關する如何なる學說をも決定的に否定するものと（考へられなければならぬ）【私は考へざるを得ない】から、この事實は説明せられなければならない。

R註

マルサス氏が資本の相對的過剰と云ふのは何のことであるか？ 私はこの言葉を好まない。

併しこの反對論は棄てることとして、資本の凡ゆる増大の下に於いて、若し人口が更により急速に増大し、そして勞働が下落するならば、人口は資本に比較して過剰である。そして若し人口が資本よりもより遅い率で増大するならば、資本は人口に對して相對的に過剰である。これは又も、勞賃が低いか高いかに従つて利潤は高いか低いかであらうといふことの、別の述べ方である。

こゝに述べた二つの時期の第一に於いては、穀物の價格が下落したのは周知のことであり、（そして）【併し】勞働の勞賃はそれに比例しては下落せず、或る權威によつて騰貴したものと考へられた。アダム・スミスは、前世紀の最初の六十四年間に於ける穀物の下落と勞働の騰貴とを、一種の確定的事實として述べてゐる（註二）。併しアーサー・ヤングは、その『農業年報』Annals of Agriculture に於いて發表した穀物及び勞働の價格に關する彼れの極めて有用な研究に於いて、

事實は十分に確證されて居らず、そして【その上】問題の期間に起つた勞働及び生産物に對する明かに乏しい需要と人口の比較的遅い増進と【いさゝか】矛盾するものであると考へてゐる様に思はれる【が、それには若干の理由のあることである】（註三）。併し乍ら、勞働の價格が（R註）停止的であり、穀物の價格が下落しつゝあり、改良によつて騰貴しつゝはあない【る】と認めてすら、農業利潤の下落は直ちに説明せられる。價格のかゝる状態は、そのみで、かなりによい土地がなほ未耕であるといふ事情から生ずる結果を相殺するに足りて餘りあり得よう。吾々がそれに加ふるに、皮革、鐵、木材、等々の如き農業者の資本に屬する他の支出が騰貴したと想像せられ、他方彼れの主たる生産物（の價格）が下落しつゝあつたことを以てする時には、吾々は、國が未だ消盡せられざる状態にあるのに農業利潤率が低いといふことを説明するに當惑し得ない。そして商業及び製造業利潤率の低いことに關しては、それは（商業及び製造業生産物に對する需要に比較しての其の増大と、その結果たる勞働との比例での其の價格の減少）【勞働に對する資本の比例】によつて、直ちに説明されるであらう。

R註

マルサス氏がそれを何と呼ぼうと、これは高き勞働の價格である、蓋し彼自身の證示によれば、それは最後の土地から得られた生産物の中勞働者に報酬として與へられる比例の増大であるから。彼は特にかゝる勞賃を高いと呼ぶなければならぬ、蓋し彼は價值を分量によつて測定し、そして彼は、勞働者は、彼が眞實勞賃の増大と呼ぶ所の、穀物の増大せる分量を得るであらう、と吾々に告げるのであるから。然らば勞働は騰貴するから利潤は下落する——事情

は勞働者の地位をして彼に有利ならしめてゐる。勞働は資本に比較して供給不足である。蓋し貨幣勞賃が以前よりもより高いならば、それが商業利潤の下落を説明するであらう。若しそれがより高くないならば、貨幣は同一の價值ではあり得ないであらう——それは騰貴したに違ひなくそして財貨の價格は下落したのである。

一七九三年より一八一三年に至るその後の時期に於いては、恐らく、本節に於いて指摘した總ての事情が、(資本の供給に比較しての需要)【勞働に對する資本の比例】に依存する原理の作用する餘地を與へるに共働したのであらう。

第一に、この二十年間に、土地の一般的管理に關しても又耕作に關聯し又は何等かの仕方て粗生産物を市場に齎らすのを便宜にする傾向のある用具に關しても、進行しつゝあつた、農業に於ける改良に就いては、何の疑問もあり得ない。第二に、この二十年間に於ける請負仕事の慣行の増大は、女子及び子供の雇傭の増大と相俟つて、疑ひもなく個人的力作の大きな増大を惹起した。そして同一數の人間と家族とによつて以前よりもより多くの仕事が爲されたのである。

【勞働力の生産性の(R註)この二原因は、その時の事情によつて、すなはちより多くの資本を土地に最も有效な其の使用法で使用することを助成した穀物の高き價格により、又今迄よりもより多くの者が農業及び製造業で欲求されたのと時を同うして多數の人間が陸海軍で欲求されたのによる勞働に對する需要の増大によつて、明かに助成され、且つ云はゞ喚起されたのである。】

R註 貨幣に、而も價值に於いて不變の貨幣に、マルサス氏は普く關説してゐる、彼は前にはあ

れほど明確に價值の尺度としてのそれに反對したのに、若し貨幣價格が、マルサス氏が呼んでゐる如くに、常に名目價格であり、そして眞實價格とは極めて異なるものであるならば、高き貨幣價格は特定貨物の生産の増大に對し何等の刺戟をも與へないであらう。何等かのかゝる刺戟を與へるものは高き眞實價值のみである。私はマルサス氏が彼自身の標準を守り、そして經濟學の諸原理をそれに頼つて説明したらよかつたと思ふ。若し穀物が一クヲタアに就き四磅から——五磅へと騰貴するならば、彼はそれを穀物の價格の騰貴と呼ぶ、若し勞働が一週間につき一〇志から一二志に騰貴するならば、彼は勞働の價格の騰貴といふことを云ふが、併し彼は時に同一の事を勞働の眞實價值の下落と呼ぶ。成程彼は、勞働者はより多くの貨幣を得るが併しその貨幣で彼はより少い穀物を得る、と云ふであらう。彼が高き勞働の價格と云ふ時には、彼が高き眞實價值を意味してゐるのか又は低きそれを意味してゐるのかを、如何にして私は知るべきであるか？

【一般にそれに(R註)歸せられてゐるよりも實際遙かにより以上に、極めて大なる結果を有する、第三の原因は、商業及び製造業生産物のそれに比例する騰貴を伴はない、穀物の貨幣價格の騰貴であつた。この事態は常に、勞働者の愉樂品のそれに比例する減少を伴はない、勞働の穀物勞賃の或る減少を許す。そして若し農業者の生産物の貨幣價格が、勞働の價格及び彼れの資本がそれから成る原料の價格のそれに比例する騰貴を伴はずに、増大するならば、この資本はより生産的となりそして彼れの利潤は必然的に騰貴しなければならぬ。】

R註 扱てこれは、マルサス氏が二つの價値の尺度を——穀物價値と——貨幣價格とを——混同することによつて、誤れる結論に達した場合の一つである。

彼は、穀物は他の貨物に對して騰貴し、そして勞賃は他の貨物に對して騰貴するが併し穀物では下落する、と想像し、そして彼は利潤は騰貴するであらうと結論してゐる。

第一に製造業者の利潤は如何にして騰貴し得るか？ 貨物での勞賃は以前よりもより高く、從つて製造業者は、より小なる分量の製造貨物を、殘部を勞賃として支拂つた後に、手許に保持する。製造貨物の相對價値は變動して居らず、從つて彼の減少せる分量の財貨で、彼は、減少せる分量の總ての他の製造業者の財貨しか獲得し得ない。併し製造財貨の相對價値は穀物に比較してより低い。若し彼が以前と同一分量の財貨を有つてゐても、彼はそれに對しより少い穀物しか獲得し得ないが、より少い分量のそれ等の貨物を有つのであるから、このより少い分量の穀物は更により低く低減されるであらう。然らば財貨又は穀物で測定した彼の利潤は以前よりもより低い。穀物の相對價値は何故に騰貴するか？ 蓋しそれを生産するのがより困難であり、又は需要が供給に比較して増大したからである。勞働者は假定によればより少く消費するのであるから、需要は増大してゐることはあり得ない。供給は季節の不良により減少してゐるかも知れない、然らば農業者の利潤は偶發的であり一時的であり、加之彼がより小なる分量に對し増大せる價格を獲得することによつて相殺される。然らば唯一の永續的原因是生産費の増大である。最後に耕作せられる土地に於いてより少ししか獲得されないであらう、そし

て勞働者に與へられる分量は低減されるにも拘らず、それは全部に對しより大なる比例であらう。農業者によつて獲得される全分量は製造貨物に於いて以前よりもより大なる價値ではあり得ないだらうし、又事實さうでないであらう——この等しい價値から、彼は、より大なる比例を、從つて、若し貴君が望むならば、又製造貨物で測定してのより大なる價値を、勞働者に支拂はなければならぬ。然らば彼の利潤は如何にして騰貴し得たのであるか？ それは製造業者の利潤の水準まで下落するであらう。よりよい土地に於いては地代は騰貴するであらうが、これはかゝる土地の耕作者の利潤を同様に下落せしめるであらう。

【勞働がよい支拂を受けてゐた國に於いては、勞働と資本との間の比例の變動は、勞働の生産力の如何なる増大を假定せずとも、利潤率の騰貴を惹起し得よう。併し今述べた總ての原因は、勞働及び資本の兩者の生産力を増大する性質のものである。そして若し或る場合に於いてそれがより貧弱な土地を耕作に引入れるの結果に打克つに足る力を有つならば、利潤率は、勞働の眞實勞賃の増大とすら矛盾せず騰貴し得よう。

【問題の場合に於いて、勞働の貨幣勞賃は食料品の價格の騰貴に比例して騰貴しないを一般に想像されてゐるけれども、而も私は、認められてゐる勞働に對する需要と人口の急速な増大との雙方からして、部分的には教區の助力と馬鈴薯の使用の擴大により、又部分的には請負仕事と女子及び子供の雇傭の増大により、勞働階級は平均して生活の必需品に對するより大なる支配力を有つてあらう、と考へざるを得ない。從つて私は、一七九三年より一八一三年に至る利潤率の増大は、勞

働者の家族に與へられる農業生産物の分量の減少によるよりは、同一数の家族によつて得られる農業生産物の額の増大によつて、生じたものと、考へ度い。事實上、私は、地代に關する章に於いて述べた如くに、一八一三年に耕作に引入られてゐた最後の土地に使用せられた資本が、一七二七年に耕作に引入られてゐた最後の土地に使用せられた資本よりも、より生産的であつたことを疑はない。そして上述せる原因はそれを理論的に説明しそしてかゝる事件をして當に可能なるのみならず更に又蓋然的なることをわからしめそして屢々回起しがちなものであることをわからしめるに足るものであると、私には思はれるのである。】

【指摘された原因の或るものは部分的には偶然的であり、そして將來の時期を考へるに當つては、吾々は、農業に於ける改良と、労働階級に於ける個人的力作の増大とを、期待し得ない、と恐らく云はれるであらう。これは或る程度に於いて事實である。同時に（R註二）、内國産の穀物に對する大なる需要は農業に於ける改良を奨励する傾向が大でなければならず、そして労働に對する大なる需要は現實の人口を刺戟してより、多くの仕事を爲すに至らしめなければならぬことを、認めなければならぬ。】そして（若し）吾々が（労働力の生産性の増大の）これ等の二つの（原因）【事情】に加へるに、（機械の改良による製造品の價格の下落と）【富の増大による】（R註三）（大抵の外國の、そして多くの内國の）【他の】貨物の比例的騰貴を伴はざる、穀物の價格の騰貴【の、必然的結果】を以てする（ならば）【時には】、より（貧弱な）【以上の】土地を耕作に引入れることの結果【を】相殺するに足る労働の生産力の増大の蓋然性【は（かゝる事情の下に於いて）極めて（相殺され

勝ち）【強大】であり、従つて、（多くの）【世界の大部分の】國の現實の狀態に於いては、又は將來數世紀間の其の蓋然的状態に於いては、吾々は、その時機がそれを要求する時には（かゝる結果が生ずる）【それが作用する】ものと正當に期待し得よう。

R註一 自由輸入制度の下に於いて、農業に於ける改良を刺戟するに足る、内國産の穀物に對する需要が、あるであらう。

R註二、…氏は（編註）富の増大による穀物の價格の騰貴を論じてゐる。若しこれが生産費の増大によつて惹起されるのでないならば、何故にそれは他の物以上に穀物に影響を及ぼすのであらうか。若しそれが穀物により多く影響しないならば、穀物が騰貴しないか、又は他の貨物の比例的騰貴が生ずるかであらう、そしてその時には全部は貨幣の價值の下落に歸せられ得よう——これは利潤には何の影響をも及ぼさないものである。

例へば、私は、來る二十年間が深き平靜と平和と豊富な資本とを有つ時期であり、そして二十世紀の初めの二十年間が、戦争の爲め資本がそれに對する需要との比例に於いて乏しく、一七九三年より一八一三年に至る間に經驗されたと同様な取引の増大と農業生産物に對する需要の増大といふ事情を伴ふ、時期であるならば、この近い時期に比較してこの將來の時期に於ける我國の利潤率の増大を、少しも疑はないのである。

併し若しこれが事實であるならば、（——）そして過去の經驗はこれが事實なることを證明するが——世界の大部分の國の現實の事態に於いて、且つ相應の範圍の限られた時期以内では、利潤

率は實際上、耕作されてゐる最後の土地の（肥沃度）「自然力」よりは、資本の相對的多少（及び供給に比較しての生産物の需要）に影響を及ぼす原因に、より多く依存するであらう、といふことになる。従つて（R註）土地の自然力といふこの點を、利潤を決定する唯一の原因として、又は主たる原因としてすら、縷説することは、最も誤れる結論に導かなければならない。アダム・スミスは利潤の下落の原因を述べるに當つて、この點を脱略し、そしてかくすることに於いて極めて重要な考察を脱略してゐる。併し一に資本の豊富と競争とを縷説してゐる點に於いて、彼は實際上は、殆んど専ら耕作されてゐる最後の土地を縷説してゐる者よりも、遙かに眞理により接近してゐるのである（註）。

R註 無根據の攻撃。

—— 頁を見よ。

（編註——原文「儘」恐らくマルサス）

（譯者註——すなはち第一版で）

註 アダム・スミスは、蓄積及び競争の利潤に及ぼす影響を論ずるに當つて、當然、限られた領域、限られた人口、及び限られた需要に關説する積りであることを、「恐らく」認めなければならぬ。併しかゝる事情の下に於ける資本の蓄積は、利潤に影響を及ぼし得る凡ゆる原因を含むものである。

（個々の場合に於いては、この原理の例證は絶えず吾々の眼前にある。若し百磅の資本が一千二百磅のキャラコを生産する爲めに支出され、それが一二〇磅に賣れるならば、利潤は二〇パーセントであらう。他方に於いて、若しそれが一一〇磅に賣れるならば、利潤は單に一〇パーセントに過ぎないであらう。そしてそれが一一〇磅に賣れるか又は一二〇磅に賣れるかは、需要に比較しての供給の状態によつて決定されるであらう。労働の貨幣勞賃と貨幣の價值とは依然同一で

あるかも知れないが、併し生産物の異なる比例が資本を代置するに必要とせられる（三版註。第一の場合には一千碼が必要とせられ、第二の場合には殆んど一千二百碼が必要とされる。併し乍ら、資本を代置するに必要とされる生産物の分量の増大が、利潤の下落の結果であつて原因でないことは、明かである。原因は、同一分量の労働又は同一價値の資本の生産物の價值の下落である。）

二版註 固定資本に就いて行はれなければならぬ訂正に就いては讀者は知つてゐる。

（若し、同一分量の生産物が同一價値の資本によつて獲得され、そして各種の價格で賣れる、と假定する代りに、吾々が、生産物の分量とそれが賣れる價格とが共に可變的である——これが現實の事態であるが——と假定しても、利潤は比例に依存し分量に依存しないから、利潤として残る分量が百碼であらうと又は四百碼であらうと、土地で使用せられた労働がより不生産的にならうと又はより生産的にならうと、利潤が、生産物の價值の中資本の代置に充てられる比例によつて、決定されるであらう、といふことは、依然眞實であらう。

（貨物の通常價格は需要に比較しての供給の偶然的状態によつては決定されず、通常生産費によつて決定される、と恐らく云はれるであらう、そしてそれは眞實であらう。併し通常利潤は貨物の繼續的供給の必要條件の一つであり、従つて消費者に對する其の通常原費の要素の一つである。そしてこの要素は、特殊的には、同一價値の資本の生産物の需要に比較しての供給の通常状態によつて、決定される。若し一年間一〇〇磅の投資によつて、十年又は二十年を平均して、一〇〇磅に賣れる生産物が獲得せられるならば、通常利潤率は二〇パーセントであらう。若し將來

の時期に、同一價値の投資による生産物が、同様の期間を平均して、一一〇磅に賣れるならば、通常利潤率は一〇パーセントであらう。生産物の中資本の代置に充てられる比例は、後の場合に於いては一二分の一〇の代りに一分の一〇であり、そして同一生産物の中資本の代置に必要とせられる比例のこの増大が、特殊的には、同一資本の生産物の價値の下落によつて惹起されることは、明かである。

(従つて、吾々が直接利潤に關説しようとは通常利潤に關説しようとは、それは常に、需要に比較しての直接又は通常の供給によつて決定される、同一價値の資本の生産物の價値の相違に、依存しなければならぬことがわかる。そして若し労働が價値の尺度であるならば——これは既に證示した所と私は信ずるが——これは、利潤は生産物の價値の中それを獲得した労働の支拂に充てられる比例によつて決定される、と云ふのと同じことである。そして直接的歸結として、利潤は同一分量の労働の生産物の價値が下落する時の外は決して下落せず、そして同一分量の労働の生産物の價値が騰貴する時の外は決して騰貴しない、といふことになる。)

【第五節】【第四節】 リカアドウ氏の利潤論に關する評論

リカアドウ氏によれば (R註)、利潤は勞賃によつて左右され、そして「勞賃は耕作されてゐる最後の土地の質によつて左右される。利潤に關するこの理論は、労働の價格の變動は如何にもあれ、

貨幣が引續き同一の價値を有する時には、全部の貨物は同一の價格にある、といふ事情に、全く依存するものである。勞賃及び利潤の兩者の價値のこの齊一は、實に、リカアドウ氏により、彼れの著作を終始一貫して、總ての彼れの考察に於いて、推測されてゐる。そして若しそれが眞實であるならば、吾々は確かに、貨幣勞賃の如何なる騰貴や下落が起つても利潤率を決定するであらう所の、正確な基準を有つ筈である。併し若しそれが眞實でないならば、この全理論は地に倒れる。吾々は、貨幣勞賃の騰貴からは、若し貨物が、依然として同一の價格を有つては居らずに、各種各様に影響され、或るものは騰貴しつゝあり、或るものは下落しつゝあり、そして實に極めて小數が停止的であるならば、利潤率に關して何事も推論し得ない。併し、このことが労働の價格の騰貴によつて必然的に生じなければならぬことは、前の章に於いて證示した所である (二版註)。従つて労働の貨幣勞賃は利潤率を左右し得ないのである。】(勞賃が低いか高いか比例して高いのである (三版註)。又は彼自身が利潤に關する彼れの章の他の部分に於いてより十分に述べてゐるのによれば、

〔總ての國及び總ての時に於て、利潤は、地代を生まない所のその土地の上に於て、又は地代を生まない所のその資本を以て、労働者に必要品を給するに必要な労働の分量如何によつて定まる。〕 (三版註)

R註 私の意見に關するこの記述は、三〇九頁に於いて (譯者註—次の) マルサス氏が爲してゐる記述とは大いに異なる——併し彼が今云つてゐることでは、彼は全く正しくはない。私は、利潤は勞賃によつて左右され、そして勞賃は耕作されてゐる最後の土地の質によつて——其の生産性

とは無關係に——左右される、とは云はない、蓋し、若し勞賃が固定せる價值のものと想像されるならば、利潤を左右するものは明かにその土地の生産性であるから。

一版註 第二章第二節及び第五節

二版註 1 Principles of Political Economy, ch. vi. p. 108, 3rd ed. (譯者註——前掲譯書、一一〇頁)

二版註 2 Id. p. 128. (譯者註——同上、一三〇頁、この引用文は第一版では異なる場所に現はれてゐる、本章の第一版での第二節の終りから第十パラグラフを参照)

(こゝ)では、勞賃の前拂以外の前拂はない、と了解されてゐる。そしてかゝる事情の下に於いては、十人の勞働者に支拂をなすに必要とされる必要品は、それを生産するに十人以下の勞働者を必要としたに違ひなく、然らざれば利潤はないであらう。その上に、十人の勞働者の勞賃を支拂ふに必要な生産物に對する利潤が、全生産物と、その中、九人であらうと八人であらうと七人であらうと又はその他の如何なる比例であらうと全部の十人の勞賃を生産するに現實に使用せられた數の勞働者に支拂ふに必要とされる部分との、差額に依存しなければならぬことは、明かである。

(從つて)リカードウ氏の命題は、彼が、勞賃は生産物の中それを獲得した勞働の勞賃の支拂に充てられる比例によつて、決定される、と云つたとした場合と、本質的には同一なることが、見出されるであらう。そしてその限りではこの理論は全く正しい。併し其の適用に於いて、彼は、二つの推定をそれと結びつけ、この推定は根據がない爲めに、この理論をして、全體として本質

的に誤れるものたらしめてゐるのである。彼は次のことを推定してゐる(三版註、すなはち、

(第一に、其の生産に於いて同一分量の勞働を要費した貨物は、平均して常に同一の價值であらうといふこと。そして、

(第二に、同一分量の勞働の價值は、勞働者の支拂に充てられる生産物の分前に比例して變動し、そしてこの勞働の變動する價值が、かくの如く彼等によつて獲得される生産物の假定された一定の價值から、取り去られるのであるから、残部が利潤率を決定する、といふこと。)

二版註 Principles of Political Economy, ch. vi. p. 111, 3rd edit. (譯者註——前掲譯書、一一四頁)

(若し)これ等の推定が十分な根據を有するならば、この理論は正確であらう。併し、其の生産に於いて同一分量の勞働又は同一價值の資本を要費した貨物が、其の價值を作り上げる爲めに、それを使用せられた蓄積勞働及び直接勞働の分量に加へられなければならぬ、利潤の率及び量の異なるによつて、價值の大きな變動を蒙ることは、第二章の第四節に於いて證示した所である。

(そして更に、各勞働者に報酬として與へられる生産物の分量又は比例が如何に可變的であらうとも、その分量又は比例の價值が常に同一であることは、同章の第六節に於いて證示した所である。

(然らば、利潤が、リカードウ氏の述べてゐるものとは本質的に異なる原理によつて、左右されなければならず、そして生産された貨物の一定の價值に比較しての、一定分量の使用された勞働の價值の、變動によつては、決定せられずに、それが、一定分量の使用された勞働の一定の價值

に比較しての、生産された貨物の價値の變動によつて決定されることは、明かである。

若し吾々が、貴金屬の獲得法に關して、確に貴金屬をして最も嚴密に同一の價値を有たしめる假定を採用するならば、換言すれば、若し吾々が、一日の必需品以上には資本の形に於ける何等の前拂もなくして、齊一なる分量の助力を受けざる勞働によつて、貴金屬が獲得されるものと、假定するならば、この結論は「更に、より」顯著に（明白）「眞實」なることが分るであらう。貴金屬がこの場合、他の如何なる場合よりもより完全に、同一の價値を保有するであらうことは、否定し得ない、蓋し（其の生産に現實に使用せられた勞働の分量とそれが支配すべき勞働の分量とは同一である）「それは同一分量の勞働を要費しすれば支配し得る」からである。併しこの場合には、前述の如くに、勞働の貨幣價格は永續的に（依然同一でなければならぬ）【決して騰貴し得ないであらう。】併し乍ら吾々は、勞働の貨幣價格の騰落がかくの如く不可能であることが、利潤の自然的進行を何等かの點に於いて害し又は妨げ得るとは、一瞬と雖も想像し得ない。資本の繼續的蓄積と生活資料を獲得する困難の増大とは疑ひもなく利潤を引下げるであらう。その生産には同一分量の勞働が引續き使用されてゐるが併し各様の種類及び額の資本の援助を得てゐる總ての貨物は、價格に於いて下落し、而も貨物の價格が前に利潤によつて影響せられた程度に正に比例して下落するであらう。そしてその生産にはより多くの勞働が必要である穀物に關して言へば、この物品は、【それを生産するに用ひられた資本にも拘はらず】（有效需要の減少に比例して人口の増進を遅らせる）【人口を停止的ならしめる】程に穀物勞賃を低減すべき點まで、貨幣

價格に於いて騰貴するであらう。かくて、リカードウ氏によつて貨幣勞賃の騰貴に歸せられた、利潤に及ぼす總ての影響は、貨幣勞賃と貨幣の價値とが依然として正確に同一である時に起るであらう。【この假定は、更に、利潤の下落を以て貨幣勞賃の騰貴と同義なりと考へ又は勞働の貨幣價格をして利潤率の大なる規制者たらしめるのが、如何に甚だしい誤謬であるかを、證示するに役立つものである。】この場合に於いて、利潤は、貨物の價格が下落する程度を決定する、競争の原理、又は需要及び供給の原理によつてのみ、左右され得ることは、明かである。そして、勞働の齊一なる價格に比較しての其の價格が【主として】利潤率を左右するであらう。

（併し乍ら、若し、金が、こゝに述べた如くに直接勞働のみによつて獲得せられると假定する代りに、吾々が、リカードウ氏と共に、それが或る比例に於ける固定資本及び流動資本によつて獲得せられる、と假定すれば、（前に暗示せる如くに）彼れの考へてゐる、耕作の進行に伴ふ價格の状態と勞働の騰貴とは、貨幣の價値の下落によるものであり、そして勞働の價値の騰貴によるものではないことが、見出されるであらう。

（正しい利潤論にとりかくも缺くべからざるものたるこの點のより、以上の例證として、同一分量の金屬が常に同一分量の勞働並びに同一價値の他の資本により獲得せられ得る所の自國の鑛山によつて金の供給を受けてゐる國を假定し、そして更に、特定の時期に於いて、資本の蓄積が、其の以前の價格での生産物に對する有效需要よりも、より急速に増大しつゝある、と假定しよう。かゝる事情の下に於いて、貨物及び勞働の價格に及ぼす歸結如何を考察しよう。引續き同一分量

の労働並びに同一分量の他の資本により獲得せられる總ての貨物が、供給の豊富によつて、價值に於いて下落するであらうことは、明かである。そして金は就中より豊富になるから、労働者と資本家との間には生産物の異なる分割が起るであらう。その中より小なる比例が利潤の支拂に充てられ、そしてより大なる比例が勞賃の支拂に充てられるであらう。従つて利潤は下落し、そして労働の貨幣勞賃は騰貴するであらう。そして問題は、労働の貨幣勞賃の騰貴は労働の價值の騰貴と考へらるべきか、又は貨幣の價值の下落と考へらるべきか、といふことである。リカアドウ氏はそれを労働の價值の騰貴と考へ、そして彼れの地代、利潤、及び勞賃に關する章に於ける總ての彼れの計算を、この推定に基かせてゐる。若し實際、同一分量の労働、又は労働及び資本(二版註)の生産物の價值が、依然同一であるとするならば、——これは彼が假定してゐることであるが！——然らば、この生産物のより大なる比例が労働の勞賃の支拂に充てられるならば、労働の價值が騰貴することは、全く明かであらう。併し若し生産物の價值が下落するならば、然らば生産物のより大なる比例が労働の勞賃の支拂に充てられるといふ事情は、決して、労働の價值が騰貴したことを意味するものではない。それは單に、労働者が、價值に於いて下落した物品のより大なる分量を受取ることを、意味するに過ぎない。そしてこの場合に於いてその物品が價值に於いて下落したことは、需要に比較しての供給の状態と、其の基本的生産費との兩者から、確實に推論せられ得よう。労働の生産性は依然同一であるけれども、資本が増大したので、供給は以前よりも比較的により豊富である、と推定されてゐるのである。このことは必然的に利潤の下落を惹起さ

なければならず、そしてこの下落は、若し同一の資本競争が續くならば、永續的であらう。併し若し利潤率が下落してゐるならば、基本的生産費は下落してゐる。この場合に於いて、一定分量の金の供給の條件は、以前と同一分量の労働、並びに同一價值の他の資本、及び、利潤に對するより少い報償である。従つて購買者にとつての金の基本的生産費は、以前よりもより少い。

二版註 リカアドウ氏は、屢々、同一事を現はす爲めに、労働の分量及び労働及び資本の分量なる語を用ひてゐる。一般に、利潤の問題に關する時には、彼は、種々なる種類の機械及び原料は分量によつては測定され得ず又比較され得ないのに、労働及び資本の分量を意味してゐる。それに基づいて利潤が測定される前拂に關しての眞實の懸念された表現は、(既にわかつてゐる様に)労働の分量か又は資本の分量かでないならぬ。兩者は等しいものであり、そして同一の結果を與へる。

(若し、リカアドウ氏の云ふ如くに、労働者の勞賃を支拂ふ穀物を生産するにより大なる分量の労働が必要とされる、と云はれるならば、これは讓歩してもよい。併し利潤の比例的下落が起つてゐることが見られてゐるのであるから、利潤の要素の減少は労働の要素の増大を埋め合せ(二版註)延いては、貨幣の價值の下落が労働の價格を騰貴せしめるのに、其の價值を以前と同一ならしめておく。そして貨幣の價值が下落してゐなければならぬことは、更に、私がそれに適用した尺度を全く別としても、リカアドウ氏自身の結論によつても、明かである。彼れの理論によれば、改良された機械によつて生産されたのではない製造貨物の價格は、耕作の進行に於いて、依然殆んど同一であらうが、他方労働と總ての粗生生産物とは騰貴するであらう。従つて若し吾々

が貨幣の價值を其の一般的購買力によつて測定するならば、其の下落は決定的に確證される。或る量の物品に就いてはそれは以前と同一分量を購買する。遙かにより大なる量の物品に就いてはそれはより小なる分量を購買する。

二版註 この埋合せは、既に述べたる如くに、常に同一なる、一定数の人間の、變動する勞賃の基本的原質に於いて、必然的に起る。

(然らば若し、リカードウ氏の體系に於いて、同一分量の勞働によつて獲得された貨物が同一の價值である様に見えるならば、それは單に、彼が、その尺度として、部分的に利潤から成つてあるといふ其の構成の性質上、測定せんと企てられた丁度その貨物の價值の變動と共に必然的に變動する、貨幣を、採用したが故に外ならない。)

【併しリカードウ氏は決して、利潤の下落を惹起す價格の下落を——實際上は、前の假定的場合と並んで多くの場合に於いて、利潤の下落はかくの如くして生じなければならぬにも拘はらず——考へてゐないのである。

【或る製造業に於いて大いに優れ、¹ 甚して總ての其の穀物を外國から購買してゐる繁榮せる一商業都市を假定しよう。最初には、そして恐らく可成りの間は、外國市場に於ける其の製造品の價格は、其の輸入穀物の價格に比較して、高き利潤を生み出す如き程度であり得よう。併し、資本が引續き蓄積され且つ多量に輸出製造品に使用されるにつれて、かゝる製造品は、需要及び供給の諸原理によつて、殆んど間違ひなく價格に於いて下落するであらう。然る時は其のより大なる部分が

穀物の一定部分と交換されなければならず、そして利潤は必然的に下落するであらう。かゝる事情の下に於いて、勞働する製造業者は彼れの支持の爲めにより多くの仕事をしなければならぬことは、成程眞實である、そしてリカードウ氏はこれが利潤の下落の正當な原因であると言ふであらう。この點に於いては私は全く彼に同意したい。併し確かに、この場合に於いて、同一分量の穀物を得る爲めにより多くの仕事が必要であることの特殊的原因は、それで穀物を購買する所の輸出製造品の價格の下落であり、そして穀物の騰貴ではなく、それは依然として正確に同一であらう。これ等の製造品の下落は、其の生産物に對する需要の擴大よりもより急速なる資本の蓄積より生ずる供給の増大の自然的結果である。そして、かくの如くして惹起された利潤の下落が全く需要及び供給の諸原理に依存するといふことは、若し吾々が、問題の製造品に對し新たな市場が開けるならばこの利潤の下落は直に終りを告げるであらうことを、認めるならば——これは確かに吾々の認めなければならぬことであるが——認められるであらう。】

R註 この章句に先立つ總ての記述に於いて、マルサス氏は明かに、選ばれ得る如何なる媒介物も、如何なる事情の下に於いても、價值の正確な尺度と想像せられさへせず又せられ得ないことを、證示してゐる。私は啻にこれを認めるのみならず、更に私自身それを指摘した。考へ得る價值の最も完全な尺度に於けるこの救済し得ない不完全に對し如何なる是正が爲されなければならぬにしろ、私は何の反對論をも提出しようと思はない。それは或る貨物には一方に影響し或る貨物には反對に影響するが、併し乍ら一般的平均は多く影響されはしないであらう。一

般的原理は尺度の必然的不完全によつては少しも無効にはならない。私は、マルサス氏が第五章の第二節でよく説明してあるものと違ふ學説は、何も主張しない。彼自身の説明は時にこれと一致しないが、私の説明は思ふに決してそんなことはない。

併し乍ら今は私はこの記述の頭にある章句を取扱はなければならぬ。

この繁榮せる商業都市が必要とする總ての穀物が輸入せられると假定する代りに、その分量の四分の三が輸入せられ、そして農業者がそれを最低輸入価格で賣つて而も現行利潤率を獲得することが出来る程豊富な供給を與へる如き土地のみが耕作に止つてゐるものと、假定しよう。然らばマルサス氏は恐らく、吾々が穀物を同一の価格で輸入し得る間は利潤は下落し得ず、蓋し穀物が騰貴する迄は如何なるより悪い土地も耕作され得ないであらうから、といふ點で、私に同意するであらう。若しより貧弱な土地が耕作されるならば、その土地に於ける生産物の分量は使用せられた労働に對し以前と同一の比例を採らず、従つて利潤の平衡を保持する爲めに穀物が騰貴しなければならぬか、又は諸貨物が下落しなければならぬかである。若しより貧弱な土地が耕作されるならば、私は、穀物の自然價值は、それが如何なる貨幣價值を採らうとも、騰貴したのである、と云ひ度い。若しそれが價格に於いて騰貴せず諸貨物が價格に於いて下落するならば、私は、貨幣は價值に於いて騰貴したのである、と云ひ度い。扱て貨幣の價值のこの騰貴は、總ての國に共通であるか又はこの國に特有であるかである。若し總ての國に共通であるならば、穀物の價格はこの國に於いて停止的であるのに、それは他の諸國に於いては下落

するであらう——若しそれがこの國に於いて騰貴したのであるならば、それは他の諸國に於いては停止的であらう。この國に於ける變動の眞の原因は、より多くの労働が、欲求された最後の部分を生産するに必要とされた、といふことである——かゝる原因は何も外國では働かず、従つて穀物は外國からこの國へと輸出され、終に相對價格が、より悪い土地が耕作に引入れられた以前にあつたと同一の状態に、恢復されるに至るであらう。

扱て吾々の需要が増大するものと——若し望むならば二倍となるものと——假定しよう、問題は、外國はこの追加分量を、新らしい土地を耕作に引入れることなくして、供給し得るか、といふことである。若し外國がさうし得るならば、私は外國の穀物の價格が騰貴する理由を見出すことは出来ず、若しさうし得ないならば、それは騰貴し、そしてその結果は雙方の國に於いて利潤の下落であらう。扱て、穀物が英蘭に於いて依然低い價格にあるならば、諸貨物は、若しそれ等が下落するならば農業利潤は製造業利潤と異なることとなりそして資本は一方から他方に移動するであらうといふ、既に述べた理由によつて、下落し得ないであらう。併し外國穀物に對する需要は極めて大となり爲めに外國がそれを供給する能力又は意思を有たなくなることもあらう——外國は、吾々が終局的にはそのみを穀物と引換へに提供し得るものたる、諸貨物を、それ以上は受容することを拒むこともあらう。併し乍ら英蘭は穀物を欲求し、従つてそれは穀物と引換へに其の貨幣を輸出することを同意しなければならぬ。貨幣のこの蓄積は外國に於ける穀物の價格を引上げるであらうが、併しそれは同一の程度では英蘭の財貨の價格

を引上げず、従つて外國に於ける穀物と諸貨物との比例は最早以前と同一でないので、英蘭は自國の穀物を買はうといふ誘因はより少くなるであらう。

英蘭に於ける貨幣の輸出は逆の作用をし、それは穀物と諸貨物との價値の雙方を引下げるのであらう。然らば穀物の輸入と諸貨物の輸出とは、兩者が雙方の國に於いてより接近せる價値となるので、共に妨げられるであらう。若し穀物に對する英蘭の欲求が大であるならば、英蘭はそれを新らしい條件で輸入するのに同意するか、又は自らそれを栽培するかであらう。その何れの場合に於いても英蘭の利潤は下落するであらう、蓋し若し同分量の又はより、少い分量すらの穀物が労働者に與へられるとしても、それは尙ほ一定分量の労働によつて獲得された分量の中より、大なる比例であらうから。

扱てこれ等の結果は、吾々が穀物と引換へに與へ得る諸貨物に對する外國の限られた需要によつて、齎らされる。外國穀物に對する我國の需要は然かく限られて居らず、従つて外國は我國に對する獨占の如きものを所有することとなる。總ての國に於ける利潤は、主として、穀物——それがそれ自身の國で栽培される場合であらうと、又は製造業者(譯者註：製造)で體現され、してそれで外國から購買される場合であらうと——に對し與へられる労働の分量に依存しなければならぬ。私は主として依存すると云ふが、蓋し私は勞賃は主として穀物の價値に依存すると思ふからである。労働に影響を及ぼし得る他の諸原因に關するマルサス氏の觀察があるのであるから、私は勞賃に及ぼすそれ等の他の諸原因の結果を否定するものと想像されない様に

注意しなければならない。

然らばマルサス氏の提出してゐる場合は、單に、一般的學説を確證するに過ぎない、彼が製造貨物の價値の下落と呼んでゐるものが實際は食物の労働價値の増大であることは、明かにわかる。私は結果は認めるが、併し私がその結果の立派な解決を與へたものと考へる。

【貨物の價値を以て一定なりと考へる、同一の原理によつて、リカアドウ氏は、若し我國の穀物及び労働の價値が下落するとするならば、我國の外國貿易の利潤はそれに比例して騰貴するであらう、といふ意見である。併し(R註二)私は問ひ度、外國市場に於いて貨物の價値を固定すべきものは何であるか? ——それは單にそれに使用された労働量ではない、蓋し、前の章に於いて指摘せる如くに、極めて異なる分量の労働を要した貨物が外國市場に於いて同一の價値で賣れてゐることが見られるであらうから。併し若し(R註三)それが、平均的にも又その瞬間にも、供給及び需要によつて、決定されるならば——それは確かにかくして決定されるが——用途から追出された資本の競争によつて惹起された遙かにより、大なる供給が、急速に價値を引下げ、又それと共に利潤率を低減するのを、妨げるべきものは何であるか?】

R註一 私は、外國に於ける生産費である、と答へる。若し英蘭が葡萄牙に、葡萄酒に對し、前年と同一分量の鐵器を今年與へるならば、若しその鐵器が大いに、少い労働しか英蘭に要費せず、そしてそれを生産する労働者がより、豊富な報償を受けないならば、英蘭はこの取引に對し増大せる利潤を得るであらう。

R註二 蓋し農業への利潤を低減し得ないからである。若し穀物及び労働が低い眞實価格にあるならば、農業への利潤は高くなければならず、そして總ての他の資本への利潤も亦それだけ高くなければならない——蓋しマルサス氏が二九六頁で述べてゐる如くに、『同一の國に於ける利潤は等しくなる傾向がある』(譯者註——第一版の本頁第一節の第十二番目のパラグラフを參照)からである。を見よ。(編者註——原文の儘)

【若し R註、過去二十五年間の穀物の價格がクワタアに就き約五十志に保たれ得、そして國の増大し行く資本が外國穀物の購買の爲めの輸出貨物の製造に主として用ひられたならば、資本の利潤はより高くはなくより低かつたであらう、と信ずるに私は大いに傾くのである。永續的な農業上の改良に用ひられた數百萬磅は(註一版)利潤を引下げる何等の傾向も有たなかつた。併し若し、國內農業に使用されてゐる大なる部分の普通の資本と共に、それが、輸出貨物の製造に用ひられてゐる既に大きな資本に追加されたならば、外國市場への供給は過剩となり、貨物の價格は資本の利潤を全く低からしめる程のものとなり(註二版)、そして用途に當惑せる可動資本の額も實際にあつたよりもより大になり又國を去らんとするかゝる資本の傾向もより大となるであらう、といふことを私は殆んど疑ひ得ないのである。】

R註 これは、吾々は吾々の穀物を低廉には輸入してはならなかつた、と云ふことである、蓋し私は低廉といふのは輸出貨物に對しての低廉な價格のことをいふのだから。若しこれが眞實であるならば、吾々は穀物を栽培する方を選ぶべきであつたであらう、そして利潤はその場合には丁度現在のそれだけであらう。

一版註一 灌溉に、及び農業生産物の運送の爲めの道路及び運河に、支出された數百萬磅の資本は、利潤を引下げるよりは寧ろ引上げる傾向があつた。そして尙ほ幾數百萬磅を使用しても同一の有利な結果を伴ふであらう。

一版註二 我國の現在の製造業者達は、彼等が輸入穀物を求める時には、輸入の増大によつて惹起される彼等の財貨に對する追加需要を主として考へ、そして同一營業に於けるかゝる多くの資本及び労働者の競争によつて惹起されなければならぬ供給の莫大な増大を、全く忘れてゐるやうに思はれる。

【リカード氏は R註、資本の利潤に及ぼす農業に於ける永續的改良は、疑ひもなく、利潤の減少なしに、資本の使用に對する最大の活動舞臺を開く故に、かゝる改良の影響は、經濟學の全範圍に於ける最も重要な考察の一つであるにも拘はらず、それに少しも重きを置いてゐないのである。彼は曰く、『其の土地が劣質のものである所の、而して其處に於いては食物の輸入が禁止されてゐる所の、一つの國が如何に面積廣大であらうとも、資本の最も適度なる蓄積でさへ、利潤の率に於ける大減退及び地代に於ける急速なる増加を伴ふであらう。而して之に反し、面積は小さいが併し肥沃なる一つの國は、殊に若しそれが自由に食物の輸入を許すならば、利潤の率に於ける何等の太なる減少或は土地の地代に於ける何等の大なる増加を伴はずして、大なる資本を蓄積し得るであらう。』(二版註)

R註 もう一度、私が農業に於ける永續的改良の影響に極めて最大の重きを置いてゐることを、私は云はなければならぬ。引用された章句は改良が何も起つてゐない時の事態に關するものであり、従つてそれに基いて樹てられた所の、改良を想像してゐる、議論には、何の根據もな

1 版註 Prime of Pol. Econ. ch. vi. p. 133. 2d edit. (譯者註——前掲譯書、一三〇頁)

【土地に於ける永續的改良の周知の結果に論及すれば、私は、これ等の二つの場合から、リカアドウ氏が得た推論とは正反對の推論を得なければならぬ。その土壤は極めて貧弱な質であるが而も總て又は殆んど總てが耕作され得る所の、極めて廣大な領域は、農業に於ける繼續的改良によつて、殆んど又は全然利潤の下落を伴はずに、數百年の間多額の資本が使用され得るであらう。然るに小さいが併し肥沃な領域は、それが土地に使用し得る總ての資本を以て程なく満されるので、其のより以上の蓄積を、下落し行く製造品を以て穀物を購買することに、使用せざるを得ないであらう。これは、前の場合に蓄積されたであらう資本の三分の一が蓄積されぬ中に、利潤を容易に其の最低率に低減すべき事態である。

【其の近隣諸國よりもより速かに蓄積する國は、若しそれが土地に於ける永續的改良を成就し得るならば、數百年の間尙ほ其の利潤率を維持し得よう。併し若し同一の蓄積速度を以てそれが主として輸入穀物に頼るとするならば其の利潤は殆んど必ずや下落するであらう。そしてこの下落は、恐らく、ヨオロッパ諸港に於ける穀物の地金價格の騰貴によつてではなく、問題の國がそれを以て穀物を購買する輸出品の地金價格の下落によつて、惹起されるであらう(R註)】

R註 この問題は決して重要でないものであるが、併し私は、それが苟くも起るとすれば、それが穀物の地金價格の騰貴によつて惹起されるであらうことを、殆んど疑はない。貨幣の價值の變動は個人にとつては重大なことであるが、併し國民の利害に對して及ぼす其の結果では大した

たことではない。

【これ等の敘述は利潤に關する最も正確な理論に一致するやうに私には思はれ、そしてそれは確かに經驗によつて確證されるやうに見える。私は既に、土地に於ける利潤が、一八一三年に於いて、八十年以上前よりも——その中間期には幾數百萬磅の蓄積された資本が土壤に使用されたにも拘はらず——より高い、といふ疑問の餘地なき事實に、言及した。そして利潤を低減する價格の下落の結果は現在では唯餘りにも明かである。我國の輸出品の最大物品に於いては、若し穀物が一クヲダアに就き五十志であつたならば通常の事態に於いて恐らくさうあつたであらうと思はれるよりも、労働の勞賃は現在より低い。若し、利潤に關する新理論によつて、我國の輸出品の價格が依然として同一であつたならば、親方製造業者は最も異常な繁榮の状態にあり、そして彼等の資本の急速なる蓄積は見出され得る總ての労働者を間もなく使用したことであらう。併しかゝる事實の代りに、吾々は、市場の供給過剰を、價格の下落を、そして綿製品がカムチャッカで生産費以下に賣れてゐることを、聞いてゐるのである。

【綿業が偶々供給過剰になつてゐるのであると恐らく言はれるかも知れない。そして、若し或る事業の資本の供給が過剰であるならば、それは或る他の事業の供給の不足なることの確實なる徴候である、といふのが、利潤及び需要に關する新學說の一教義である。併し私は問ひ度い、明かに資本の供給の不足な或る大きな事業が何處にあるのか、そして何處で高き利潤が久しく追加資本を求めて而もその効なきものであるか？ 戦争は今では終りを告げてから四年以上になる。そして資本

の移轉は一般的には若干の損失を惹起すけれども、併し若しそれが大なる需要及び高き利潤によつて移動を促されるならば移動は間もなく起るであらう。併し若しそれが單に利潤の下落によつて其の通常の道程を進むことを妨げられ、他方總ての他の事業に於ける利潤が、一般的價格下落によつて、同時に——恐らくは正確に同一程度に於いてではないであらうが——下落しつゝあるならば、十中八九其の運動は緩慢であり且つ迪々しいであらう。

【然らば利潤の下落を惹起す所の勞働とそれによつて獲得される生産物との比率の變動を考察するに當つて、若し吾々が貨物の價格の下落に關説することなくして勞働の勞賃の下落に専ら言及するならば、吾々は單にこの問題の半を觀てゐるにすぎないのである。兩者の利潤に及ぼす影響は正確に同一であらう。併し土地の状態に關しては何等の問題のない後の場合は、直ちに利潤が、貨物の價格に、そしてかゝる價格を決定する原因すなはち需要に比較しての供給に、如何に多く依存するものであるかを證示するのである。】

【實に總ての時に於いて、又凡ゆる假定によつても】（彼れの體系に於いて利潤を左右する唯一のものたる大制限原理、すなはち、）土壤より食物を獲得するの困難の増大【に、又は人口の制限——それが如何様にして惹起されたのであらうと——なる更により、一般的な原因に、依存する大制限原理は】（に就いて云へば、それは單に事實上可能なる利潤の範圍を、それがどれだけ騰貴する可能性があらうか、又どれだけそれが下落する可能性があらうか、を決定するに過ぎない。それは實際）常に働く許りになつて居り、そして、これを相殺する便宜がこれに打克たないならば、

必然的に土地に於ける利潤率を引下げ、そして（それ）【この下落】は土地から總ての他の産業部門へと擴大するであらう。併し（その時ですらそれは常に）【この大原理ですら】需要及び供給の法則及び競争の法則に従つて作用するのである。

土地が益々消耗されるにつれ何故に利潤が下落しなければならぬかの特殊的理由は、必需品とそれが獲得される土壤との内在的性質により、それに對する需要及びその價格は恐らくその生産費に比例して増大し続けることは出来ない、といふことである。（一定分量の生産物の價值は、それを獲得するに必要とされる勞働の分量の増大の故に、騰貴するけれども、而も同一分量の勞働の減少せる生産物の價值）【資本を生産する勞働での原費は、かゝる資本のそれが生産せられた時の價值】又は新たな勞働者を働かせる其の能力（は、需要及び供給の状態により、必然的に下落する。）【よりも、より速かに増大する。穀物のより以上の價值と穀物に對する（有効）需要とに對する限界は吾々には明瞭であり明白である。輸入を問題外にすれば、それは正に、耕作されてゐる最後の土地の生産物が單にその耕作に使用されてゐる資本を代置しそして人口を支へるに丁度足る時である。利潤はこの時には其の最低の理論的限界にある筈である。この點に向ふ其の進行に於いて、資本の繼續的蓄積は常にそれを引下げる傾向を有つてあらう。そして如何なる一時期に於いても、それは、總ての事情の下に於いて土地の状態が許すよりも、より高くは有り得ないのである。

併し乍ら、それは、前述の如くに、生産物に對する需要に比較しての資本の豊富なる供給によ

つて、「如何なる程度にも」より低くあり得よう。【そして】實際上、それは土地の現實の狀態並びに労働者に報酬として與へられる最少可能量の食物が、許す程、高いことは極めて稀である。【り、そしてより以上の蓄積を許さない程低いことは極めて稀である。】（譯者註——第一版はこゝで「は」にてパラグラフが切れる）併し資本の或る一定の増大の、又は或る分量の穀物を生産するに必要な労働の或る一定の増大すらの、資本の利潤に及ぼす影響如何は、これを前以て云ふことは全く不可能であらう（三版註。譯者註——第一版ではこゝでパラグラフが切れる）資本の單なる増大の場合には、それが如何に大であらうとも、長期の間利潤の凡ゆる下落を妨げる事情が起るであらうことが分つてゐる。そして穀物を生産するに必要な労働量の増大といふ場合ですら、穀物の價格の増大が、生産の困難の増大の殆んど全部を労働（者）に負擔せしめるが如きものであらうか、又は（資本家）【その殆んど全部を利潤】に負擔せしめるが如きものであらうか、又は（更に）【最後に】その損失をより平等に彼等の間に【各様の比例で】分割する（——これが一般に起ることであるが——）であらうかは、全く需要及び供給の原理及び競争の原理に依存するであらう。

二版註 利潤は全然労働の生産性に依存する、と時に云はれてゐる。若し労働の生産性といふのが、その言葉が通常意味するものごとであり、そしてそれが確かに意味しなければならぬものごとであるならば、すなはち、一定分量の労働によつて獲得せられる生産物の分量のことであるならば、毎日の經驗がこの敘述の全く無根據なことを證示してゐる。若しこの言葉が價値の生産性のことである積りならば、然らば疑ひもなく利潤は労働の生産性に依存する。この眞理なることは、利潤の定義そのものの中に、すなはち前拂の又は前拂せられたる一定分量の價値以上に出づる生産物の價値の超過といふ中に、含意されてゐる。それは正確にこゝで説き明かされたことであるが、併し用語の通常の且つ正確な意味は特別

の場合に変更されてはならない。

従つて、需要及び供給の原理及び競争の原理を遠ざけようと企てる利潤に關する如何なる理論も、正確性へは接近し得ないのである。

第六章 富と價值との區別に就いて

一人の人が富んでゐるか貧しいかは、彼が人生の必需品、便宜品、及び(奢侈)²【¹愉樂】品を享受し得る程度による、とアダム・スミスによつて正當に述べられてゐる。そしてこの定義によれば、若し自然の恵みが總ての生活の必需品、便宜品及び(奢侈)²【¹愉樂】品を、一國の凡ゆる住民に、彼れの望むだけ全部、與へるならば、かゝる國は、交換價值を有つ何物をも所有せず又は唯の一時間の勞働を支配し得る何物をも所有しなくとも、最高度に富んでゐるであらう、といふことになる。

かゝる事態に於いては、疑ひもなく、富は交換價值と何等關する所はない。併しこれは現實の事態ではなく、又如何なる將來の時にもさうならうとは思はれぬ故に、自然の恵みは人間に彼自身の力作の助力なくしては殆んど生活の必需品、便宜品及び(奢侈)²【¹愉樂】品を與へない故に、そして力作への大きな(實際的)²刺戟は或る勞働又は犠牲によつてのみ所有され得るものを所有せんとする願望である故に、人類が地上に置かれてゐる眞實の状態に於いては、富と交換價值とは、依然決して同一ではないけれども、(多くの點に於いて)【¹それが時に想像されてゐるよりも遙かにより】近い關聯を有つてゐることが、見出されるであらう。

異なる事情の下に於いて同一の交換價值を有つ所の同一の貨物の異なる分量を考察する時には、こ

の區別は實に全く明かである。靴下は、機械の改良によりそれが半額の價格で作られ得、又はその交換價值が半に低減されたからといつて、それを穿く人の愉樂と便宜とに寄與するその能力の半を失ふものではない。一足の靴下の代りに同一質の二足を有つてゐる者は、靴下の關する限りに於いては、生活の便宜品の二倍量を所有してゐることは、容易に認められるであらう。

併しこの場合に於いても彼は總ての點に於いて二倍に富んでゐる譯ではない。若し實に、彼がそれを自分で用ひる積りであるならば、(或る論者はこれを否定してゐるけれども)彼は【實際】二倍の富を有つてゐる(かも知れぬ)が、併し若し彼が、それを他の貨物と交換する積りであるならば、彼は(確かに)それだけの富は有つてゐない。蓋し一足の靴下は、或る事情の下に於いては、それを生産するに用ひられた機械に極めて大なる改良が爲された後に於ける二足【¹すら】又は三足すらの靴下よりも、より多くの勞働及び其の他の貨物を支配し得ようからである。併し乍らこの種の總ての場合に於いては、富と價值との相違の性質は十分に明かである。

併し吾々が異なる種類の物を比較することになる時には、それ等のものの(各々の)【¹相對的】交換價值によつて確かめられたる各々の【¹相對的】評價による以外には、それ等のものの所有と享受とが所有者に與へる富の程度を評價する方法はない。若し一人の人が或る分量の煙草を有ち、そしてもう一人の人が或る分量のモスリンを有つならば、吾々は、それ等のものの、市場に於ける(勞働²、貨幣、又は或る他の第三の貨物の、各)【¹富の相對的】支配力を、確かめることによつてのみ、二者の何れがより富んでゐるかを決定することが出来る。そして假令一つの國が穀物

を輸出しそしてレイス及びリンネルを輸入するとしても、穀物は何れの他の貨物よりもより明かな且つ確定せる價值を有つにも拘はらず、評價は正確に同様にして行はれなければならぬ。奢侈品は必需品と同様に富の一部分である。この國は、其の富が、又は全體としての其の必需品、便宜品及び奢侈品が、かゝる交換によつて増加せられざる限り、其の穀物と引換へにレイス及びリンネルを受取らなかつたであらう。そして富のこの増大は、恐らくは、受取つた貨物は送り出されたものよりもより多く欲求されて居り且つより高く評價されてゐるといふ事情に基く所の、かくの如くして惹起された價值の増大による以外に、測定する方法は恐らくあり得ないのである。併し乍ら（一國の）富は常に必ずしも價值の増大に比例して増大するものではないことが認められるであらう。蓋し價值の増大は、時に（貨物）¹「生活の必需品、便宜品及び奢侈品」の現實の減少の下に於いても、起り得ようからである（註）。併しそれは、富の名の下に屬するものの單なる分量に比例して増加するものでもない、蓋しこの分量を組成する各種の物品は、それにその正當な價值を與へるが如くに社會の欲求及び能力に比例しないであらうからである。其の品質に關して最も有用な貨物も、若しそれが絶對的に過剰であるならば、密にその交換價值のみならず、更に其の全量迄社會の欲求を充たす其の能力をも失ひ、従つて其の一部分は其の富たるの性質を失つて了ふ。若し英蘭の道路及び運河が突然閉ぢられ破壊されて、爲めに財貨の一切の通過と交換とが妨げられるに至るならば、最初には貨物の何等の減少も起らないであらうが、併し直ちに價值と富との兩者の極めて驚くべき減少が起るであらう。大量の財貨は全然無用になる爲めに、

直ちにその價值を失ふであらう。そして他のものは特定の所に於いては騰貴するであらうけれども、而も（その地方に於ける）購買力の「一般的」缺乏によつて、騰貴は決して下落を相殺しないであらう。労働、「穀物」又は貨幣で測定された生産物の全交換價值は、大いに減少されるであらう。そして社會の富が最も本質的な損害を蒙ることは全く明かである。換言すれば社會の欲求は以前程には決してよく充たされないのであらう。

R註 これは私の意見であるが、併しマルサスの理論とは絶對に相容れないものである。六〇頁に於いて彼は曰く、「吾々がその上に望むものは、かゝる勞賃、所得、又は貨物がその所有者をして支配し得せしめるべき生活の必需品及び便宜品の分量を含意する所の、眞實交換價值と呼ぶべき、一種の或る測尺である。」（譯者註—第二章第一節の第一版の終）

一方の章句では吾々は價值は必需品及び便宜品の分量に比例すると告げられ、他方では吾々は價值の増大は必需品及び便宜品の現實の減少の下に於いても起り得ようと確言されるのだ。然らば一國の富は、部分的には其の労働によつて獲得される生産物の分量に依存し、又部分的にはそれに價值を與へるに至る如き現存の人口の欲求及び能力への（この分量）²「それ」の適應に依存するものであることがわかる。（それがその何れか一つのみによつては決定されないといふこと程確かなことはあり得ない。）

併し富と價值とが恐らく最も近き關聯を有する場合は、前者の生産に對する後者の「恆常的」必要にある。現實の事態に於いては、大なる力作による以外には大なる分量の富は獲得され得な

い。そして個人又は社會が、事物が獲得された時に、それに賦與する價值が、それを獲得する爲めに爲された犠牲を十分に償はない限り、かゝる富は將來は生産されないであらう。小海老取りや、蘆薈及び苺の採集や、單なる筋肉労働の或る他の力作に於ける如くに、労働のみが其の生産に關與するならば、この富は、採集された時の其の價值が、少くとも、其の採集が要費しただけの労働を支配しない限り、採集されず、又社會の欲求の何れかを充たす爲めに用ひられないであらうことは、明かである。

若し獲得せらるべき物の性質が、大多數の場合に於けるが如くに、資本の形に於ける前拂を必要とするならば、労働者によつてであらうと又は他の者によつてであらうと、この資本が何人によつて供せられようとも、この貨物は、社會による其の評價又は其の交換上の（内在）價值が、常に其の獲得の爲めに爲された労働及び其の他の物品の總ての前拂を代置するのみならず更に（同様に、かゝる前拂に對する）【資本の】通常利潤を支拂ふ（換言すれば、かゝる利潤に等しい、追加量の労働を支配する）程でない限り、生産せられないであらう。

従つて、現實の事態に於いて富の存在の（殆んど）唯一の原因と考へ得べきものは、明かに、貨物（に置かれた）【¹】價值であり（——それは）【又は】人々がそれを獲得する爲めに爲さんとする労働（又は労働の値）【及び其の他の物品】の犠牲である。そしてこの價值は、これ等の貨物がその採集又は生産に要費（した）【する】かも知れぬ現實の労働量とは無關係に、人類の欲求及び之等の欲求を充たす特定貨物の適應性に基くものである。常に總ての種類の富の生産に對

する大なる刺戟たるのみならず、更にそれが存在すべき形態と相對量との大なる規制者たるものは、この價值である。如何なる種類の富も、社會の或る部分が其の自然又は必要價格に等しき價值をそれに與へ、そしてそれを獲得する爲めにこの範圍迄犠牲を拂ふの能力及び意思の兩者を有さない限り、久しく市場に齎らされ得ない。若し社會の何人も其の供給のかゝる新條件に等しき價格にそれを評價しないならば、租税は貨物の生産を全然中止せしめるであらう。そして他方に於いて、貨物は、この價格に等しき價值をそれに與へる能力及び意思を有する者の（需要）【數】が引續き増大する限り、引續き量に於いて増大されるであらう。

略言すれば、貨物の市場價格は富の生産に於ける社會の總ての大なる運動の直接原因であり、そしてこれ等の市場價格は（労働に對する貨幣の比例が知られてゐる時には）常に明白に且つ明瞭に、貨物が交換される時及び所に於ける（内在的原因より生ずる）その交換價值を現はし、そして需要及び供給の現實の狀態が、或る特定物品に關して、（其の）通常の且つ平均的な狀態と異なる故にのみ、自然及び必要價格と異なるに過ぎないのである。

【讀者は云ふ迄もなく、價值又は交換上の價值なる語を用ひるに當つて、私は常に、その意味を、それに従つて私が本書の第二章に於いてそれを説明し且つ定義せんと努めた所の、擴大された、そして思ふに通常の且つ正確な、意味に、解せられ度いのであり、そして決して、生産に於いて使用せられた現實の労働量に専ら依存するといふ、リカードウ氏によつてそれが最近用ひられてゐる、限られた意味では（二版註）、ないことを、觀るであらう。この後の意味に解すれば、價值は確かに富

とかくも密接な關係を有つてゐない。異なる程度の肥沃度を有つ二國を比較する際に、又は農業國を製造業及び商業の國と比較する際に、それ等の相對的富は、生産に於いてその各々が使用した労働の比例とは極めて異なるであらう。そして確かに、或る貨物を生産するに必要な労働量の増大は、實に、決して其の増大に對する一刺戟ではないであらう。従つてこの意味に於いては富と價值とは極めて異つてゐるものである。」

一版註 リカアドウ氏は曰く (R註) (C. H. K. R. 333.) (譯者註——前掲譯書、二九五頁) 『總ての略に於て、それを生産するに骨折と労働との同一の犠牲を要する所の、その貨物のみが不變なのである。』こゝで『不變』なる語は何を意味するのであるか？ それは其の交換價值に於いて不變なる事を意味し得ない。蓋しリカアドウ氏は、骨折及び労働の同一の犠牲を要した貨物が互に交換されないことが極めて屢々あることを、自ら認めてゐるからである。交換上の價值の一尺度としては、この標準は、彼が反對せるそれよりも遙かにより可變である。そしてその他の如何なる意味にそれが解せらるべきかは、容易には云ひ得ない。

R註 私は其の價格が異り得ようことを認めた、併し私は、かゝる地位にある貨物は同一の自然價格を有ち従つて市場價值に於いても亦一致する不斷の傾向を有つ、と云ふ。蓋し自然價格は市場價格の大規制者であるから。

【若し價值なるものが、それが最も一般的に用ひられ且つそれに従つて私がそれを定義した所の意味に、解せられるならば、富と價值とは、確かに常に必ずしも同一ではないけれども、極めて近い關聯を有することがわかるであらう。そして富の測定を爲すに當つては、價值に關説することなくして量を考察することは、量に關説することなくして價值を考察すると同様に重大な誤謬である】

ことを、認めなければならぬのである。】

(リカアドウ氏は、思ふに、富と價值との明確な區別を爲さんと努めた、最初の注目すべき論者である。そしてこの點に於いて、彼は經濟學に對し疑問の餘地なき奉仕を爲した様に、私には思はれる。併し交換價值は生産に於いて現實に使用せられた労働の分量に専ら依存するといふ、交換價值に就いて彼が採る特有の見解の爲めに、彼はこの區別を實際よりも遙かに廣汎なものとして了つた。

(若し貨物の交換價值の大尺度が、彼の云ふが如きものであるならば、價值は生産の困難に専ら依存し、そして富を測定する其の能力は極度に不完全であらう。然るに、若し貨物の價值の尺度が、私が證示せんと努めた如くに、それが支配すべき労働の分量であるならば、かゝる尺度は極めて遙かにより、包括的であり、そして富の尺度に遙かにより、接近するものであることが、見出されるであらう。實際富と價值とは均しい步調で相携へて進むことは稀であるけれども、而も或る國に於ける全價值に就いて正しい見解を採る時には、富の生産に於いて最も有效な、永續的性質の總ての一般的原因は、又價值の生産に於いても最も有效なことが見出され、そして一國の全生産物に關しては、一國の富でさへが決してそれが生産した貨物の分量の増大に比例しないことを認めなければならぬ所の一般的供給過剩の一時の場合を除けば、分量が價值を増大せしめ得ないことは稀である、と安全に云ひ得よう。

(種々なる國民を相互に比較せんが爲めに、其の富の或る測定を爲し得るといふことは、確か

に望ましいことであらう。其の各々の生産物の分量を——其の價值に觸れることなくして——測定することによつて、このことを爲さんとする企ては、全く無効であらうが、蓋しフランスに於ける葡萄酒の分量をロシアに於ける獸脂の分量と比較することによつては、又は英蘭に於ける錫の分量を合衆國に於ける原棉の分量と比較することによつては、何事も推論され得ないであらうからである。

(他方に於いて、若し吾々が、現實に貨物に仕上げられた直接労働及び蓄積労働によつて決定される價值の尺度を、吾々の富の尺度として採るとしても、吾々は殆んどよりよいものを有つたことにはならないであらうが、蓋し土壤の優れたる肥沃度より得られた總ての富、特産物、及び固定資本及び流動資本より生ずる多額の利潤は、直ちに計算から除外されるであらうからである。(併し、若し吾々が、一國の富の大きき尺度として、その國の全生産物が支配又は交換すべき其の標準労働の分量を採るとするならば、問題は極めて異なるであらう。この尺度は、種々なる國が、其の特産物、自然的なるか後天的なるかである其の土壤の優れたる肥沃度、及び一般利潤率か又は其の固定資本及び流動資本の額かによつて齎らされる其の多額の利潤、等により得られる總ての利益を、含むであらう。その時に於ける労働及び諸貨物の現實貨幣價格に従つて、全年生産物がそれと交換される、標準労働の分量は、その國の總年収入の概略の測尺であると考へられ得ようが、他方それを生産するに前拂せられた直接労働及び蓄積労働以上に出づるこの價值の超過は、時にその純収入と呼ばれてゐるもの、又はかゝる前拂から得られる地代、利潤及び租税

の全額の、概略の測尺であらう。

(種々なる國をかくの如くして其の生産物の價值によつてためして見るならば、それは一般に、其の相對的富に就き、最も注意深き且つ賢明な實際的觀察によつて、得らるべき、測定に、殆んど全く一致するであらう。

(土壤が悪くして多數の人口が土地で使用されてゐる農業國は、貧しいものと普く考へられるであらう。そしてこゝに提議した測尺によつてためして見ると、其の生産物の價值が第一に其の面積に比較して小であることがわかるであらう。そして第二に、それが支配すべき標準労働の分量は、生産に使用せられた労働の分量を大いには超過しないであらう。

(殆んど全く農業をやつてゐるが併し豊かな土壤を有つてゐる國は、上に述べた國よりも、同一の面積の上により大なる總収入とより大なる人口を有つてゐることが、わかるであらう。そして更に、それが、多數の僕婢と従者とを維持してゐる富める土地所有者の團體を有つてゐることが、觀られるであらう。他方、國家は確かに其の大きいさとの比例では大きな武力を維持する手段を有つてあらうから、君主は恐らく富み且つ有力であらう。それは、其の純生産物が比較的に多額であるのと、其の生産物の獲得に現實に使用せられた標準労働に比較しての、その生産物が支配すべき標準労働の分量の超過が大なることによつて、他を抽んでゐるであらう。

(殆んど専ら製造業及び商業をやつてゐる國は、一般に面積が小であり、そして比較的の面積に多額の生産物と人口とを有つてゐることが一般に觀られるであらう。併し、閑暇となつて現れ

る所の、かの富と純生産物との外貌は、殆んど見られないであらう。そして右に提議せられたる準尺は正確にこの結果を示すであらう。この準尺によれば、この國の富は其の面積に比較して極めて大であることがわかるであらう。併し同時に、生産物の價值が支配すべき標準労働の分量は、考察せられた第二の場合程は、それが現實に使用した労働の分量を超過しないことが、わかるであらう。

(第四の場合として、若し吾々が、よく耕作された極めて豊かな土壤を有ち、そして同時に高度に商業及び製造業をやつてゐる、大きな國を想像するならば、かゝる國は、凡ゆる觀察者の眼に、富の總ての考へ得る外貌を、大なる土地財産、大なる公共機關、大なる公收入、等々を、提示するであらう。そして右に提議せられたる準尺ではかつて見ると、それは疑ひもなく極めて富んでゐるといふ結果が出るであらう。殆んど全く商業及び製造業に依存し、そして主として都市から成る、國家は、大いさが小さいから、恐らく、今述べてゐる様な國は、オランダ、ハンブルグ及びヴェニスに類似する諸國家の如き小面積にかくも大なる生産物と富とを保持することはないであらうが、併しそれは人口に比較してはより富んでゐるであらう。若し、其の土壤が肥沃でありそしてそれを耕す熟練がよいので、小なる比例の人民がそれに使用され、そして社會の嗜好が、僕婢の奉仕よりも寧ろ物質的便宜品及び奢侈品を獎勵する底のものであるならば、多額のかゝる物品並びに粗生産物は、特に多くの固定資本及び進歩せる機械を使用する場合には、人口に比較して異常に高い價值を有ち得よう。かゝる事情の下に於いて、全生産物の價值が、そ

の時に於ける農業家族の通常の稼ぎ高に従つて測定せる、生産的労働に現實に従事せる國內の家族數の、三倍又は四倍の労働を支配する底のものであり得ようことは、實際考へ得ることである(三版註。)

二版註 こので行つた測定は勿論全く推量によるものでなければならぬ。併し若し土壤が極めて肥沃であり、そして商業及び製造業の價值の大きな部分が固定資本の利潤であるならば、この推量は恐らく事實を超えるものではない。現在の英國に於いては、年生産物の價值は、若し普通の農業労働の價格で支拂を爲すならば、現實に國內に存在する家族數の二倍を、購買するであらう。

(貨物が支配又は購買すべき労働は、全く一尺度として用ひられたものであり、そして國內で使用されてゐる労働の現實の分量とは何の關係もないことは、長さの一千呎が長さを測定すべき場所たる都會に存在する一呎の物差の數と何の關係もないのと、同様であることは、直ちに了解されるであらう。

(價值の尺度が富の總ての變動を満足に測定し得る、と述べる積りもない。それが出来ないことが認められなければならぬ若干の點がある。第一に、それは社會の労働階級の富を正確に表現しないが、これは極めて重要な缺陷である。第二に、それは貴金屬の相對價值に留意しないから、それは、一國の労働が他の國の労働及び富を支配するより優れたる能力を有つこともあらうのに、その能力を表現しない。第三に、それは、熟練及び機械により得られた奢侈品及び便宜品の富の程度を、十分には指示しない。これ等の事情の第一のことを考へて、富の測定に於いて、労働

價値の尺度に代へて穀物と労働との中項を採るのが有用であらうか否か、又その第二及び或る程度では第三のあることを考へて、内國労働のみに觸れるのに代へて部分的には外國労働に觸れるのが有用であらうか否かは、正當に考慮を要する問題である（三版註三）。恐らくかくの如くすれば、正確の點では十分の利益を得ずに、便宜と單純性とが失はれるであらう。併し、價値の尺度が富の尺度たらしめられ得ようと否とに拘はらず、價値に觸れることなくしては富の尺度に接近することは出來ず、そして價値に關する正しい見解を採る時には、それは多くの點に於いて富と極めて密接な關聯を有つので、爲めに價値の尺度は、吾々をして、吾々が互に比較しようと思ふ種々な國民の富に關する判斷を爲さしめるに、實際役立ち得るものなることが、見出されるのを、認めなければならぬ。そして吾々は前以て其の正確性が最も失はれ勝ちな點を知り、從つて適當な斟酌をすることが出来るのであるから（三版註三）、吾々はこの尺度を用ひても何等かの本質的な誤りに陥ることは殆んどないであらう。

二版註一 これは本書の前版で私の爲した所である。

二版註二 アメリカ合衆國の富を殆んど何れの他の國とでも比較するに當つて、吾々が、労働者に報酬として與へられる物の分量の大なること、及び労働の貨幣價格の高いこと又は貨幣の價値の低いこと——それはアメリカの労働者をしてかくも多くの外國生産物を支配し得せしめるものである——の兩者を、斟酌しない限り、吾々は其の富を過少評價することになるであらう。

英國を大陸の諸國と比較するに當つては貨幣の價値の低いことを斟酌するだけで十分であらう。

（第二篇）

（第一章）【第七章】富の増進【の直接原因】に就いて

第一節 この特殊研究目的の説明

或る研究にして、生産力が依然比較的減少せず、又は少くとも生産物及び人口の大なる且つ豊富なる増大を與へるであらう時に、種々なる國に於ける富の増進を實際上妨げ、且つ停止せしめ、又はそれを極めて緩慢に進行せしめる所の、原因を辿る研究程、興味深く、又は其の重要性よりして注目に値するものは、殆んどない。

以前の著作に於いて（註、私は、一國の人口を實際上其の現實の供給の水準に迄抑止する原因を、辿らんと努めた。かゝる供給に主として影響を及ぼし、又は生産力を働かして富の増大なる形を採らしめる所の、原因は何であるかを、證示することが、今や私の目的である。

註 Essay on the Principle of Population.

諸國民の富に影響を及ぼす第一次的の且つ最も重要な原因の中には、疑ひもなく、政治學及び倫理學の項に屬するものが入られなければならない。或る程度のそれなくしては個人的勤勞に對する何等の刺戟もあり得ぬ所の財産の安固は、主として、一國の政治組織、其の法律の優越性

及び其の運用法に、依存する。そして規則正しい努力並びに一般的に正直な品性に最も好都合であり、従つて又富の生産と維持とに最も好都合な習慣は、主として、同一の諸原因並びに道徳的及び宗教的訓育に依存する。併し乍ら、かゝる原因は重要であり且つ有効ではあるけれども、それを十分に立入つて論ずることは今私の企圖する所ではない。私は唯主として富の増大のより直接的な且つ手近な原因を研究せんとするものであり、その原因なるものがかゝる政治的又は道徳的源泉より發生せるものであらうと、その他のより明かに且つ直接に經濟學の領域にあるものより發生せるものであらうとを、問はないのである。

財産にそれが與へる安固の程度に於いても、又は人民の受ける道徳的及び宗教的訓育に於いても、本質的には異なる所なくして、而も殆んど同一の自然的能力を有しつゝ、富の増進の程度を著しく異にするといふ國が、數多いことは、明かに眞實である。このことを説明し、そしてヨオロッパの、又は世界の、種々なる國を、すなはち大なる生産力を有しつゝ比較的貧しい國と、小なる生産力を有しつゝ比較的富める國とを、吾々が觀察する度に、屢々吾々の注意を牽かざるを得ない或る現象の、若干の解決を與へるといふのが、この研究の主たる目的である。

若し繰返しての暴力と頻々たる生産物の破壊とを蒙らぬ或る國の現實の富が、一定の時期の後、或る程度に於いて其の富の生産力と比例しないならば、この不足は繼續的生產に對する適當な刺戟の缺乏より起つたものに相違ない。然らば吾々が考察すべき實際的問題は、富の繼續的創造及び増進に對する最も直接的な且つ有効な刺戟物は何であるか、といふことである。

第二節 富の繼續的増大に對する一刺戟と考へられ たる人口の増大に就いて

多くの論者は、人口の増大は富の増大に必要な唯一の刺戟であり、それは蓋し、人口は消費の大なる源泉である故に、彼等の意見によれば必然的に生産物の増大に對する需要を維持し、それは當然に供給の繼續的増大を伴ふであらうから、といふ意見である。

人口の（繼續的）「永續的」増大が需要の増大の有力にして必要な要素であることは、極めて容易に認められるであらう。併し人口の増大のみが、又はより正當に云へば、生活資料の限界を緊迫する人口の壓力が、富の繼續的増大に對する有效なる刺戟を與へるものではないことは、啻に理論上明白なるのみならず、又普遍的經驗によつて確證せられる。若し缺乏のみが、又は生活の必需品及び便宜品を所有せんとする勞働階級の願望が、生産に對する十分なる刺戟であるならば、ヨオロッパには、又は世界には、其の生産力以外に其の富に對する實際的限界を見出した國家はなく、そして土地は今の時代までに恐らく、如何に少く見ても、現在其の表面に支持されてゐる十倍の人口を收容してゐたことであらう。

併し有效需要の性質を知悉する者は、私有財産權が樹立され、そして社會の欲求品が勤勞と物物交換とによつて供給される場合には、生活の必需品、便宜品及び奢侈品を所有せんとする如何な

る個人の願望も、如何に強烈であつても、彼れの所有する何物かに對する有償需要が何所にもないならば、それ等の生産には何等役立つ所なきを、十分に知るであらう。労働をその唯一の所有品とする者が生産物に對する有効需要を有するか否かは、彼れの労働が生産物の處分權を有つ者によつて需要せられるか否かによるものである。そして生産物が、それが獲得せられたる時に、それを獲得せる労働よりもより大なる價值を有たない限り、生産的労働は決して（利潤を得る目的を以て）需要せられ（得）ない【であらう】。使用せられたる人々によつて惹起されたる其の生産物に對する需要があるといふだけでは、如何なる種類の産業にも新たな人手は用ひられ得ない。如何なる農業者も、彼れの全生産物がその際には市場に於いて彼が彼れの追加労働者に支拂つた額と正に等しいだけの増大せる價格で賣れるであらうといふだけでは、十人のより以上の人の労働を監督するの勞をとらないであらう。其の生産により以上の人數を使用することを保證する爲めには、新たな労働者によつて惹起される需要に先立つて、且つこれから獨立して、問題の貨物の需要供給の前以ての状態の中に、又は其の價格の中に、或る物がなければならぬのである。

人口の増大は勞賃を引下げ、そしてかくして生産費を減少することによつて、資本家の利潤と生産物に對する刺戟とを増大せしめるであらう、と恐らく言はれることであらう。この種の或る一時的の結果は疑ひもなく起りもしようが、併しそれは明かに極めて嚴重に限られたるものである。（眞實）勞賃の下落が或る點以上に達する時には、必ずや、實に人口の増進を停止せしめるの

みならず、更にそれを減少せしめずには置かない。そしてこの點に達する以前に、より以上の人數の労働によつて惹起された生産物の増大は、（資本家をしてより少い労働を使用するに決せしめる）【勞賃の下落を相殺して餘りあり、且つかくして資本家の利潤とより多くの労働を使用する能力と意思とを増加せしめず減少せしめて餘りある】程に、其の價值を引下げて了つて居（り）、そして利潤を低減して了つて居る。【る、といふことに恐らくなるであらう。】（必要品の生産者は、確かに、この場合に於いて、より多數の労働者の支持に必要な財本を獲得し得ようけれども、而も、若し必需品に對する有効需要が十分に充たされ、そして不生産的消費又は個人的奉仕に對する適當な嗜好が樹立されなければ、如何なる利益の誘因も、生産者を誘つて、このより多數の労働者に對する有効需要を爲さしめ得ないであらう。）

然らば理論上、人口の増大は、追加労働量が欲求せられない時には、間もなく職業の缺乏と雇傭せられたる者の受ける所の少きとによつて妨げられ、そして生産力に比例せる富の増大に對する必要な刺戟を與へないであらうことは、明かである。

併し若しこの問題に關する理論に就いてなほ何等かの疑問が残るとしても、それは確かに經驗に訊ねることによつて消散せられるであらう。世界の如何なる國民に吾々の眼を向けても、殆んど常に上述せることの驚くべき確證が見られるのである。殆んど普遍的に、吾々の知る總ての國家の現實の富は、其の生産力に及ばざること甚だ大である。そしてかゝる國家に於いては「殆んど普遍的に」人口のみから生ずる刺戟が最大なる場合に、すなはち人口が（現實の）生活資料の

限界を最も緊密に壓迫してゐる場合に、富の最も緩慢な増進が（屢々）起るのである。吾々が富への刺戟としての人口のみの及ぼす實際的結果を判断し得る唯一の正當な方法が、實に唯一の方法が、勞働の維持に充てられた財本^{フナド}以上に出づる人口の過剰によつて缺乏の刺戟が最大なる國々を見るにあるは、全く明かである。そして若しなほ大なる生産力を有するこれ等の國々に於いて富の増進が極めて緩慢であるならば、人口のみでは富に對する有效需要を創造し得るものではないといふことの、經驗が吾々に恐らく與へ得る總ての證據を、吾々は確かに有つことになるのである。

人口の（大きな且つ繼續的）【現實の且つ永續的】の増大を假定することは、願て他を云ふに歸する。吾々は同様に同時に富の増大を假定することも出来る譯である。蓋し人口の（かゝる）【現實の且つ永續的】の増大は、それに比例する、又は殆んど比例する、富の増大なくしては起り得ないからである。問題は實際は、人口増加に對する刺戟が、又は【生活資料の限界を緊密に壓迫する程の】其の支持²に充てられた【爲めの】財本^{フナド}を超過して増大せんとする人口の自然的傾向ですが、そのみで、富の増大に對する適當なる刺戟を與へるであらうか否か、といふことである。そしてこの問題は、スペイン、ポルトガル、ポウランド、ハンガリー、トルコ、その他多くのヨオロッパ諸國、並びにアジア及びアフリカの殆んど全部、及びアメリカの大部分が、明かに否定的に答へるのである。

第三節 富の増大に對する一刺戟と考へられたる、

蓄積、又は資本に追加せんが爲めの收入よりの貯蓄に就いて

富の増大に對する適當な刺戟としての單なる人口に反對する者は、一般に、萬事をして蓄積に依存せしめんとしてゐる。資本の繼續的増大なくしては富の永續的且つ繼續的増大が起り得ないことは、確かに眞實である。そしてこの増大は、直接の消費に充てられもすべかりし貯財^{チツサイ}より貯蓄し、そしてそれを利潤を産むべきものに追加すること、換言すれば收入を資本に轉換すること、以外の何等かの方法によつて行はれ得る、と考へる、ロオダデル卿に同意することは私は出来ないのである（註）。

註 See Lord Lauderdale's chapter on Parsimony, in his Inquiry into the Nature and Origin of Public Wealth, ch. iv. p. 198. 2d edit. ロオダデル卿は、或る他の論者が蓄積を擁護するに極端に奔つたと同じ程に、それを排撃するに極端に奔つた様に思はれる。極端に奔るといふこの傾向は、正に私が（比例に依存することかくも多き）經濟學に於ける誤謬の大なる源泉（の二つ）と考へる所のものである。

併し吾々はなほ、一般に一國民を蓄積に向はしめる事態は何であるか、及び更に、その蓄積をして最も有効ならしめ、且つ資本及び富のより以上の且つ繼續的の増大に導く傾向ある事態は、何であるか、を研究しなければならない。

節儉によつて、或る國の生産物中の通常以上に遙かにより、大なる部分を、直ちに、生産的労働の維持に向けることは、疑ひもなく可能である。そして（このことが爲されたと假定して）かく生産的に使用せられる労働者が（個人的奉仕に従事する者）【不生産的労働者】と同様に消費者であり、そして労働者の關する限りに於いては、消費又は需要の減少は少しもないであらうことは、全く眞實である。併し前述せる如く（R註）、生産的労働に使用せられたる（労働）者によつて惹起された消費及び需要は、そのみでは、資本の蓄積と使用とに對する誘因を決して與へるものではなく、そして資本家自身、並びに地主其他の富めるものに關して云へば、彼等は、假定によれば、節儉家であり、その通常の便宜品及び奢侈品を減じてその収入から貯蓄をなし、そしてその資本に追加するに、一致してゐるのであつた。かゝる事情の下に於いて、生産的労働者の數の増大によつて得られたる貨物の分量の増大が、恐らくは其の價値を（投資の價値）【生産費】以下に下落せしめ、又は少くとも貯蓄の能力も意思も著しく減少せしめる如く（²）に利潤を低減する）【¹】價格の下落を見ずして、購買者を見出す（ことは、不可能である。）【²】べきものと想像することが、どうして出来るのか、と私は問ひ度いのである。】

R註 或る特定分量の富の生産に使用せられた者により惹起された消費及び需要は、若し彼等が生産された貨物の全部を得、そしてそれに對して單にそれを生産せる労働を與へるに過ぎぬとするならば、それを生産する爲めの十分な誘因では決してあり得ない。併し彼等が其の八分の七を取り、そして彼等の雇傭者が八分の一を保持し、この雇傭者がこれで再び五人又は一〇人の追加の人間を使用し、この人間が再び其の生産する貨物の八分の七を取つて、雇傭者に翌年追加労働を使用する能力を残し與へる、と假定しよう。最後に耕作せられた土地が耕作者によつて消費せられるよりもより多くの食物を産出する間は、かゝる蓄積は進行し得ないであらうか？

最後に耕作せられた土地がさうではなくなる時には、如何なる制度に基づいても總ての蓄積は終りを告げる。併し若し社會が、地主、農業者、必要品の製造業者、及び労働者のみから成るならば、蓄積は、人口が十分急速に増大することを唯一の條件として、この點まで進行し得るであらう。若し資本が人口にとつて餘りに急速に増大するならば、彼等は、生産物の八分の七を支配せずして、百分の九十九を支配し、かくてより、以上の蓄積を爲さんとする誘因はなくなるであらう。若し凡ゆる人が、彼れの差迫つた欲求に必要なものを除いて彼れの收入の凡ゆる部分を蓄積する氣になるならば、かゝる事態が生ずるであらうが、蓋しそれは、人口の原理が、その時存在すべき程大なる労働者に對する需要を充たすに足る程、有力ではないからである。併し労働者の状態はその時には最も幸福であらう、蓋し、供給は限られて居り且つ比較的遅い率で増大するのには需要は殆んど無限にある所の貨物を賣ることが出来る彼れの状態以上に繁榮せる状態があり得ようか。このことの總ては既に屢々指摘せられた一般原理に一致するものである。利潤は、勞賃が高いから、低いのであり、そして引續き低いのは單に人口が増大しそして労働が再び下落するまでのことに過ぎないであらう。

マルサス氏は問ふ、『生産的労働者の數の増大によつて得られたる貨物の分量の増大が、恐ら

くは其の價值を生産費以下に下落せしめ、又は少くとも貯蓄の能力も意思も著しく減少せしめる如き、價格の下落を見ずして、購買者を見出すべきものと想像することが、どうして出来るのか？』私はこれに答へる、貯蓄の能力と意思とは著しく減少せしめられるであらう、蓋しそれは、農業者又は製造業者に割當てられる生産物の分前に依存しなければならぬから。併し、他方の問題に關しては、貨物はどこで購買者を見出すであらうか？ 若しそれが、それを購買する能力を有つ者の欲求に適合するならば、それは必ずや購買者を見出し、而も少しも價格の下落を生じないで見出すであらう。

若し一千個の帽子、一千足の靴、一千着の上衣、一千オンスの金が生産されるならば、それ等は何れも相互に對する相對價值を有ち、そして若しそれ等が社會の欲求に適合してゐるならば、その最大部分が労働者に歸屬しようとは又は彼等の雇傭者に歸屬しようとは、この相對價值は維持されるであらう。

若し勞賃が低いならば、僅かにその半ばが恐らく労働者に與へられるかも知れない。若し高ければ四分の三かも知れない——併しそれが親方の手中にあらうと雇人の手中にあらうと、それは異なる價值を有たないであらう。

若し貨幣で五〇〇磅と、五〇〇個の帽子、五〇〇クワタアの穀物、等々とが、親方の手中にあり、そして殘額が労働者の手中にあるならば、それ等は、六〇〇磅の貨幣と六〇〇の凡ゆる他の貨物とが親方の手中にあり、そして殘額が労働者の手中にある場合と、同一の相對價值を

有つであらう。これ等の分配の中の何れが起るかは資本と勞働との比例に依存するが、併しその何れであらうと、若し貨物がそれを支配し得る者の欲求に適合してゐるならば、如何なる影響も價格の上には生じ得ない。若しそれが彼等の欲求に適合しないならば、生産者の利益はこれを適合する様にする。然らば、私がこゝで述べた所からして、若し生産せられた貨物が購買者の欲求に適合するならば、それは極めて豊富に存在して爲めに市場を見出し得なくなるといふことはあり得ない、といふことになる。

誤ちを犯して需要に適合しない貨物を生産することもあらう——かゝるものに就いては供給過剰があり得よう。それは其の通常價格では賣れないこともあらう。併しその時には、これは誤ちによるものであり、そして生産品に對する需要の缺乏によるものではない。生産された凡ゆる物には保有者がなければならぬ。それは親方であるか地主であるか又は労働者であるかである。貨物を所有せる者は、それが誰であらうとも、必然的に需要者であり、彼はその貨物を自身で消費せんと望む——その時には購買者は要らない——か、又は彼はそれを賣り、そしてその貨幣で或る他の物——これは彼によつて消費せられるか、又は將來の生産に役立てしめられるかである——を購買するか、である。彼が所有する貨物は彼に對しこのことを成就し又はしないであらう。若しそれが成就するならば、目的は達せられ、そして彼れの貨物は市場を見出したのである。若しそれが成就しないならば、それは何事を證明するか？ 彼が彼れの手段を彼れの目的に良く適應せしめなかつたことを、彼が誤算を爲したことを。例へば彼は綿製

品を欲求し、そして彼はそれを得る目的で毛織布を生産した。綿製品は市場にあるか又はないかである——若しあるならば、その保有者は唯或る他の貨物を購買する目的でそれを(譯者註—Tomの誤記)賣らうと望む——彼は毛織布を欲求しないが、併し絹製品、リンネル、又は葡萄酒を欲求する——このことは直ちに、毛織布の保有者が絹製品を手に入れる手段を誤つたことを示すものである、彼は絹製品、リンネル又は葡萄酒を生産すべきであつた。若し彼がさうしてゐたならば如何なる貨物の供給過剰も起らなかつたであらうが、事實は確かに、一つの貨物の、すなはち毛織布の、供給過剰が起り、そして恐らくは二つの貨物のそれが起る、蓋し綿製品は他の何人も要求しないかも知れぬから。併し市場には綿製品は何もないかも知れない、その時にはそれを欲求する者はそれを得る爲めに何を生産すべきであらう。何でもないので、若し彼がそれを(譯者註—Tomの誤記)購買し得る手段たる貨物がないならば——これは最も過大な假定であるが——彼は自分の欲求しない毛織布を生産する代りに、自分の欲求する綿製品を自ら生産することが出来る。私が讀者の心に銘記したいことは、特別の害悪たるものは常に、生産された貨物が人類の欲求によく適應しないことであり、貨物の豊富なることではない、といふことである。需要は單に購買の意思及び能力によつて制限せられるに過ぎない。

貨物を有つ者は何人であらうと消費する能力を有つて居り、そしてその職業を分つのは人類の適性であるから、個人は他の貨物を購買する目的で一つの貨物を生産するであらう。——かかる交換は相互に便宜であるが、併しそれは絶対に必要な譯ではない、蓋し凡ゆる者は彼れの

基金と彼れの支配し得る労働とを、自分と彼れの労働者とが消費しようと思ふ貨物そのもの、生産に使用することが出来るからである。この場合には市場はなく、従つて供給過剰はないであらう。親方と雇人との間の生産物の分配と、——それが終局的に報酬として與へられる者の間に行はれる交換とは、別物である。

私はかくの如く立入つてこの問題を検討したが、蓋しそれはマルサス氏の著作に於いて遙かに最も重要な論題を成してゐるからである。若しこの問題に關する彼れの見解が正しいならば——若し貨物が、それを購買し消費せんとする志向がなくなる程増加せられ得るならば、疑ひもなく、彼がためらひ乍ら推奨してゐる救済策は極めて正常なものである。若し生産せられた貨物を消費し得る人々が、自らそれを消費せず、又再生産の目的で他人をしてそれを消費せしめないならば、若し需要にとり必要な二つの事たる購買の意思と能力との中その意思が缺けて居り、その結果として取引の一般的沈滞が生じたならば、吾々はマルサス氏の忠言に従ひ、そして政府をして人民の不足を供給せしめるの外はない。その場合には吾々は國王に、其の現在の經濟上の諸大臣を罷免し、彼等に代へるに、公共の浪費と經費とを促進することによつて國の最善の利益を最も有効に促進すべき他の者を以てすることを、訴願すべきである。吾々は生産者の國民であり、そして消費者は吾々の間に殆んどなく、そして害悪は終に、若し議會が大臣が直ちに有效な經費案を採用しないならば吾々は取り返しのかね程悲惨となる程に、達してゐる様に思はれる。

或る極めて有能なる論者の考へる所によれば、特定貨物の供給過剰は容易にあり得ようが、貨物一般の供給過剰はあり得ない。蓋しこの問題に就いての彼等の見解によれば、貨物は常に貨物と交換せられる故に、その一半は他の一半に市場を供し、そして生産はかくの如く需要の唯一の源泉である故に、一物品の供給の過剰は單に或る他のものの供給の不足を證するに過ぎず、従つて一般的過剰は不可能であるから、といふのである。セエ氏は、經濟學に關するその名著に於いて、實に、一貨物の消費は、それを市場から取去ることによつて、需要を減少せしめ、そして一貨物の生産はそれに比例してそれを増大せしめる、と述べるにすら至つてゐる。

併し乍ら(一般的に適用せられた)この學説は、「それが適用せられたる範圍に互つて」全然無根據であり、且つ供給及び需要を左右する大原理に完全に矛盾するものと、私には思はれるのである。

貨物は常に貨物と交換せられるといふことは、事實上、決して眞實ではない。多量の貨物は、(註) (生産的労働か個人的奉仕か)【生産的か不生産的かの労働】と直接に交換せられる。そしてこの貨物量が、それと交換せらるべき労働と比較して、過剰の爲めに價值が下落し得ようことは、或る一貨物が、労働か貨幣かに比較して、供給の過剰の爲めに價值が下落するのと正に同様であることは、全く明かである。

R註 貨物が、より以上の其の生産に對する如何なる誘因も與へない程に、労働で測定して、其の價值を下落せしめる如くに、労働に比較して豊富に存在することもあらう、といふのは全く

眞實である。その場合には、労働は多量の貨物を支配するであらう。マルサス氏が後に否定するのはこの點である。若しマルサス氏が、貨物をして労働に於いて破滅的に低廉ならしめる如き其の供給過剰があらう、といふ意味ならば、私は彼に同意するが、併しこれは單に、労働は極めて高く、爲めにそれは利潤に屬すべき總ての基金を吸収し、従つて資本家は引續き蓄積することに何の利益も有たなくなるであらう、と云ふだけのことである。併し労働者の地位はどうなるであらうか？ それは悲惨であらうか？

假定された場合に於いては(註)、明かに、(以前には個人的奉仕に従事してゐた者)【國の不生産的労働者】が、資本の蓄積によつて、生産的労働者に轉換せられたが爲めに、異常の分量の總ての種類の貨物が市場にあるであらう。然るに労働者の數は全體として同一であり、そして地主及び資本家の間に於ける消費の爲めに購買せんとする能力及び意思は假定によつて減少されてゐるのであるから、貨物の價值は労働に比較して必然的に下落し、延いては利潤を(極めて著しく)【殆んど無に達するまでに】低め、そして暫くの間より、以上の生産を妨げるに至るであらう。併しこれこそが正に供給過剰なる語の意味する所であり、而もこの場合それは明かに一般的であつて部分的ではないのである。

R註 何人もこれを否定しない。それは労働價值に於いて下落するであらうが、併し貨幣價值に於いてではない。

利潤に關するこの新學説の創始者たる、セエ氏、ミル氏(註)、及びリカード氏は、この問題

に就いて彼等の採る見解に於いて、或る根本的誤謬に陥つてゐる様に、私には思はれる。

註 ミル氏は、一八〇八年に著されたスペンス氏への答辯に於いて、貨物は單に貨物によつて購買せられるに過ぎず、そしてその一半は常に他の一半に對し市場を供する筈であるといふ學說を、極めて廣汎に述べてゐる。前の章に於いて言及せる Supplement to the Encyclopaedia Britannica に於ける Corn Laws に関する有能且つ有用な論文の筆者は、同一の學說を餘す所なく採用してゐる様に思はれる。(これ等の諸論者は、需要は常に價值によつて決定されそして供給は分量によつて決定されるといふ、疑ひもなく眞實なることに、氣付いてゐる様に思はれない。二ブシエルの小麦は供給に關しては一ブシエルの二倍の分量である。併し多くの場合に於いて、二ブシエルは一ブシエルだけの需要を爲さないであらう。)(譯者註——このミル氏とは勿論ジェイムズ・ミルのことである。)

第一に、彼等は、貨物を以て、云ふ迄もなく消費者の數及び欲求に關與せしめられなければならない所の消費物品ではなく、恰もそれ等の比例が比較せらるべき斯々の數學上の數字又は算術上の記號であるかの如くに、考へてゐるのである。

若し貨物が單に (R註) 相互に比較せられ且つ交換せらるべきであるならば、然らば實に、それが總てその適當な比例に於いて如何なる程度迄増加せしめられようと、それが引續き互ひに同一の比較價值を有すべきことは、眞實であらう。併し若し吾々がそれを、(それを生産する手段及び) 消費者の數と欲求とに比較するならば——これは吾々の確かに爲すべきことであるが——然らば數が比較的に停止して居り (又は) 『そして』 欲求が節儉によつて減少してゐるのに生産物が大いに増大することは、必然的に勞働で測定せられた價值を大いに下落せしめなければならず、その結果、同一の生産物は、假令以前と同一分量の勞働を要費したとしても、最早同一分量を支

配せず、そして蓄積の能力と蓄積せんとする誘因との兩者は甚だしく妨げられることであらう。

R註 私は、消費者の欲求が一般に節儉によつて減少される、といふことを否定する——それは消費力と共に他群の消費者に移轉されるのである。私は、資本家の蓄積の能力と誘因とが妨げられるであらうことを、認める。

註 私は、人口がそれを使用すべき基金と同一の速度で増大しないものと假定して、上の如く否定し且つ承認するのである。(譯者註——この註は R註の續である。)

有效需要なるものは (R註) 一貨物を (同一分量の勞働を要費した) 他の貨物と引換へに提供することに外ならぬ、と主張せられてゐる。併しこれが有效需要なるものに必要なる總てであるか? 假令各貨物は、其の生産に於いて、同一分量の勞働及び資本を要費し、そしてそれは交換に於いて相互に正確に等價であるとしても、而も何故に兩者は、それが要費せる以上の勞働を支配せず、又は單にそれを殆んど越さない程しか支配しない程 (換言すれば利潤は何も産しない程) に多量にはなり得ないのであるか、そしてかうなるとすればそれに對する需要は有效であらうか? それは其の繼續的生產を刺戟するが如きものであらうか? 確かに然らず。兩者の相互の比率は變化してゐないかも知れない。併し社會の欲求に對するそれ等の比例は、[地金に對するそれ等の比例は] として『國の内外の』勞働に對するそれ等の比例は、極めて著しき變更を蒙つてゐることであらう。

R註 若し私が一クヲタアの穀物に對し一オンスの金を與へるならば、これ等の貨物が交換上相

互に等價であることをマルサス氏は認める。併し彼は問ふ、『何故にそれ等兩者は、それが要費せる以上の労働を要費せず、又は單にそれを殆んど越さない程しか支配しない程に、多量にはなり得ないのであるか？ それに對する需要は有效であらうか？ それは其の繼續的生産を刺戟するが如きものであらうか？』私は、マルサス氏と共に、確かに然らず、と答へる。併しこれは論點であるか？ これは單に、労働が諸貨物に比較して極度に高價な時には、利潤は蓄積に對し何の誘因をも與へない程に低くなるであらう、と云ふことでしかない。誰がこの命題を否定しようか？ マルサス氏の本來の問題はかうである、若し資本が蓄積されそして多量の貨物が生産されるならば、それは市場に於いて互ひに自由に交換されないであらう。それに對する需要はないであらう、と。何等かの二命題でこの二命題よりもより相違してゐるものがあり得ようか。貨物が極めて豊富であり爲めに多くの労働を支配しないからといつて、人民に課税しそして政府の経費を増大することが、貨物の繼續的生産を確保する爲めに必要な唯一物たる、利潤を引上げるであらうか？

それに使用せられたる労働に比例して通常よりもより、高い交換價値を有する所の、市場に投ぜられたる一新貨物が、正に需要を増大せしめるに至るものなることは、容易に認められるであらう。蓋しそれは、單なる分量の増大ではなく、その生産物が社會の嗜好、欲求及び消費によりよく適合すること（²）による價値の増大）を、意味するからである。併し（^{R註}）この種の貨物を製造又は獲得することは著しく困難なことである。そしてそれは確かに資本の蓄積と貨物の増大とに、

自然的且つ必然的に隨伴するものではなく、かゝる蓄積と増大とが、消費の節約により、又は正に需要（と價値と）の要素たる嗜好及び欲求の耽溺の抑制により、齎された時には、別してさうである。

R註 マルサス氏は『消費の節約、及び正に需要の要素たる嗜好及び欲求の耽溺の抑制』といふことを云つてゐる。全論點はこの美しい言葉に集中されてゐる。セエ氏、ミル氏、及び私は、消費の節約、需要の中止はないであらう、と云ふ。この場合の状態に關するマルサス氏自身の表現はどうであるか？ 『貨物は、それが要費せる以上の労働を支配せず、又は單にそれを殆んど越さない程しか支配しない程に、多量である。』（譯者註—頁前の「シラフ」を参照）併し若し多量の貨物が僅少の労働しか支配しないならば、凡ゆる労働者は多量の貨物を消費する能力を有つであらう。消費の意思は消費の能力のある何處にも存在する。マルサス氏はこの能力は無に歸せず労働者に移轉せられることを證明してゐるのである。私は彼に同意し、そして消費の能力と意思とがある場合には、常に必然的に需要があるであらう、と云ふのである。

リカード氏は、一般的主張としては、資本は過剰にはなり得ぬと主張してゐるが、併し次の如き讓歩を餘儀なくされてゐる。彼は曰く、『食物の價格が低いにも拘はらず、資本の蓄積が利潤の下落によつて伴はるるかも知れない所の、唯一の場合がある。そしてそれは一時的であらう。而して、労働維持の爲めの基金が人口よりも甚だより速かに増加する時が、即ちそれである。—その時は勞賃は高く而して利潤は低であらう。若しも各人が奢侈品の使用を廢め、而して只

管蓄積に意を注ぐならば、即時に消費することが出来ない程の一分量の必要品が生産されるであらう。數に於て非常に限定されて居る貨物に就いて、疑ひもなく一つの普遍的供給過剰が起り得るであらう、而してその結果として、斯かる貨物の附加的分量に對する需要も有り得なければ、又より多くの資本の使用に對する利潤も有り得ないであらう。若し人々が消費することを廢めれば、彼等は生産することを廢めるであらう。リカード氏はそこで語を次ぐ、『このことを承認したからとて、一般原理に疑を挟むことにはならない。』(註) 彼れのこの(最後の)語には(R註) 私は(決して)【全然】同意することは出来ない。(それは最も完全に一般原理に疑を挟む様に私には思はれる。假令吾々が、リカード氏と共に、人口の増大が確かにこの害惡を救治する——これは眞實ではないが——と假定しても、而も)人口の性質上、十六年又は十八年を経過して後に至る迄は、特定の需要の結果として、労働者の増大は市場に齎らされ得ず、そして(貯蓄による)収入の資本への轉換は遙かにより速かに起り得、一國は兎角人口の増大よりもより急速なる労働の支持の爲めの財本の(分量の)増大を起し勝ちであるからである。併し、このことが起る時に常に、貨物の一般的供給過剰が起るならば、一般的主張として、資本は決して過剰にはならず、又貨物は同一の相對價值を保持するであらう故に供給過剰は單に部分的であるに過ぎずして一般的ではない、と如何にして主張せられ得ようか？

註 Prime. of Polit. Econ. ch. xxi. (p. 343, 3rd edit.) [p. 324, 2d edit.] (譯者註——前掲譯書、三一六一—三二七頁)

R註 私は實際『數に於いて非常に限定されて居る貨物に就いて、一つの普遍的供給過剰が起る

であらう』と云ふ。併しかゝる事態が存在し得ようか？ かゝる限定された數の貨物のみが生産せられるであらうか？ それは不可能だ、蓋し労働者は、若し彼等が便宜品及び奢侈品を得ることが出来るならば、喜んでそれを消費するであらうし、そして假定されてゐる場合に於いては、親方達の目的そのものを促進する爲めには、彼等の労働者が支拂の意思と能力とを有つ貨物を生産するのが彼等の利益であらうからである。

上記の諸論者及び其の祖述者達が陥つてゐる様に思はれるもう一つの根本的誤謬は、懶惰又は安易の愛好といふが如き、かくも一般的な且つ重要な人性の原理の影響を、考慮に入れてゐないことである。

若し或る數の農業者と或る數の製造業者とが彼等の剩餘の食物と衣服とを相互に交換して居り、そして彼等の生産力が突如として、兩當事者が同一の労働を以て、彼等が以前に獲得してゐたものに加へて、奢侈品を生産し得る程、増大せられたならば、奢侈品の中農業者が生産した部分は奢侈品の中製造業者によつて生産せられた部分と交換せられるであらうから、需要に關しては如何なる種類の困難もあり得ず、そしてその唯一の結果は、兩當事者がより豊かになり且つより多くの享樂品を得るといふ、好都合な結果であらう、と想像せられてゐる(註)。

註 Edinburgh Review, No. LXIV. p. 471.

相互に満足を與へるこの交渉に於いて(R註)、二つの事が當然の事と前提されてゐるが、これこそが正に論點なのである。すなはち懶惰を措いて奢侈品が常に選ばれるといふこと、及び各當

事者の利潤（の適當な比例）は收入として消費せられるといふことが、當然の事と前提されてゐる。かゝる事情の下に於ける貯蓄の願望の結果が如何であるかは、程なく考察するであらう。奢侈品を措いて懶惰を選ぶの結果は、明かに、増大せる生産力の果實に對する需要の缺乏を齎らし、そして労働者を解雇することであらう。耕作者は、今や前から習ひとなつて來てゐる必要品及び便宜品をより少なる煩勞と勞苦とによつて獲得し得、そしてリボンやレイスや天鵝絨に對する彼の嗜好は十分に形造られてゐないので、十中八九は懶惰に身を委ね、そして土地にはより少い勞働を使用することであらう。然るに製造業者は、その天鵝絨の賣行が寧ろ思はしくないのを見出して、彼等の製造業を中止し、そして殆んど必然的に、農業者と同一の懶惰な状態に陥るに至るであらう。奢侈品（及び便宜品）に對する有效な嗜好が、すなはち適當に勤勞を刺戟する如き嗜好が、必要とされる瞬間に現れる許りになつてゐることなく、緩慢に成長するものであることは、人類社會の歴史が、十分にこれを證示してゐる。そして人類はその生産し且つ消費する能力を有する總てを生産し且つ消費し、そして勤勞の報酬を措いて懶惰を選ぶものでは決してないであらうといふことを、當然のことと前提するのが極めて重大なる誤謬であることは、吾々の知る諸國民の若干を一寸觀察しただけで十分にわかるであらう。併し私は次節に於いてこの種の觀察を爲す機會を有つであらう。讀者はそれについて見られ度い。

R註　こゝで又もマルサス氏は命題を變更してゐる。吾々は奢侈品を措いて懶惰を選ぶことはなからうとは云はない。私はさうなることもあらうと思ふ、従つて若し問題が生産の誘因に關す

るのであるならば、吾々の間には意見の相違はないであらう。併しマルサス氏は、誘因は貨物を生産するに足る程強いと想像し、然る後、それに對する需要はないであらうから、それが生産せられて後それに對する市場はないであらう、と主張するのである。

吾々が否定するのはこの命題である。吾々は、貨物は總ての事情の下に於いて生産せられるであらう、とは云はない、併し、若しそれが生産されるならば、それを消費する意思と能力とを有つ或る者が常にあるであらうと、換言すればそれに對する需要があるであらうと、吾々は主張する。マルサス氏は、社會が蓄積せず、奢侈品を措いて懶惰を選び、勞働を需要せず、其の土地を耕作しない、といふ場合を以て、資本が蓄積され、活動が懶惰に代り、勞働に對する最大の需要があり、そして土地が最も生産的ならしめられるといふ——蓋しこれ等總ては蓄積といふ語の意味に含まれてゐることであるから——正反對の過程より生ずる惡結果の證據として、持出してゐる。人は奢侈品を措いて懶惰を選ぶであらう！　この時には奢侈品は生産されないであらう、蓋しそれは、懶惰の反對たる勞働なくしては、生産せられ得ないから。若し生産せられ得ないならば、それは市場を缺き得ない、其の供給過剰はあり得ない。

（勤勉なる者の生産物に對する需要が不足するのは、特殊的には、懶惰なる者の側に於ける生産の不足であり、そして若し怠惰なる者が生産せしめられるならば、剩餘は消失するであらう、と云はれてゐる。併しこのことは明かにこゝでの問題ではない。眞實の問題は、社會の現實の習慣と嗜好との下に於いて、貯蓄し且つ生産する氣を有つ或る數の人間が、若し彼等が其の生産物